石川県埋蔵文化財情報

第　47　号

巻頭図版（一針Ｃ遺跡　観法寺墳墓群　矢田遺跡）

令和３年度の発掘調査から …… 所長　川畑　誠 …（1）

発掘調査略報

一針Ｃ遺跡（小松市）……（5）

観法寺墳墓群・観法寺ジンヤマ横穴（金沢市）……（7）

矢田遺跡（七尾市）……（10）

令和３年度下半期の出土品整理作業 ……（13）

令和３年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 ……（16）

石川県内における水のマツリ～古墳時代を中心に～ …… 新美祥人夢 …（18）

基調講演「古墳時代の水のマツリ」（穂積裕昌氏）の概要 ……（24）

調査研究報告

中能登町徳丸遺跡の縄文土器 …… 久田正弘 …（30）

小松市吉竹遺跡の絵画土器と山陰系甑形土器および石川県内のＬ字形石杵について
…… 久田正弘 …（44）

古墳時代モガリについての一思考－黒瀬御坊山Ａ２号墳出土剣の囲蛹殻をめぐって－
…… 伊藤雅文 …（50）

七尾市矢田遺跡「稲の種子名列記木簡」について …… 山内花緒・和田龍介 …（64）

2022年9月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

一針Ｃ遺跡

Ｑ区下層全景（上が北）

一針Ｃ遺跡は、小松市北部を流れる梯川右岸の中流域に位置する、弥生時代から中世の集落遺跡である。春期に上層の調査を終えたＱ区では、秋期に下層の調査を実施した。不定形ながら大きく弧を描く溝は弥生時代後期の平地式建物の外周溝で、また周辺小穴にはその主柱穴となり得るものを含む。なお深い遺構には秋期調査で新たに検出した中世の井戸もみられる。

弥生時代の川跡（Ｐ１区下層）（上が北）

同じく春期に上層を調査したＰ区の下層の状況を示す。Ｐ１区とはＰ区のうちの西側部分（下流側）を指す。幅約 10 ｍの弥生時代の川跡を確認しており、黒っぽくみえる部分が川跡で、「Ｕ」字状に大きく蛇行する状況が見て取れる。木製品がややまとまって出土した箇所（星印）や、川跡を横断する杭列（丸印）もみられた。杭列は南に派生する溝（矢印）に水を送る分水堰の一部である可能性がある。

Q区下層全景（上が北）

弥生時代の川跡（P１区下層）（上が北）

木製品（★）

杭列（●）

写真解説

観法寺墳墓群

調査地遠景（北北西から）

山側環状道路梅田インター近くの丘陵上に立地する。観法寺パーキングエリア建設前は、丘陵が左側へと続いていたことがわかる。写真右側（西側）には平野が広がり、かなたには河北潟を望むことができ、丘陵からの眺めがよかったことが想像される。住宅の建ち並ぶ手前の谷間には観法寺谷遺跡、丘陵より奥の谷間には観法寺ヤッタ遺跡が存在する。

墳丘墓と周溝（西から）

尾根を切るように作られた墳丘墓の周溝を３基確認した。これは最も西側で検出したＳＤ３で、墳丘墓にかかわる壺形土器が埋土から出土した。残存長5.2ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.7ｍを測る。この周溝を挟む西側、東側にそれぞれ墳丘墓が存在したとみられる。

調査地遠景（北北西から）

墳丘墓と周溝（西から）

写真解説

矢田遺跡

調査区遠景（B区）（南東から）

七尾市街地東側の沖積平野に位置し、北西には七尾湾を望む。北東側のA区では古墳時代～古代の土器や木簡、木製小型祭祀具などが、南西側のＢ区では弥生～古墳時代の祭祀に使用したと考えられる土器や石製品、製作途中の木製品などが良好な状態で出土した。

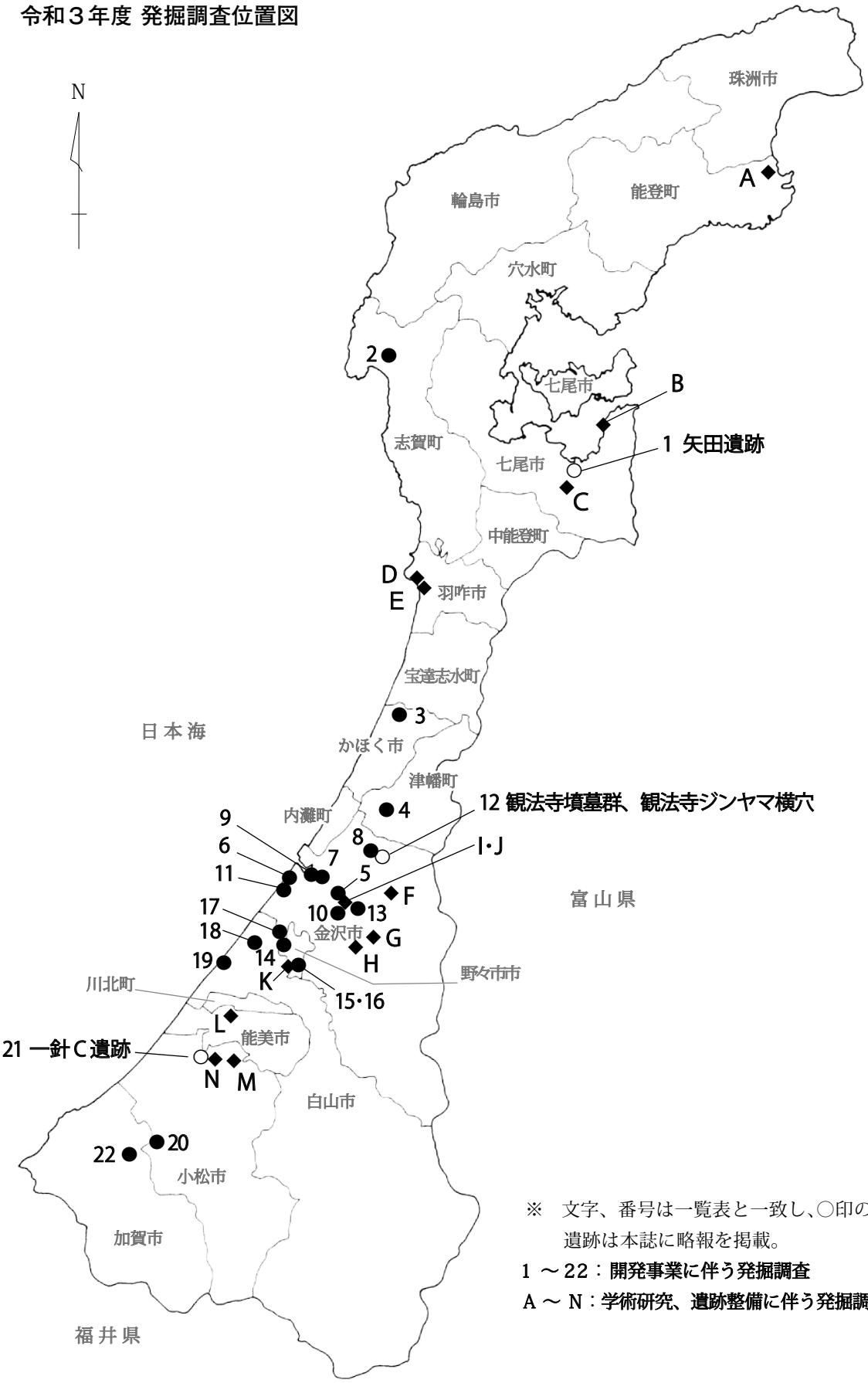
川跡から出土した刀の把（右）と案脚（左）

Ｂ区からは、袋状鉄斧の柄や建築部材など多くの木製品が出土した。その中でも古墳時代の川跡（SD07）からは、頭部が楔形を呈する未製品の刀の把や案脚が出土し、在地有力者の存在がうかがえる。案脚は、『木器集成』で「A形式」とされる、棒状の脚で天板を受ける四脚タイプの案の一部であると思われる。

調査区遠景（B 区）（南東から）

川跡から出土した刀の把（右）と案脚（左）

令和３年度 発掘調査位置図



※　文字、番号は一覧表と一致し、○印の遺跡は本誌に略報を掲載。

1 ～ 22：開発事業に伴う発掘調査

A ～ N：学術研究、遺跡整備に伴う発掘調査

令和３年度の発掘調査から

所長　川畑　誠

はじめに

令和３年度に県内では、開発に伴う緊急発掘調査22件45,401㎡と、学術調査、保存目的の発掘調査14件3,414㎡が、それぞれ実施された（令和４年３月１日現在）。令和２年度と比較すれば、緊急発掘調査が16件の減（20,846㎡減）、学術調査、保存目的の調査が３件の増（1,276㎡増）となる。

緊急発掘調査を実施地域別でみれば、北加賀地域、特に区画整理事業が多い金沢市、野々市市に集中する状況が継続しており、調査件数12件と半数以上を占める。一方、能登地域が２件、南加賀地域が３件と、北加賀地域以外の地域における調査は低調に推移する。学術調査、保存目的の調査は、７市町で実施されており、継続事業が多いことから前年度と同様な傾向を示す。なお、現地説明会は、各主催者が、新型コロナウィルス感染症対策として開催方法に様々な工夫を行い、№１・７・８・21・A・C・D・I・Jなど約10遺跡で実施されている。県民が、発掘現場で調査担当者の説明を聞きながら、成果に直接触れる機会が徐々に戻りつつあり、各主催者の労苦に感謝を申し上げたい。

１．石川県埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査

県教委から当財団に委託された発掘調査は５件14,550㎡と、平成10年度の財団設立以降、最も少ない調査面積となった。これは、平成27年度から本格化した北陸新幹線（敦賀延伸）建設に係る発掘調査が、令和２年度に完了したことに加えて、国土交通省道路事業に係る発掘調査が低調であったことによる。本誌では、七尾市矢田遺跡（№１）、金沢市観法寺墳墓群、観法寺ジンヤマ横穴（№12）、小松市一針Ｃ遺跡（№21）秋期調査の概要を掲載している。

令和３年度発掘調査一覧表

№.	掲載号	遺跡名	所在地	時代	内容	調査面積（㎡）	事業者	事業名
22	46号	庄・西島遺跡	加賀市津波倉町	弥生～中世	集落跡	3,460	国土交通省	一般国道8号改築（加賀拡幅）
12	本号	観法寺墳墓群、観法寺ジンヤマ横穴	金沢市観法寺町	弥生～近世	墳墓、集落跡	2,550		一般国道159号改築（金沢東部環状道路）
21	46号・本号	一針C遺跡	小松市一針町	弥生～中世	集落跡	4,340		梯川河川改修
19	46号	小川B遺跡	白山市上小川町	弥生～中世	集落跡	1,830	土木部	地方道改築 金沢美川小松線
1	本号	矢田遺跡	七尾市万行町、矢田町	弥生～古代	集落跡	2,370		都市計画道路外環状線街路整備工事
5件						14,550		

七尾市矢田遺跡（№１）は、七尾市街地東側の沖積平野に立地する弥生時代～古代の集落遺跡である。木製品に注目すべきものが多く、Ａ区の旧河川から平安時代前期と考えられる木簡、鍬形や短冊形等の小型祭祀具が、また、Ｂ区旧河川から古墳時代中期の刀把、鞘といった刀装具未成品や案脚がそれぞれ出土している。特に、Ａ区出土の木簡は、全国初の「稲の種子名列記木簡」出土事例となる。本号に釈文等の内容を掲載しており、今後の研究の深化に大いに期待したい。

金沢市観法寺墳墓群、観法寺ジンヤマ横穴（№12）は、金沢市北東部の森本丘陵に立地する。丘陵

尾根線に立地する観法寺墳墓群では、弥生時代後期末～古墳時代前期の墳丘墓を３基以上確認した。令和４年度の墳丘南東側の調査に注目したい。また、弥生時代後期の円筒土坑や中・近世の墓地を確認している。丘陵北側斜面中腹に位置する観法寺ジンヤマ横穴は、後世の斜面崩落が進んでおり、１基の玄室奥壁がわずかに残る状態であった。

小松市一針Ｃ遺跡（№21）は、梯川右岸に立地する弥生時代～中世の集落遺跡であり、平成25年度から継続的に調査を進めている。10月から再開した秋期調査は、３地区に分かれ、上流側から弥生時代の自然河川、弥生～古墳時代の集落域、中世の集落域を確認している。なお、令和３年度春期調査については、第46号で概要を報告している。

２．市町等が実施した緊急発掘調査

市町等が調査主体となった緊急発掘調査は、17件30,851㎡を数える。市町別では、金沢市が８件17,462㎡（金沢大学１件含む）、野々市市が３件4,086㎡、白山市が２件5,825㎡、その他４市町４件3,478㎡となり、大型区画整理事業に起因して金沢市の調査面積が突出した状況を呈する。

主な調査成果として、金沢市南新保Ｃ遺跡（№７）、南森本遺跡（№８）、白山市相木カミノオキョウ遺跡（№18）を紹介する。南新保Ｃ遺跡では、弥生～古墳時代の集落域中心部を調査し、竪穴建物、平地建物、方形周溝墓、自然流路を検出し、玉作り関連遺物が多数出土している。また、同調査では、平安時代前期の川跡から船材と考えられる長大な材や杭を用いた施設を確認しており、船の管理施設や船着場の可能性が検討されている。全国的にも類例が少ない事例であり、その性格に注目していきたい。宅地造成に係る南森本遺跡の調査では、15世紀代の館の堀跡を検出し、大量の土師器皿等が出土している。館跡の主として、周辺に居住した有力者である亀田氏一族が想定されている。手取川扇状地扇端部に立地する相木カミノオキョウ遺跡では、弥生時代後期と古墳時代初頭の竪穴建物、７世紀後葉以降の竪穴建物、掘立柱建物を確認している。特に、７世紀後葉以降の建物群は、扇状地の各所で活発に進められた開発の一端を示す好例といえよう。

３．学術調査、保存目的の発掘調査

学術調査または保存目的の発掘調査は、14件を数え、七尾市三室まどかけ１号墳（B）、金沢市高峠城跡（F）、小松市立明寺窯跡（M）等の５件は、新規または再開された調査となる。

七尾市三室まどかけ１号墳は、七尾湾を望む丘陵先端に立地し、これまで数回の調査が実施されている。今回は、横穴式石室の３次元測量調査を行い、保存の基礎資料を得ている。

羽咋市の国史跡寺家遺跡に近接する柳田シャコデ廃寺跡の調査は、平成26年度から実施されている。これまでの調査で、搭心礎穴、幢竿（どうかん）と考えられる大型柱穴群、回廊・南門・西門等を検出し、寺院規模をほぼ確定している。また、これまで８・９世紀代と考えられてきた存続年代が、柱穴出土遺物から11世紀代であることが新たに判明した。この古代的な伽藍配置を踏襲する寺院の性格について、寺家遺跡や文献にみえる「気多神宮寺」とも係わり、今後の大きな課題の一つといえる。

石川県金沢城調査研究所は、昨年度から金沢城跡二ノ丸跡の確認調査を実施している。二ノ丸に所在した御殿は、その機能から「表向」「御居間廻り」「奥向」に分けられる。調査は、「表向」の広縁北側、表式台北側、実検ノ間、虎ノ間等を対象に実施され、礎石基礎列等を確認している。また、数寄屋屋敷西堀縁の石垣保全に伴い、石垣の現況を把握するための調査を実施している。

小松市南野台遺跡（N）では、平安時代後期の大規模な造成と礫敷き遺構等を検出し、多量の遺物が出土している。加賀国総社であった「府南社」の実態解明に向けた重要な成果といえよう。

令和3年度　県内遺跡発掘調査一覧

◎開発に伴う緊急発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積	調査担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	㎡	
1	矢田遺跡	七尾市万行町～矢田町		○	○	○			2,370	県
	弥生～古墳時代の溝から祭祀に使用したと考えられる土器や石製品、製作途中の木製品が出土したほか、古墳時代～古代の土器や木簡、木製小型祭祀具等が出土した。									
2	里本江B遺跡	羽咋郡志賀町里本江				○	○		144	町
	柱穴、溝、土坑を検出し、土師質土器、須恵器等が出土した。									
3	二ツ屋E遺跡	かほく市二ツ屋	○	○	○	○			2,688	市
	小穴、土坑、溝等を検出し、土師器、須恵器、陶磁器、石器等が出土した。調査地が弥生時代末～古墳時代前期頃の集落縁辺であることを確認した。									
4	清水遺跡	河北郡津幡町清水					○	○	546	町
	津幡川の自然堤防上に位置する遺跡で、少量であるが中近世の陶磁器片が出土した。主な遺構は直交する溝と不整形の落ち込みであり、田畑などの生産域と思われる。									
5	芳斉2丁目遺跡（3番地点）	金沢市芳斉2丁目		○	○	○		○	520	市
	直臣の武家屋敷地と加賀八家長家下屋敷地の調査。区画溝、井戸、ゴミ穴等を検出。近世陶磁器・土器が出土した。下層においては、弥生～古墳時代の落ち込みと包含層を確認した。									
6	金石本町遺跡	金沢市金石本町			○				74	市
	遺物包含層で弥生時代から江戸時代の遺物が出土した。遺構検出面は地表下から1.9m下にあり、古墳時代初頭の土器とともに溝、土坑、ピット（柱穴か）を検出した。									
7	南新保C遺跡	金沢市南新保町		○	○	○			8,500	市
	弥生時代中期から古墳時代前期の方形周溝墓や竪穴建物、平地式建物、川跡を検出した。また、船材と考えられる長大な木材を用いた平安時代の水辺の施設がみつかった。									
8	南森本遺跡	金沢市南森本町		○	○	○	○		550	市
	弥生時代～古墳時代の溝、竪穴建物、古代の溝、中世の堀、溝、土坑、柱穴などを検出した。中世の遺構からは大量の土師器皿の他、陶器、青磁、白磁、木製品、漆製品、古銭などが出土した。									
9	南新保ゴマヂマチ遺跡	金沢市南新保町		○	○		○		6,500	市
	弥生時代終末から古墳時代前期にかけての溝、室町時代の方形区画、土坑を検出した。弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器などが出土した。									
10	寺町六斗広見遺跡	金沢市寺町5丁目						○	42	市
	調査地は寺町台伝統的建造物群保存地区内で、広見と呼ばれる江戸時代の火除け地にあたる。整地層と直径1m前後の土坑を複数検出し、多くの陶磁器が出土した。									
11	専光寺養魚場遺跡	金沢市専光寺町		○	○				684	市
	工場建設に伴う発掘調査。調査地は弥生時代の集落跡で、周溝を持つ建物跡や土坑などを検出した。また、弥生時代中期の土器が多く、鳥形土製品が出土した。									
12	観法寺墳墓群、観法寺ジンヤマ横穴	金沢市観法寺町		○	○		○	○	2,550	県
	周溝で区画された、弥生時代後期～古墳時代初め頃の墳丘墓を3基以上確認したほか、弥生時代の円筒土坑や中世～近世の墓地、道状遺構、また、丘陵北側斜面からは横穴墓1基を確認した。									
13	宝町遺跡	金沢市宝町						○	592	大学
	調査地は加賀藩の与力町にあたる。武家地内の土坑を検出し、土坑内から陶磁器、土人形等がまとまって出土した。									
14	田尻ジッタ遺跡	野々市市田尻町	○				○	○	2,449	市
	中世後半の集落を発見した。溝で区画された方形の宅地内に多数の掘立柱建物や竪穴状遺構が密集しており、青磁や瀬戸天目茶碗等の陶磁器や、茶臼などが出土した。									
15	上林イシガネ遺跡	野々市市中林				○	○		882	市
	古代の小穴を多数発見した。調査区の北側は自然流路が複数みられ、また遺構も希薄であることから、今次調査地が遺跡の縁辺部であることがわかった。									
16	末松遺跡	野々市市中林	○	○	○	○	○		755	市
	現「郷用水」の前身と考えられる自然流路があり、その周辺に中世・古代の遺構・遺物を確認した。多量の鉄滓が廃棄された中世の土坑や、大型の掘方をもつ古代の柱列等がある。									
17	横江荘遺跡	白山市横江町		○		○			160	市
	弥生時代から近代の川跡を確認した。弥生土器、須恵器が出土した。									
18	相木カミノオキョウ遺跡	白山市相木町		○	○	○	○		5,665	市
	弥生時代の竪穴建物、土坑、古墳時代の竪穴建物、古代の竪穴建物を確認した。弥生土器、須恵器、土師器が出土した。									
19	小川B遺跡	白山市上小川町		○		○	○		1,830	県
	弥生時代後期の土坑や溝、奈良・平安時代の掘立柱建物7棟や溝、中世の土坑等を確認した。									

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積	調査担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	㎡	
20	戸津オオタニ遺跡	小松市上荒屋町				○			100	市
	奈良時代の須恵器と性格不明の遺構を確認。付近に須恵器窯の窯体が存在すると考えられるが、確認に至らなかった。									
21	一針C遺跡	小松市一針町		○	○	○	○		4,340	県
	弥生～古墳時代の川跡、土坑、溝、中世の水田や水路、掘立柱建物、井戸等を確認した。井戸からは井戸枠や木製のひしゃく、川跡からは文様のある高杯などが出土した。									
22	庄・西島遺跡	加賀市津波倉町	○	○		○	○		3,460	県
	弥生時代の木棺墓や土坑、平安時代の掘立柱建物や井戸、土器廃棄土坑や粘土採掘坑、道路跡等を確認した。									

調査担当　市・町：市・町教育委員会等　**県**：県埋蔵文化財センター　**城**：県金沢城調査研究所　**大学**：金沢大学

◎学術研究、保存目的の発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積	調査担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	㎡	
A	旧松波城庭園	鳳珠郡能登町松波					○		500	町
	国名勝。整備に伴う調査。園地遺構、礎石建物、礫敷遺構などを検出した。									
B	三室まどがけ1号墳	七尾市三室町			○				64	市
	海を臨む丘陵先端部に立地。昭和32年の市史編纂事業に伴い、初めて学術的な古墳調査を行ない学史的に重要。平成5年に石室の測量調査を実施した。今年度は全長8.9mの横穴式石室の3次元測量を実施した。									
C	七尾城跡	七尾市古府町竹町古屋敷町入会地					○		94	市
	国史跡。七尾城跡主郭部にある調度丸の石塁及び遺構の広がりを把握するための確認調査。曲輪を造成した痕跡を検出し、七尾城の築城時期、及び変遷を考える上で重要な発見となった。									
D	柳田シャコデ廃寺跡	羽咋市一ノ宮町		○		○	○		290	市
	古代寺院の寺域の確認調査。東側の遮蔽施設、西側と南側の門跡と見られる柱穴列を確認し、寺域南側の把握が進んだ。									
E	寺家遺跡	羽咋市寺家町				○	○		235	市
	国史跡。中世の方形土塁遺構の確認調査。　土塁に伴うと考えられる溝遺構を検出した。									
F	高峠城跡	金沢市不室町					○	○	100	市
	虎口で礎石建物を検出し、表土直下から16世紀後半の土師器皿及び16世紀末の中国漳州窯系の青花碗が出土した。									
G	涌波遺跡（土清水塩硝蔵）	金沢市涌波町						○	135	市
	国史跡。整備に伴う発掘調査。調査地は、江戸時代の黒色火薬製造施設の原材料を粉末に加工していた「搗蔵」と呼ばれる施設で、水路跡や石敷遺構などを確認した。									
H	加賀藩主前田家墓所	金沢市野田町						○	10	市
	国史跡。豪墓五輪塔復元整備工事に先立つ発掘調査。豪墓五輪塔の基礎構造が判明。									
I	金沢城跡（二ノ丸）	金沢市丸の内						○	1,600	城
	国史跡。二ノ丸御殿復元整備に伴う確認調査。二ノ丸御殿の北東部（表式台、虎ノ間、実検ノ間、広縁）に対応する礎石基礎列等を確認した。									
J	金沢城跡（数寄屋屋敷西）	金沢市丸の内						○	240	城
	国史跡。数寄屋屋敷西堀縁石垣の保全に伴う調査。昭和53年修理時の掘削範囲、その背後の斜面裾部にある土留石垣の広がり、斜面上部にある鉢巻石垣の根石を確認した。									
K	末松廃寺跡	野々市市末松	○	○	○	○	○	○	44	市
	国史跡。金堂南西隅の調査を実施し、金堂を取り囲む溝及び建物の周囲に廃棄された瓦を発見した。									
L	西山古墳群	能美市徳久町			○				42	市
	国史跡。古墳の周溝・埋葬施設を確認し、鉄製品等が出土した。									
M	立明寺窯跡	小松市立明寺町			○	○			20	市
	須恵器窯3基、白鳳期の窯跡を新たに2基確認。操業開始時期は6世紀後半（TK43型式）まで遡ることがわかった。									
N	南野台遺跡	小松市古府町	○	○	○	○	○		40	市
	礎石総柱建物、土器（かわらけ）等が出土した。古代から中世にわたる遺構と遺物、加賀国総社「府南社」との関連性が高まる成果。									

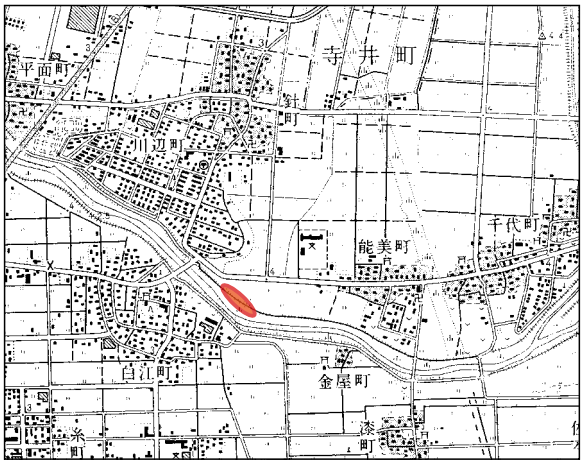
調査担当　**市・町**：市・町教育委員会等　**城**：県金沢城調査研究所

※本データは「令和3年度発掘報告会」（令和4年3月6日）の当日資料を転載（一部改変）。

一針（ひとつはり）C 遺跡

所 在 地　小松市一針町地内
調査期間　4,340㎡（今回報告　秋期分2,180㎡）
調査面積　令和３年４月12日～６月10日
　　同年10月５日～12月15日

調査担当　浜﨑悟司　松山和彦　安中哲徳
　　水田　勝　小森康弘　岩城栄淳
　　中谷光里　齋藤綾乃　畝麻由美



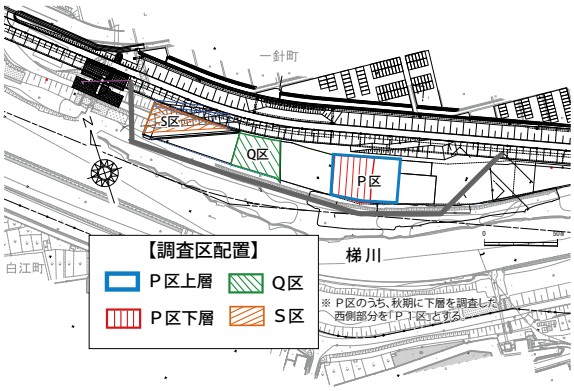
遺跡位置図（S=25,000）

調査成果の要点

・下流側のＳ区上層では、中世の井戸や土坑・溝などを確認した。井戸には桶を井戸側として利用する例がみられた。
・中央のＱ区下層は弥生時代～古墳時代の居住域にあたる。平地式建物の外周溝の一部と推定される弧状の溝が数条検出され、弥生時代後期頃の土器が出土した。
・上流側のＰ１区下層において弥生時代の蛇行する川跡（自然河川）を確認した。幅は約10ｍで検出面からの深さは80cm弱である。遺物は左岸側から集中的に出土した。

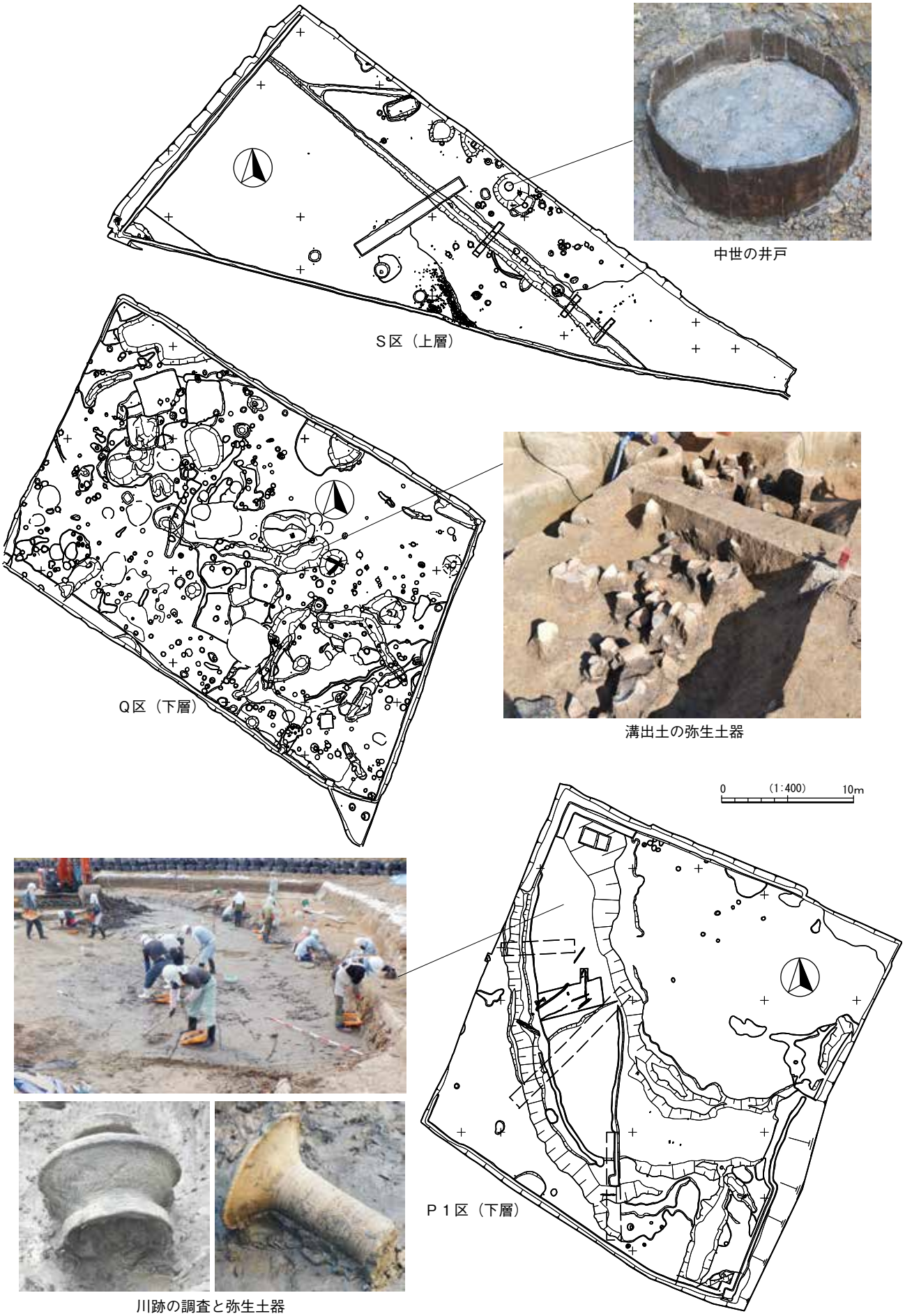
一針Ｃ遺跡は、梯川右岸に位置する弥生時代～中世の集落遺跡である。平成25年度から河川改修に先立つ発掘調査を実施している。浸食・堆積などの河川の影響を断続的に蒙りやすい場所であるため、調査地点の多くで複数の時代の生活面の重複が確認できる。なお、近年は新設堤防内側の河川敷を調査しており、夏場の増水期を挟んだ春期（４～５月）と秋期（10～12月）の調査となっている。

令和３年度の春期の調査については本誌第46号で紹介したところであり、併せて参照願いたい。今回は秋期調査における３調査区（Ｓ区・Ｑ区・Ｐ１区）を対象とする。まず下流側のＳ区（上層）では中世の井戸・土坑・溝を確認した。井戸には桶を利用したものがあった。中央のＱ区（下層）には東に隣接するＯ区（下層）から続く弥生時代～古墳時代の居住域が広がる。建物構成の把握は今後の課題であるが、弥生時代後期頃の弧状の溝が数条確認されており、それらについては平地式建物の外周溝の一部と推定される。また点在する小穴の土層断面にも柱痕跡が観察できるものが含まれる。残る上流側のＰ１区では弥生時代の幅約10ｍの川跡を確認した。調査区内で流路は「Ｕ」の字状を呈し、大きく蛇行する様子が窺われる。弥生時代中期に遡る遺物もみられる。また、川跡を横断する杭列は、そのやや上流側で溝が分岐することから分水堰の一部と推定できる。　（松山和彦）



令和３年度 調査区割図

調査地遠景 下流側（西南）から望む

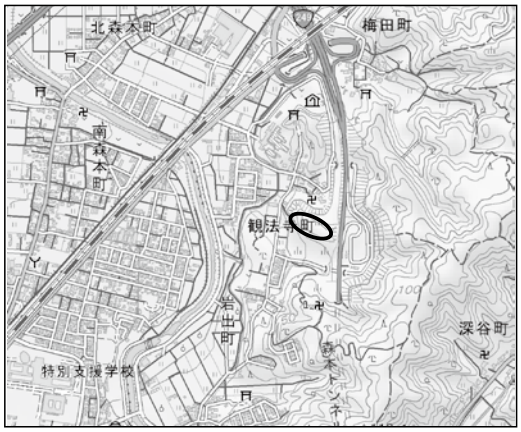


一針Ｃ遺跡令和３年秋期の調査区（1/400）

観法寺墳墓群、観法寺ジンヤマ横穴

所 在 地　金沢市観法寺町地内
調査面積　観法寺墳墓群 2,450㎡
　　観法寺ジンヤマ横穴 100㎡

調査期間　令和３年５月10日～令和３年12月24日
調査担当　柿田祐司、山川史子、安中哲徳、奥座普、島本将宏



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 丘陵上に弥生時代後期末～古墳時代前期の４基の墳丘墓を確認した。
- 弥生時代後期とみられる円筒土坑を２基確認した。
- 丘陵北西部で中世～近世の墓地を確認し、北側斜面からは中世土師皿が完形で出土した。
- 丘陵北側斜面で古墳時代後期の横穴墓を検出した。

観法寺墳墓群、観法寺ジンヤマ横穴は、河北潟から南東約５km の金沢市北東部に位置し、森下川右岸の森本丘陵上に立地している。金沢東部環状道路（国道159号・通称山側環状）改築に伴い、平成30（2018）年度、令和２（2020）年度の観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡の調査に続き、今年度は丘陵上の観法寺墳墓群Ⅰ区とⅢ区、丘陵北斜面の観法寺ジンヤマ横穴の調査を実施した。

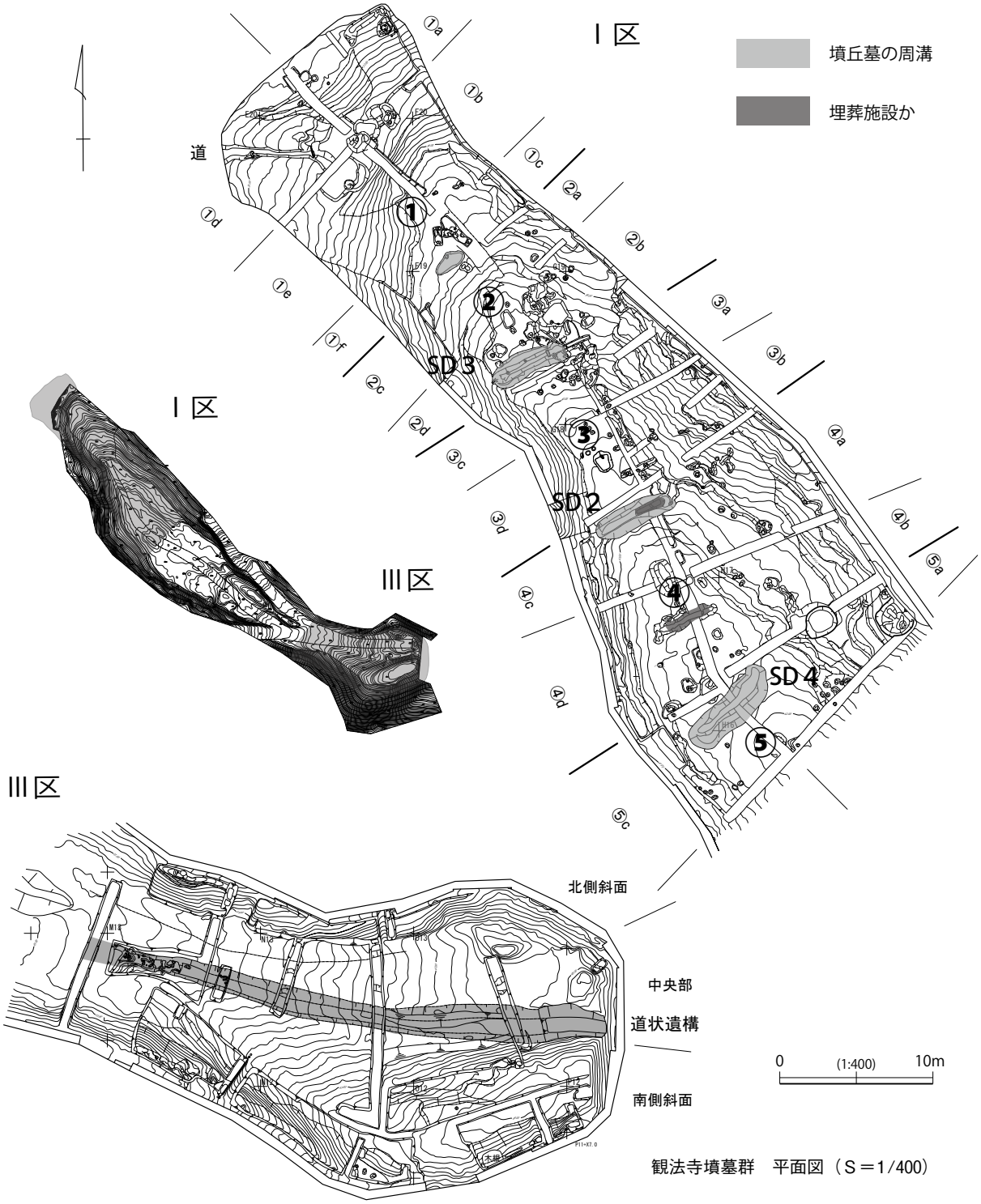
〈観法寺墳墓群〉 2002年の確認調査で丘陵上には墳丘墓の存在が指摘されていたが、丘陵頂部や斜面は工事等でかなり削平され、築造当時の形状を確認することは難しい状態である。調査前の現状地形を元に、北西から南東にかけてⅠ区を①～⑤の小区画に分け調査を進めた。①の北西端平坦面と２段目の平坦面は中世～近世の墓地である。骨壺が納められている円形や長円形の土坑を５基確認したが、近世～近代の墓跡とみられる。また、火葬骨や灰が入る方形に近い形状の土坑も存在し、埋土や上面から中世の土師器皿が出土したものもあり、中世の墓坑とみられる。

②～⑤の各境に墳丘墓の周溝を３基確認した。①と②の境にも周溝の残欠様の溝状遺構が検出できたが、不明確である。①ｃ、①ｆの平坦面とその北西側斜面で墳丘墓を構成していた可能性があるが、墓域整地に伴い斜面西側は特に削平を受け、全体形などは不明である。②と③の境の周溝（SD３）や②の頂部平坦面から、壺や器台などの破片が出土し、埋葬施設は特定できていないが、②も墳丘墓であったとみられる。③は２基の周溝で区切られ、溝の中心間で12mを測る。北東側斜面の堆積状況から、尾根に沿ってやや縦長の方形を呈した、幅８～９mほどの墳丘墓と考えられる。SD２内には、北東側に幅40cm、長さ２m ほどの方形墓坑が確認できた。④も２基の周溝で区切られ、溝の中心間で14 mを測るが、長軸の向きや大きさから SD２が④に伴う周溝とみられる。④中央あたりの東西方向の溝は、複数個の墓坑が重複した埋葬施設の可能性がある。⑤の周溝 SD４は北端がやや湾曲し、墳丘部分がその湾曲した方向に若干飛び出したような平面形となっている。四隅突出型墳丘墓

調査区位置図（S=1/4000）

の可能性があり、今後の墳丘南東側の調査で形状や規模が明確になることが期待される。⑤の北側斜面で、深さ170cm、径220cm 前後の円筒土坑２基を確認した。底面に溝などはないが、一方には鉄分が集積した径２cm ほどの円形部分を10箇所ほど確認した。

〈観法寺ジンヤマ横穴〉 丘陵北側斜面にある２基の横穴のうち、北側横穴は崩落が進み原形をとどめておらず、古墳時代の横穴墓と判断できなかった。南側横穴は開口部側が削平され、奥壁側が若干残っている状態であった。遺物は出土しなかったが、周辺丘陵に横穴群の存在が見られる地域であり、それらと同時期の７世紀前半～中葉のものとみられる。（山川史子）



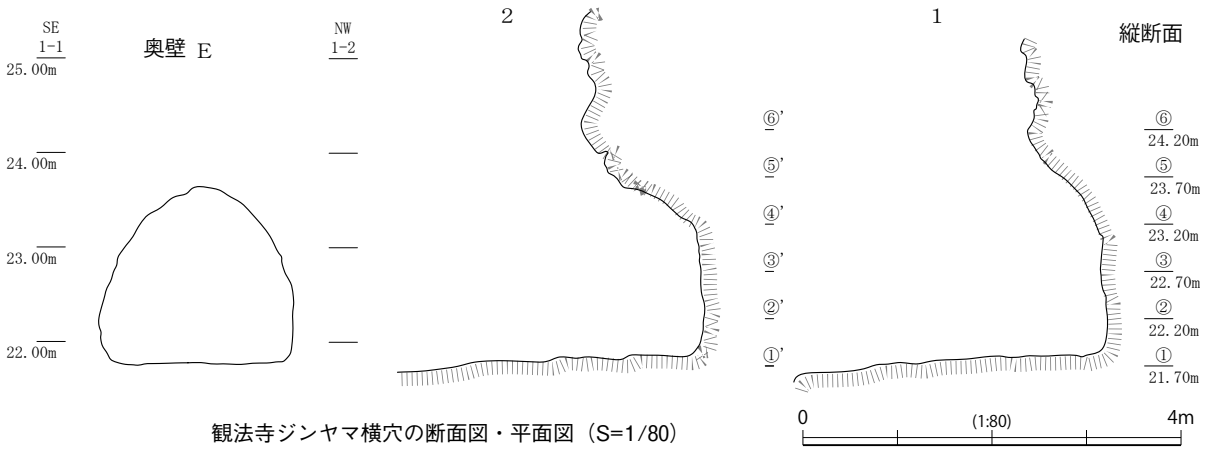
観法寺墳墓群　平面図（Ｓ＝1/400）

墓坑がある周溝（SD2)

円筒土坑

丘陵頂部（東から）

観法寺ジンヤマ横穴（左：南側横穴）



観法寺ジンヤマ横穴の断面図・平面図（S=1/80）

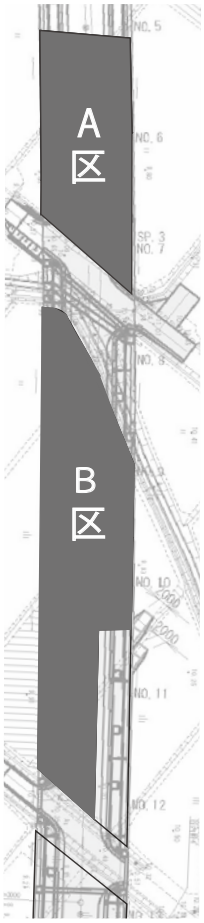
矢田（やた）遺跡

所 在 地　七尾市万行町～矢田町地内　　調査期間　令和３年５月19日～令和３年12月23日
調査面積　2,370㎡　　調査担当　山内花緒　新美祥人夢

遺跡位置図（Ｓ=25,000）

調査成果の要点
・集落付近の旧河川跡・自然流路を中心とした遺構群を検出した。
・主に弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代前期の遺物が出土した。
・異形木製品（弥生後期）、刀把・鞘・案脚（古墳中期）、木簡・小型祭祀具（平安前期）等の木製品が出土し、在地有力者との関わりが想起される。

七尾市街地東側の沖積平野に位置する、弥生時代～中世の集落遺跡である。遺跡の北側には七尾市最大の前方後円墳である矢田高木森古墳（古墳時代後期）が、約１km 北東には古墳時代の大型建物群で著名な万行遺跡が立地する。発掘調査は都市計画道路七尾外環状線の整備工事に伴い実施し、調査地北東側のＡ区（Ａ－１、Ａ－２）と、農道・用水路を挟んで南西側のＢ区（Ｂ－１、Ｂ－２北側、Ｂ－３）を調査した。Ａ区では、主に古墳時代中期～平安時代前期の遺物を含む河川跡を調査した。青灰色を呈する砂層が厚く堆積しており、そこへ流入した砂礫層や黒～暗灰褐色シルト層に遺物が含まれていた。出土した主な遺物は、古墳時代中期～奈良・平安時代の土師器や須恵器、木簡、木製小型祭祀具、曲物等である。

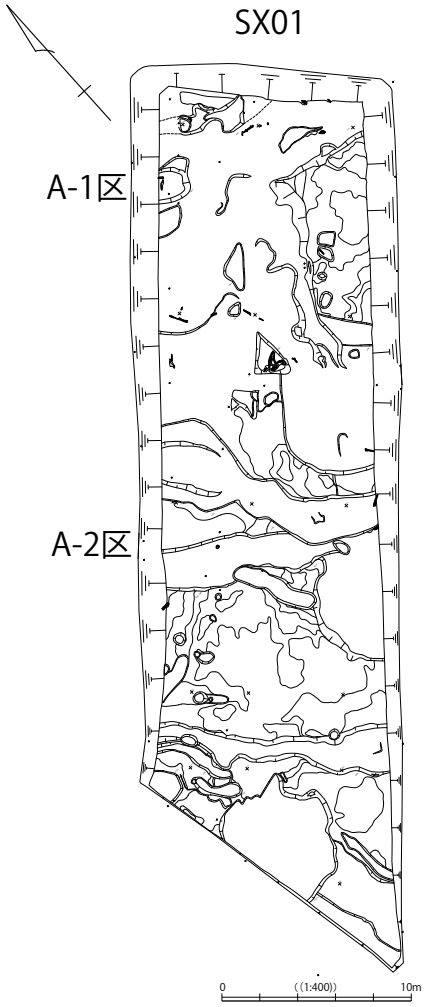


令和３年度 調査区割図

木簡は稲の品種名を組み合わせて列記したもので、国内初の出土事例であり、「稲の種子名列記木簡」と呼称する。平安時代前期と考えられる。釈文等は64～69頁を参照されたい。

木製小型祭祀具は、暗灰褐色シルト層から一括出土したもので、木簡と同時期にあたる。形は四種類に大別でき、鋤形、短冊形が含まれる。短冊形には横一本・縦四本の棒が墨書されており、上部に穿孔する。出土状況により、これらの祭祀具がまとまった状態で使用・廃棄され、水流で運ばれてきたものと推定される。

Ｂ区では、主に弥生時代後期～古墳時代中期、一部古代の遺物が伴う溝や柱穴を調査した。溝は、基本的に川跡が多いと捉えている。Ｂ－３区では、上面埋土及びそれに切り込む遺構をＢ－３区上層、川とそれに伴う遺構群をＢ－３区下層として認識した（Ｂ区平面図右下）。川跡は、上面の埋土（ＳＤ２）及び川の上層（ＳＤ７）・下層（ＳＤ12）に分かれており、調査の過程でＳＤ番号を振った。Ｂ－３区上層からは古墳時代中期の土師器や須恵器・木製品・石製品が、下層からは弥生時代後期の土器・木製品が出土した。特に注目すべき遺物として、川跡から弥生時代後期の異形木製品や、古墳時代中期の刀の把・鞘といった木製刀装具の未成品、案脚等が、大型部材とともに出土している。また、上面埋土からは滑石製双孔円板・手づくね土器が一括で出土した。水辺の祭祀を執り行う在地有力者が、当地の周辺で活動していた可能性がある。



A 区平面図（S=1/400）

A 区 SX01 木簡出土状況

A 区小型木製祭祀具出土状況

本遺跡の位置は七尾南湾すなわち古代の加嶋津から、現在は約800mを測るが、古代には500m 以内だったと推定される。今回の調査により、七尾南湾南東岸にかけて広がる扇状地における、弥生時代～平安時代に渡る人々の活動を知ることができた。A・B区では、弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代前期の三時期について、それぞれ貴重な木製品が出土している。各時代において、祭祀や稲の管理を担った在地有力者が、遺跡の周辺、特に今回検出した川や流路の上流で活動していた可能

小型木製祭祀具集合写真

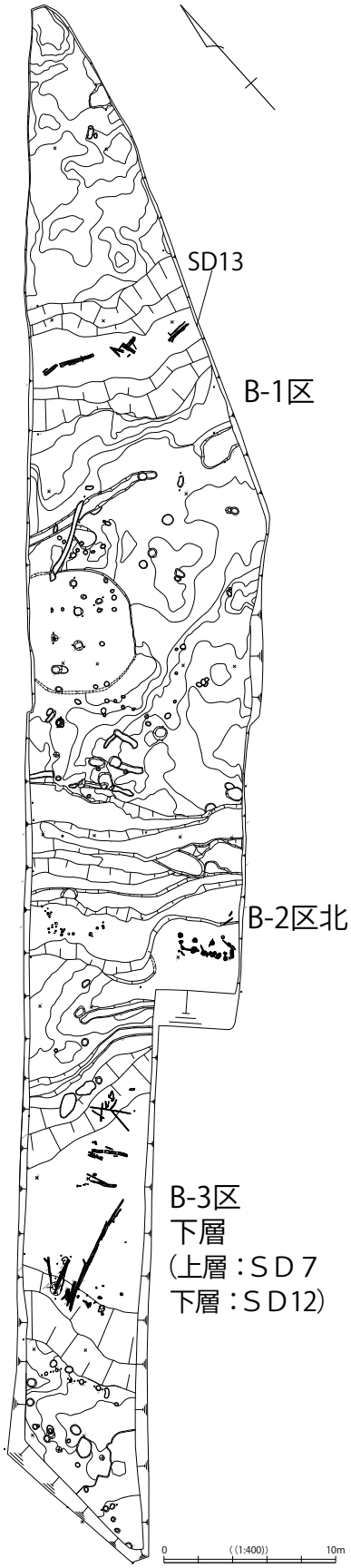
性がある。矢田遺跡の発掘調査は現在も継続中であり、今後の調査・研究に期待したい。

（山内花緒・新美祥人夢）

B 区手づくね土器出土状況

異形木製品

B−３区川跡大型部材等出土状況



B 区平面図（S=1/400）

令和３年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は、上半期から継続している八日市地方遺跡（小松市　平成28・29年度調査）、弓波遺跡（加賀市　平成30年度･令和元年･2年度調査）、金沢城跡（金沢市　令和2年度調査）、金沢城下町遺跡（小将町１番地点）（金沢市　令和元年度調査）、田岸遺跡（七尾市　令和元年度調査）の整理を行った。

八日市地方遺跡は、昨年度の継続作業でC-3区、C-3区西の川跡C2層からＡ層までと住居址・土坑・溝などの遺構等の記名・分類・接合を行った。主に弥生時代の土器・土製品・石器等が出土している。土器は甕、壺、高坏等がある。土製品では円盤状土製品がもっとも多く、他に分銅型土製品や土錘、土玉等があった。川跡では下の層との接合も多く、同一個体の破片の捜索も大変であった。

弓波遺跡では、土器・石器・木器の選別と奈良・平安時代の瓦の実測を行った。選別した遺物の中では石の割合が多く、碧玉未成品や剥片、石核、砥石、軽石等があった。また、石を２、３㎝から10㎝程の大きさに粗く砕いたものが多量にあったが、用途は不明である。石の種類は様々で、色や含有物、硬度等の石質別に分類した。土器では弥生時代、古墳時代、平安時代のものが出土している。

金沢城下町遺跡（小将町１番地点）は、上半期に木製品の実測を行った。下半期は土器の選別とその実測、金属器・石器の実測を行った。土器は近世初期の陶磁器、土師器、弥生土器、瓦を、金属器では簪、釘、煙管、銅銭、石製品では用途不明の加工石を実測・トレースしている。

金沢城跡は、県関係調査グループとともに主に瓦の記名を行った。

田岸遺跡は、県・特定調査グループとともに３グループで縄文時代の土器の実測・トレースを行った。詳細は特定事業調査グループの報告をご覧いただきたい。

（横山そのみ）

八日市地方遺跡　土器復元

八日市地方遺跡　記名・分類・接合

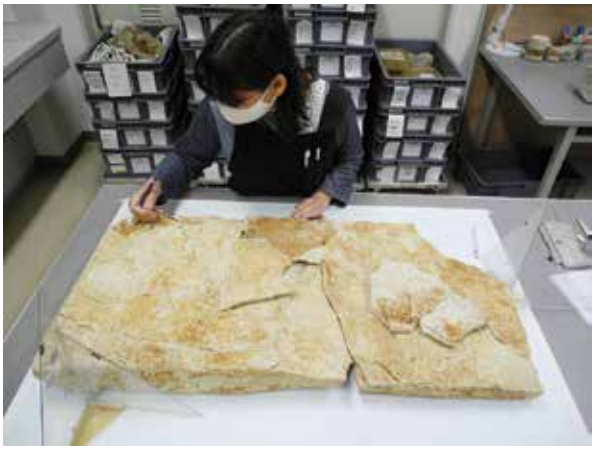
県関係調査グループ

下半期は、漆町遺跡（小松市　平成27年度調査）、田岸遺跡（七尾市　令和元年度調査）の整理作業を行った。

漆町遺跡は、土器、石器の実測・トレース作業を行った。土器は磁器や陶器が中心で皿や碗、すり鉢等小片が多く、傾きに苦労した。石器は火鉢が多く、他には石板、石鉢、砥石、石臼、石錘等の実測・トレース作業を行った。石板は幅が80cm以上と大きく加工痕の残りも良い、描きごたえのある遺物だった。

田岸遺跡は、国関係調査グループ及び特定事業調査グループと合同で整理作業を行った。縄文土器が中心だが、実測の経験が少なく初めは戸惑った。これほど多くの縄文土器を実測する機会もあまりないので、大変良い勉強になった。

（小島紀子）



石器の実測（漆町遺跡）

土器の実測（漆町遺跡）

土器の実測（田岸遺跡）

土器の実測（田岸遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、上半期に引き続き、田岸遺跡（七尾市　平成30年、令和元年度調査）の記名・分類・接合、実測・トレース作業を行った。

記名・分類・接合では、土器片が剝離などで細かくなっていて同一個体かどうかの見極めがとても難しかった。土偶の破片も探したが見つからなかったが、新たに別の土偶の一部と思われる破片が見つかった。石器も多く出土しており、特に石鏃が多かった。

実測・トレース作業は、３グループ合同で行った。３グループ合同ということで、実測を始める前にレクチャーを受けてから実測を始めた。今まで縄文土器の破片の実測しかしたことがない私には、形になった縄文土器の実測は初めてで実測に手間取った。文様も様々で、縄文の向きの見極めは難しかった。 拓本も土器が壊れやすく、文様をうまく出すことが出来ずとても時間がかかった。

（土生久美子）

土偶と土偶の破片（田岸遺跡）

縄文土器の接合（田岸遺跡）

縄文土器の実測（田岸遺跡）

土偶の実測（田岸遺跡）

令和３年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものである。本研究集会は、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流史調査研究事業」の一環として実施しており、令和3年度で22回目の開催となる。

今回の研究集会は、古墳時代の祭祀に焦点を当て、関係する遺構やそれらに関わる遺物について把握し、各地との対比をとおして本県の特質を明らかにすることを目的とするものである。平成29年度実施の第18回集会より、調査研究の深化・充実を目的に、１年目を「基礎研究」、２年目をその成果を踏まえた「研究集会」とする形態で行っている当研究集会であるが、今年度はその１年目の「基礎研究」として、三重県埋蔵文化財センター調査研究４課長の穂積裕昌氏に、「古墳時代の水のマツリ」を題にご講演いただき、講演後には、２年目の「研究集会」を念頭に共同研究者会議を実施し、基本的な研究視点・課題等を確認した。

なお、年始頃からのコロナウィルスの全国的感染拡大に連動し本県の新規感染者数も増加、１月末に発令されたまん延防止等重点措置が解除になる気配すらなく、参加者が一堂に会する形での開催は諦めざるを得ない状況であった。したがって今回はやむを得ず、職員のみ十分な間隔を確保した上で対面参加とし、共同研究者と他機関からの参加者についてはZoomミーティングによるオンライン参加とする、ハイブリッド方式での開催とした。

1　主　催　　公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

2　会　場　　石川県埋蔵文化財センター研修室

3　参加者　　当法人職員、県内の埋蔵文化財関係者。対面参加者67名。オンライン参加者13名。

4　内容及び日程　テーマ「古墳時代の祭祀～水のマツリを中心として～」

報告・講演　令和４年２月24日（水）午後１時30分 ～ 4時00分

・事例報告　「石川県内における水のマツリ」

新美祥人夢（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

・基調講演　「古墳時代の水のマツリ」　穂積裕昌（三重県埋蔵文化財センター）

共同研究者会議　令和４年２月24日（水）午後４時10分 ～ ５時00分（オンライン）

次年度実施の研究集会に向け事前協議を行い、祭祀遺構の認定や研究対象の絞り込みなど、基本的な研究の視点や課題等について確認した。　（金山哲哉）

会場の様子

報告の様子（新美）

穂積講師の講演の様子

松尾（島根県）共同研究者コメントの様子

共同研究者会議の様子

共同研究者会議の様子（Zoomの画面）

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容（調査研究集会テーマ）	記録の掲載 （石川県埋蔵文化財情報）
第１回	H13. 2. 23	環日本海交流史の現状と課題	
第２回	H14. 2. 22	鉄器の導入と社会の変化	第８号
第３回	H15. 2. 21	玉をめぐる交流	第10号
第４回	H16. 10. 24	縄文後晩期の低湿地集落 － 生業の視点で考える	第11号
第５回	H17. 10. 29	古代日本海域の港と交流	第13号
第６回	H18. 10. 28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 － 甕・壺・摺鉢を中心に －	第15号
第７回	H19. 10. 27	縄文時代の装身具 － 漆製品・石製品を中心に －	第17号
第８回	H20. 10. 26	日本海域における古代の祭祀 － 木製祭祀具を中心として －	第19号
第９回	H21. 10. 24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H22. 10. 23	日本海域の土器製塩 － その系譜と伝播を探る －	第23号
第11回	H23. 10. 29	近世日本海域の陶磁器流通 － 肥前磁器から探る －	第25号
第12回	H24. 10. 28	中世日本海域の墓標 － その出現と展開 －	第27号
第13回	H24. 10. 26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25. 10. 25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26. 10. 24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27. 10. 23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29. 2. 24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30. 2. 23	近世成立期の土器・陶磁器様相 － カワラケを中心に －	第39号
第19回	H31. 2. 23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 － 城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に －	第41号
第20回	R2. 2. 26	古代・中世の木製容器	第43号
第21回	R3. 2. 19	古代の木の器（うつわ）－その２	第45号
第22回	R4. 2. 24	古墳時代の祭祀～水のマツリを中心として～	本号（第47号）

石川県内における水のマツリ～古墳時代を中心に～

新美　祥人夢

はじめに

古墳時代にみられる祭祀遺跡は①自然物を対象とするもの②住居跡付属地③古墳付属地などがある。中でも①に該当する水の祭祀は、畿内周辺を中心として多くの検出例がある。これは古墳時代前期から古墳時代中期にかけての時期に集中し、①湧水源地を加工したもの（湧水点祭祀）②流水を対象としたもの（流水祭祀）に大別される。前者に該当する遺跡は三重県城之越遺跡、同県六大Ａ遺跡などがあり、後者には奈良県南郷大東遺跡、京都府小樋尻遺跡などが挙げられる。また、水のマツリの埴輪表現は古墳時代中期以降に大阪府狼塚古墳、三重県宝塚１号墳において確認できる。

１．石川県内における水辺の祭祀

石川県内では、上記のような水のマツリを執り行ったとする遺跡の発見例はまだ多いとはいえない状況にある。しかし､金沢市畝田遺跡や小松市千代･能美遺跡の出土遺物とみつかった導水施設といった遺構は、水辺の祭祀を考える上で重要である。また、林大智氏は畝田遺跡と千代・能美遺跡などで祭祀行為を行なった首長層が近畿地域の首長層と交流関係にあったとし、古墳時代前期段階において加賀地域での首長居館の構造が加賀地域内で共有され、その上で集落遺跡を４つに分類し、集落と墳墓の階層を対応関係として示した（図６）。

また、近年発掘調査が行われた八日市遺跡からは湧水点に板を組み合わせ溜升状に設置し、上澄みされた水を手前に流し出す施設の存在が明らかになった。

（１）湧水点祭祀

井戸　県内における井戸の出現は、金沢市藤江Ｃ遺跡や小松市八日市地方遺跡など弥生時代中期まで遡る。弥生時代後期中葉になると加賀で木組み井戸が出現し、古墳時代早期になると増加し、縦板組井戸側・桶転用井戸側などバラエティーに富む。また、堀大介氏の指摘（堀2008）によると北陸の井戸は、扇状地扇端部から沖積地にかけて発見され、全体の４割を木組み井戸が占めるという。

井戸における祭祀行為　井戸祭祀は、対象とする範囲が明確に定まっていない状況にある。羽咋郡宝達志水町に所在する萩市遺跡の井戸からは鍬形木製品が出土した。このような井戸と直接関係のない祭器品と思われるような遺物が出土する状況は井戸祭祀に該当すると考えられる。堀氏が着目した土器の残存率に則ると古墳時代にみられるものでは完形に近い土器が出土する井戸が該当するが、どこまでを井戸祭祀の範囲とするか問題が残る。

八日市遺跡（湧水点＋施設）　川の中では溜升上に板を組んだ遺構がみつかった。その施設は、奥と手前の板のレベルが異なっており、湧き水が手前の板の高さより溜まると自然と上澄みが手前に流れ出すというものである。この施設は板塀で囲まれていたと考えられ、剣形木製品などの祭器具が伴って出土することから水の祭祀に関わるものと思われる。また、周辺の建物跡は竪穴建物が12棟、掘立柱建物が16棟以上みつかった。その内２棟の竪穴建物から青銅の鋳造に使用されたとみられる炉の痕跡が確認された。

（２）流水祭祀（流路にみられる祭祀について）

①加賀地域

千代・能美遺跡（湧水点＋導水施設）　小松市に所在する遺跡で、湧水点祭祀と流水祭祀双方を行った跡が確認された（図２）。北区画からは、大型掘立柱建物（SB12）に隣接する形で大型の桶を転用した井戸がみつかっており、SB12の南側には①目隠し塀と思わしき柱穴跡があること、②工房施設群があると思われる中央区画との境には坂塀が設置されていること、の２点から偏絶性が際立つものと考えられる。南区画からは流水点祭祀に該当する導水施設が見つかった。導水施設の東南側の井戸（SE01）から溢れ出る水を流して、木製構造物に入れたものと考えられる。大量の土器とともに木製高坏や武器・船形といった木製祭祀具の出土が確認されている。

畝田遺跡（導水施設＋溝）　金沢市に所在する遺跡で、大溝と小溝などの遺構が確認された。古墳時代前期の導水施設が溝（SD06）で見つかっている（図３）。この溝と合流する河道（SD05）では刀の把や弧文板、儀仗といった祭祀的な属性を持つ木製品が出土している（図５）。また、SD05からの土製羽口、導水施設の南側に位置する遺構密集部分での石釧未製品の出土から遺跡内で手工業生産工房の存在を推定できる。

二口六丁遺跡（溝）　金沢市に所在する遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期の土器と大量の木製品が出土した大溝が見つかった。その中でも船形木製品が２点出土している。

②能登地域

萩市遺跡（湧水点＋溝）　調査区内を南西から北東へ向かって流れる大溝と接するようにして井戸が１基検出されている。井戸側は一木の丸太をくり抜いたものであり、その中から木鏃が１点出土している。大溝からは、弥生時代中期～古墳時代前期の土器に加え、大量の木製品が出土した。

矢田遺跡（溝）　本遺跡は令和３年度に発掘調査が行われ、弥生～奈良・平安時代の土器や木製品が大量に出土した。また、過去の調査区でも同様に溝から土器と木製品が出土している。今回の調査では、北側調査区から古代の木簡や木製小型祭祀具などが出土したが、今回の発表では古墳時代のみ取り挙げた。南側調査区で検出した東から西へと流れる大溝からは、弥生時代後期～古墳時代中期の土器と木製品が出土した。木製品の中には、袋状鉄斧の柄や刀装具未製品などがあり、祭祀具としては呪術的なものを連想させる形の木製品（異形木製品）、琴柱形木製品を連想させるような木製品などが現在確認されている。

２．小結

以上、湧水点祭祀と流水祭祀に分類して県内の遺跡の概要について述べてきた。上記したように加賀地域に所在する千代・能美遺跡、畝田遺跡では、出土した遺物などに鑑みても近畿地域の首長層との交流関係は積極的に認められよう。一方、能登地域ではまだ、導水施設を用いた流水祭祀の痕跡はみつかっていない。しかし、矢田遺跡からは多量の木製品の中に祭祀具を意識して製作されたような製品が複数点みられることから、大規模な集落あるいは首長居館と呼ばれるような建物に伴う水辺の祭祀の痕跡である可能性があると筆者は考える。

終わりに

筆者自身の力量不足が目立ち、肝心な水に関わる祭祀遺跡についての理解と定義が不十分であったと痛感する。また、祭祀空間や構造等についても触れることができなかった。これらの反省から令和４年度の研究事業では、水に関わる祭祀が執り行われたと判断できる基準の設定、集落構造や祭祀空間に重点を置き、祭祀を執り行った遺跡あるいは祭祀遺物について言及を行っていく所存である。

引用・参考文献（名称順）

青柳泰介　2003「導水施設考―奈良県御所市・南郷大東遺跡の導水施設の評価をめぐって－」『古代学研究』第160号　古代学研究会

石川県小松市教育委員会　2003『千代・能美遺跡―市道能美小杉線改良工事に伴う発掘調査報告書―』

石川県教育委員会　1972『金沢市古府クルビ遺跡（第１・２次）北陸自動車道路・金沢バイパス関係埋蔵文化財概報』

石川県立埋蔵文化財センター　1986『金沢市戸水Ｃ遺跡　金沢港泊地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

石川県立埋蔵文化財センター　1991『畝田遺跡』

（財）石川県埋蔵文化財センター　2012『小松市 千代・能美遺跡』

（社）石川県埋蔵文化財保存協会　1998『石川県羽咋郡志雄町　荻市遺跡　一般国道159号萩市歩道設置に係る発掘調査報告書』

石川考古学研究会　1997『石川県考古資料調査・集成事業報告書』祭祀具Ⅱ

石川考古学研究会　2001『石川県考古資料調査・集成事業報告書』捕遺編

大阪府立近つ飛鳥博物館　1997『まつるかたち－古墳・飛鳥の人と神―』平成９年度春季特別展　大阪府立近つ飛鳥博物館図録11

大阪府立近つ飛鳥博物館　2012『王と首長の神まつり－古墳時代の祭祀と信仰―』平成24年度春季企画展図録　大阪府立近つ飛鳥博物館図録57

大阪府立近つ飛鳥博物館　2018『百舌鳥・古市古墳群に学ぶ、古墳と水のマツリ』平成30年度夏季企画展図録　大阪府立近つ飛鳥博物館図録74

大阪府弥生文化博物館　2019『北陸の弥生世界わざとこころ』令和元年度秋季特別展　弥生文化博物館特別展図録68

大場磐雄　1970『祭祀遺跡―神道考古学の基礎的研究―』角川書店

金沢市教育委員会　1983『金沢市二口六丁遺跡』（『金沢市文化財紀要』32）

金沢市教育委員会　1989『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』（『金沢市文化財紀要』77）

金沢市教育委員会　1996『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』（『金沢市文化財紀要』119）

滋賀県立安土状考古学博物館　2005『王権と木製威信具―華麗なる古代木匠の世界―』平成17年度春季特別展図録

笹生 衛　2016『神と死者の考古学　古代のまつりと信仰』歴史文化ライブラリー417　吉川弘文館

椙山林継　2008「古墳時代の墓の祭祀」『祭りの考古学』学生社

菅原雄一　2013「中期」『若狭と越の古墳時代』季刊考古学・別冊19　雄山閣

中屋克彦　2019「八日市遺跡」『石川埋蔵文化財情報誌』第40号　（公財）石川県埋蔵文化財センター

七尾市教育委員会　2003『七尾市埋蔵文化財発掘調査概報　石川県万行遺跡発掘調査概報―古墳時代の大型建物群とその関連遺構の概要報告書―』

七尾市史編さん専門委員会　2002『新修 七尾市史１ 考古編』七尾市役所

奈良県立橿原考古学研究所　2018『黒塚古墳の研究』八木書店

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　2005『水と祭祀の考古学』学生社

日本考古学協会　1996『シンポジウム１ 水辺の祭祀』日本考古学協会1996年度三重大会

林 大智　2013「第７節北陸における木製品研究の現状と課題」『木製品から見た古代のくらし』島根県古代文化センター

林 大智　2016「古墳時代の首長居館を求めて」『加賀・能登王墓の世界』石川県立歴史博物館

坂 靖・青柳泰介　2011『葛城の王都　南郷遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」079　新泉社

坂 靖　　2021『倭国の考古学』新泉社

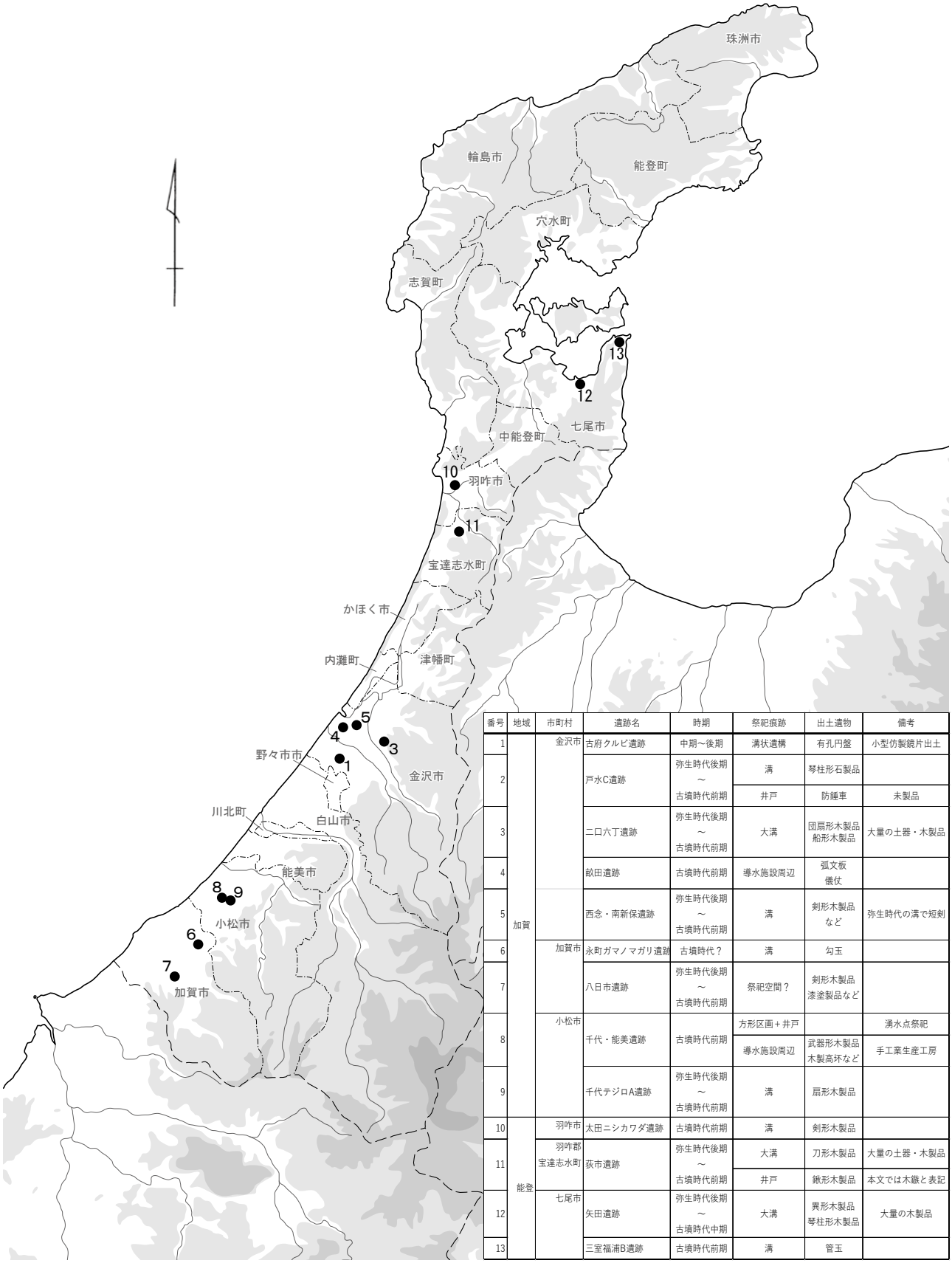
福山博章　2021「京都府城陽市小樋尻遺跡の発掘調査」『考古学研究』第68巻第３号

穂積裕昌　2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣

穂積裕昌　2013「神まつり」『人々の暮らしと社会』古墳時代の考古学６　同成社

穂積裕昌　2013「祭祀・儀礼と井戸」『続・井戸再考ー古墳・飛鳥時代の井戸』発表要旨・資料集　埋蔵文化財研究会

堀 大介　2008「北陸の事例」『井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～』第57回埋蔵文化財研究会発表要旨集　埋蔵文化財研究会



番号	地域	市町村	遺跡名	時期	祭祀痕跡	出土遺物	備考
1	加賀	金沢市	古府クルビ遺跡	中期～後期	溝状遺構	有孔円盤	小型仿製鏡片出土
2			戸水C遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	溝	琴柱形石製品	
					井戸	防錘車	未製品
3			二口六丁遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	大溝	団扇形木製品 船形木製品	大量の土器・木製品
4			畝田遺跡	古墳時代前期	導水施設周辺	弧文板 儀仗	
5			西念・南新保遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	溝	剣形木製品など	弥生時代の溝で短剣
6		加賀市	永町ガマノマガリ遺跡	古墳時代？	溝	勾玉	
7			八日市遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	祭祀空間？	剣形木製品 漆塗製品など	
8		小松市	千代・能美遺跡	古墳時代前期	方形区画＋井戸		湧水点祭祀
					導水施設周辺	武器形木製品 木製高坏など	手工業生産工房
9			千代テジロA遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	溝	扇形木製品	
10	能登	羽咋市	太田ニシカワダ遺跡	古墳時代前期	溝	剣形木製品	
11		羽咋郡 宝達志水町	荻市遺跡	弥生時代後期～古墳時代前期	大溝	刀形木製品	大量の土器・木製品
					井戸	鍬形木製品	本文では木鍬と表記
12		七尾市	矢田遺跡	弥生時代後期～古墳時代中期	大溝	異形木製品 琴柱形木製品	大量の木製品
13			三室福浦B遺跡	古墳時代前期	溝	管玉	

図１　石川県水のマツリ遺跡位置図

1

2

図２　千代・能美遺跡　1導水施設周辺平面図 1/130　2 北区画平面図 1/300 石川県埋蔵文化財センター 2012 より

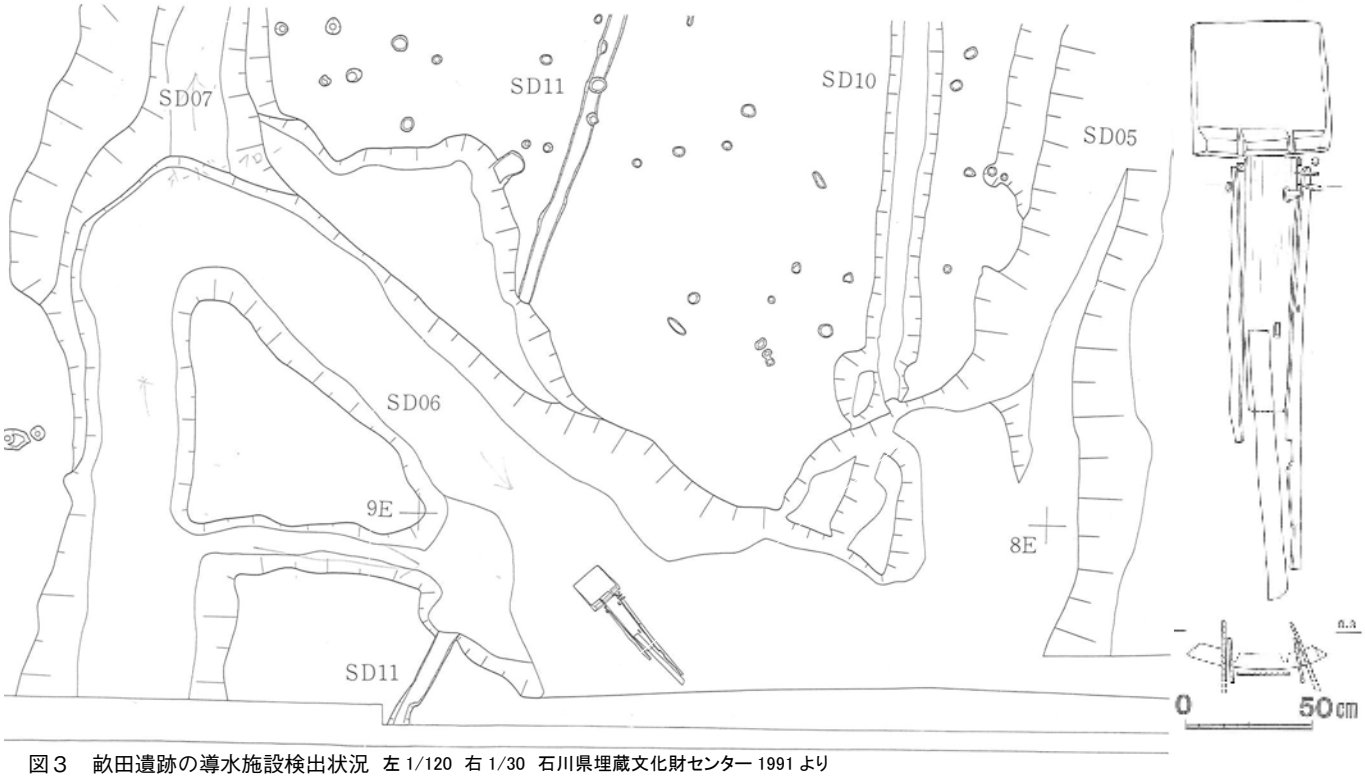


図３　畝田遺跡の導水施設検出状況　左 1/120　右 1/30　石川県埋蔵文化財センター 1991 より

1

6　5

2

7

1荻市　2太田ニシカワダ
3千代デジロ　4戸水C
5・6二口六丁　8・9畝田

3

8　9

4

図５　祭祀遺跡出土遺物　金沢市 1996、石川埋文 1991・石川県教育委 1972 より
１～３剣形木製品　４琴柱形木製品　５～７船形　８儀仗　９弧文板

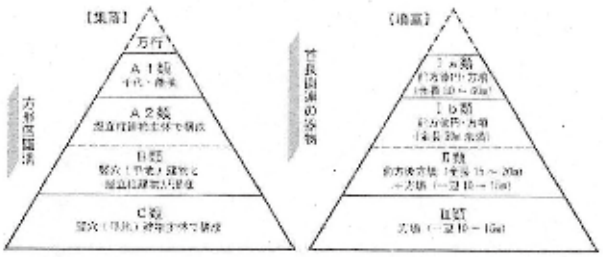


図６　集落・墳墓の階層対応図
林 2016 より

写真１　八日市遺跡　板組遺構

「古墳時代の水のマツリ」（三重県埋蔵文化財センター　穂積裕昌氏）の概要

はじめに

穂積氏の考える古墳時代の祭祀、特に水を中心とした祭祀儀礼についてご講演いただいた。その中で、いわゆる湧水点、水源に関わるマツリと、導水施設を用いるような水に対するものをどのように考えていくのかということにも視点を置いて話をされた。

まず、前史として縄文時代には、群馬県矢瀬遺跡や東京都下宅部遺跡などで確認されているものを典型例とする「水場遺構」について、湧水点を中心とした場が、水を採取する場として重要であるばかりでなく、生産や貯蔵、そして祭祀の空間などとして、多目的に利用される特徴を整理された。

また、弥生時代には、福岡県長野小西田遺跡や神奈川県池子遺跡群などで、木器生産にかかる貯木場や水晒し場など、生産に特化した水場が確認されていることが紹介された。一方、古墳時代にも続いていく祭祀空間で大型建物と井泉がセットを構成する動きが、弥生時代にあるということを、大阪府池上曽根遺跡をはじめ、鳥取県茶畑山道遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡などを例に指摘され、これらは「水場」が目的に応じて特化していく方向性を示すものとされた。

祭祀・儀礼の場としての井泉空間について

「祭祀」については、本来、神という対象があって行われるものであり、占いである“卜定”、祭祀者の身を祓う“禊ぎ”、言語とともに行う“祓い”、蠢く悪霊といったものを強制鎮圧する“鎮”、神社などへ捧げ物をする“奉幣”がある。これに対し、死者に対して行われるのは「喪葬」であり、それらとは区別すべきであるが、発掘調査で出てくる遺物等は、あまり分けることなく何でも「祭祀」ということで一括してしまうことが多く、注意が必要であると指摘された。

古墳時代における、祭祀・儀礼の場としての井泉空間の成立について、奈良県纒向遺跡の大型井泉や兵庫県藤江別所遺跡の井泉、愛知県八王子遺跡や三重県古轡通りＢ遺跡の大型建物や四面庇付き建物と井泉がセットで構成される儀礼空間、奈良県南紀寺遺跡の儀礼空間などを解説し、群馬県の中溝・深町遺跡や三ツ寺Ⅰ遺跡にも同様な事例があることを紹介された。

また、穂積氏自身が調査を担当された三重県の城之越遺跡では、石組みの井泉を中心とする祭儀場と四面庇タイプといわれるような建物が100ｍ離れており、よりスケール感が大きくなっていることを紹介した。この城之越遺跡と同じような構成を持つものとして、伊勢神宮の内宮にある荒祭宮を取り上げ、その前面にある谷を遡った所にある御井との関係が城之越遺跡の構造と非常に類似点があることを指摘した。さらに、三重県の六大Ａ遺跡の井泉から出土している玉と木製の刀形が、『日本書紀』に書かれている神話と共通性があり、前代の古墳時代以来の何らかの儀礼というものを反映している可能性があるとの見方を示した。

この他、『日本書紀』、『続日本紀』、『風土記』、『中臣の寿詞』、『万葉集』などにある水の祭祀に関わる記述から、井泉が非常に重要なマツリの対象たるものとして存在していたということを紹介された。

穂積氏は、模式図を提示し、こうした井泉のある儀礼空間には、①大型の造成空間がある、②大型建物とのセットがある、③独立した場に設けられる、④開発地の源流点である井泉、⑤空間を隔しない個々の井泉、といった要素により階層性があるとして、上位から、

・独立の造成を伴った祭祀空間がある（南紀寺遺跡や城之越遺跡）

・独立の祭儀空間がみとめられる（古轡通りＢ遺跡や奈良県阪原阪戸遺跡）
・集落または開発地内に単独で井泉が存在する（群馬県熊野堂遺跡、三室間ノ谷遺跡）

と見てはどうかとの考えを示された。

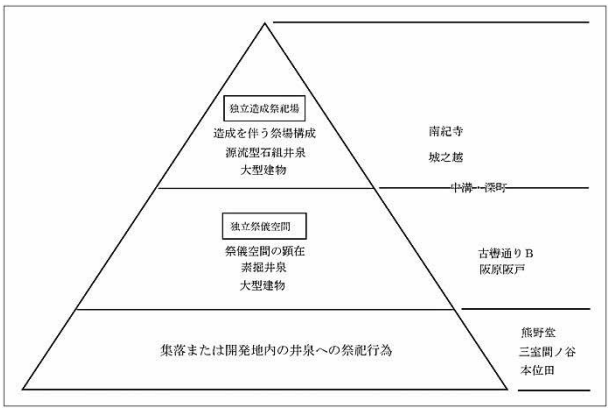


図１　井泉のある儀礼空間の階層性模式図

導水施設に関して

穂積氏は、導水施設については、現在、通説的には水のマツリに関連するものと考える研究者が多いが、特に機能に関してはまだ評価が定まっていないのではないかとの考えを示した上で、考古学的にこうした施設等をどのように捉えるかについて見解を述べられた。

いわゆる「導水施設」は、奈良県南郷大東遺跡の導水施設を典型例とし、「貯水池あるいは大型の溝や川などから溝や木樋で導水した水を、遮蔽施設や覆屋などで構成された特定区域内に引き込み、その中に据えた木槽や槽付き木樋に水を通して、何らかの行為を行うための施設」と定義した。

その上で、その性格に関してこれまで提起された説には、浄水機能を想定する“水のマツリの場”・“死者に捧げる水の採取場”・“禊ぎの場”、必ずしも浄水を前提としない“殯所”・“トイレ”・“産屋”などがあることが紹介され、首長が主宰した水に関わる祭祀を実修した祭祀施設あるいは王権祭祀の実修施設とみる考えが通説的な地位にあるとされた。

ただし、穂積氏は、古代祭祀の一般的なあり方は、露天で行う「庭上祭祀」が基本であるとし、「浄水化」機能についてもその効果については疑問を呈され、ご自身は、基本的には遮蔽施設･覆屋内で、流水を利用した実用的な施設とみる考えを示された。また、実用的な施設の民俗例として、岐阜県飛騨市宮川町の木樋や槽を使った山水の利用システムの例を紹介されたが、導水施設は集落との位置関係や施設を原形として埴輪化された囲形埴輪の存在などからも、実用・生活機能のみで理解されるものではないことも示唆された。

三重県松阪市の宝塚１号墳に置かれた囲形埴輪には、湧水系と導水系のものが見られる。遮蔽施設いわゆる囲いに囲われた建物があり、導水施設の方も井泉・湧水的なものもその中に入っている。大阪府の心合寺山古墳や御廟山遺跡、和歌山県の車駕之古址古墳などの囲形埴輪も同様であり、囲いに食い違い入口を構成するというあり方も非常に似ている。これらは厳重に囲繞された非常に閉鎖的な空間であり、城之越遺跡などの湧水点の祭祀などの開放的な空間とは、かなりの違いがある。今でも伊勢神宮には、365日朝夕神に供える水を汲み上げる上御井神社があり、このような閉鎖した空間で水を採取している事例があるが、これが古墳時代まで遡るかどうかは別であるとされた。

囲形埴輪で表現された施設については、魏志倭人伝や『隋書倭国伝』の記述から、地位の高い人は死後､墓を作ってから葬るので､その間は遺体を護持することになる。『日本書紀』にある「殯歛の処」というのはまさに殯の所とみられる。殯は『日本書紀』や『古事記』､『令集解』などの記事から、死者の魂が荒びないようにいろいろな行為をすることで、その行為を行う場所が殯宮であり、殯所であり、喪屋であったとの考えを示した。また、その構造についても一致するような記述が見られることや、その中で死者の魂が荒びないようにいろいろな行為が行われたことを解説された。

さらに、喪葬令や中国の『古文孝経』､『礼記』にある「中霤において浴す」が、部屋の中央において遺体を洗うということであり、宝塚１号墳のような井泉系の囲形埴輪、導水施設を内蔵する囲形埴輪は、遺体を洗うという機能と非常に親和的ではないかとの指摘をされた。

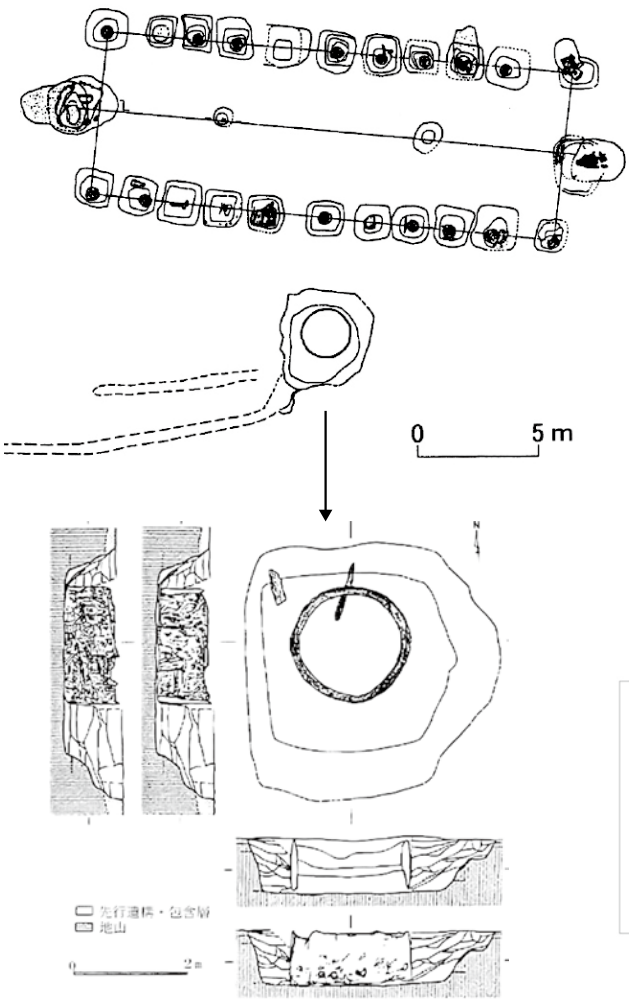


図２　池上曽根遺跡の大型建物と大型井戸

（秋山浩三　1999「池上曽根遺跡中枢部における大形建物・井戸の変遷（上）」『みずほ』28）

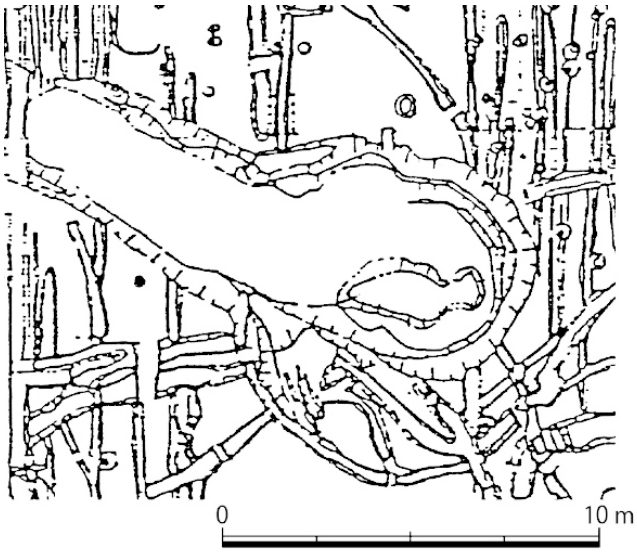


図３　纒向遺跡第48次調査の大型井泉

（桜井市教育委員会　1987『纒向遺跡・纒向小学校地区第6次発掘調査資料』）

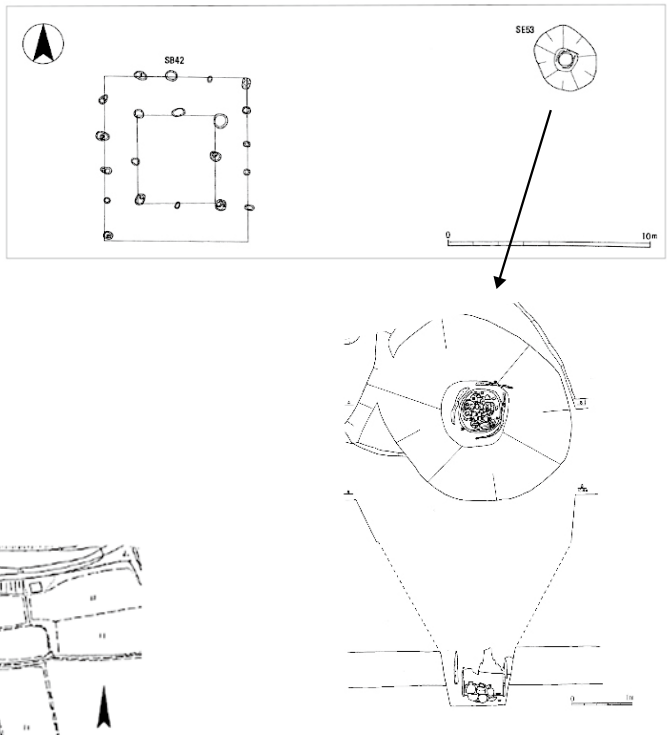


図４　三重県古轡通りＢ遺跡の儀礼空間

（三重県埋蔵文化財センター　2000『古轡通りＢ遺跡・古轡通りＢ古墳群発掘調査報告』）

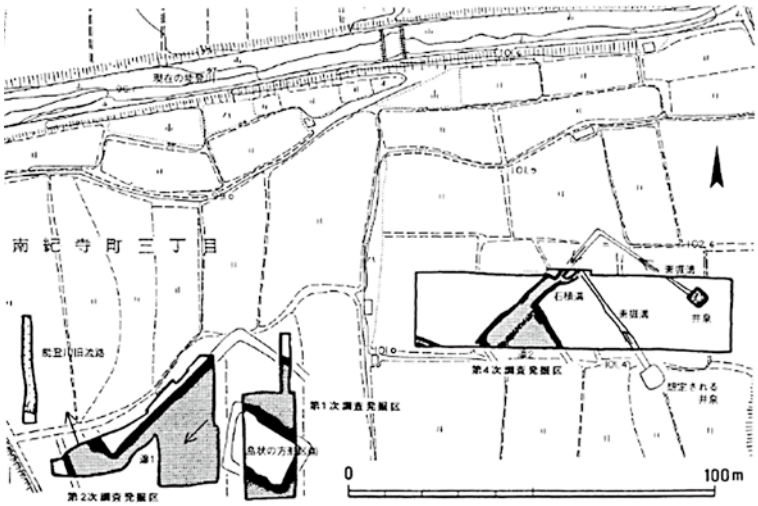


図５　奈良市南紀寺遺跡の儀礼空間（石組井泉と貼石溝、方形池と島状施設）

（森下浩之　1998「奈良市の南紀寺遺跡」『日本の信仰遺跡』奈良国立文化財研究所学報第57冊）

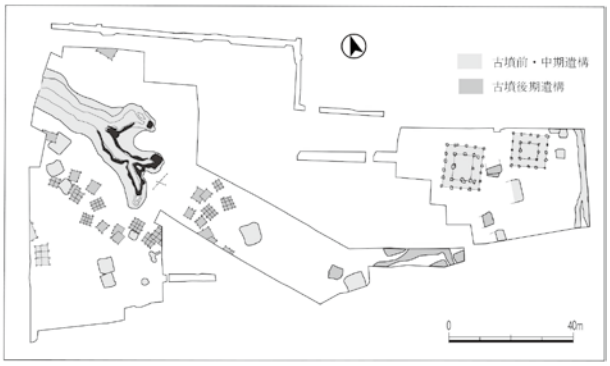


図６　三重県城之越遺跡の儀礼空間
（穂積裕昌　2012『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣）

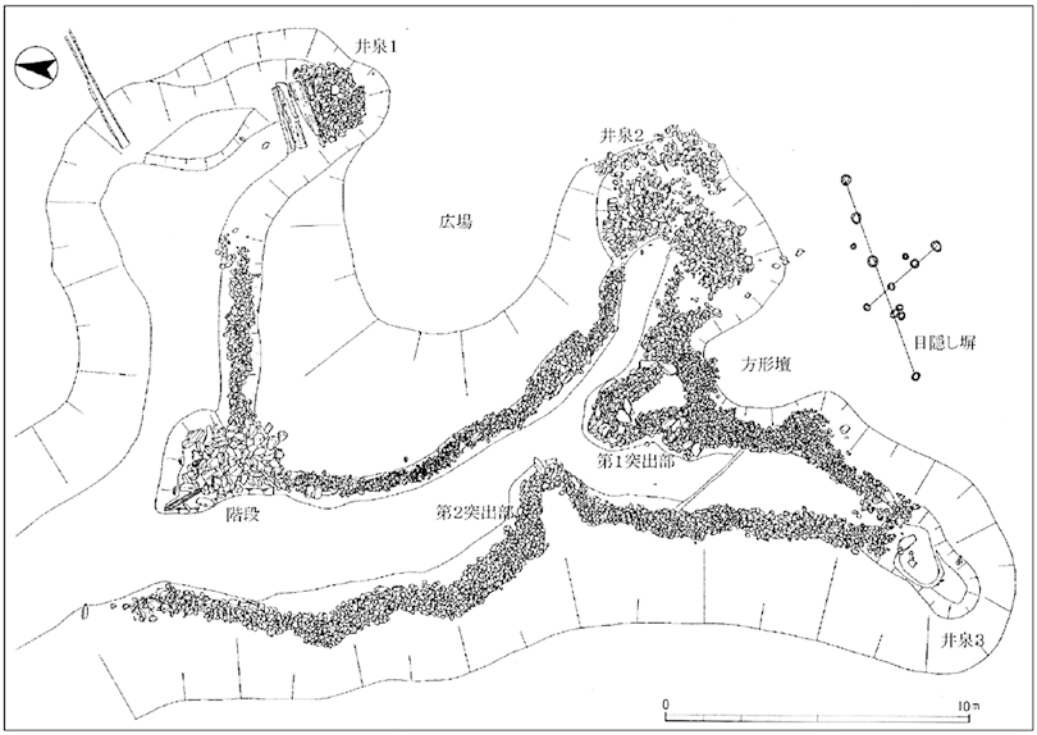


図７　城之越遺跡の貼石祭儀場
（上野市教育委員会　1998『城之越遺跡（２次）発掘調査報告』に加筆）

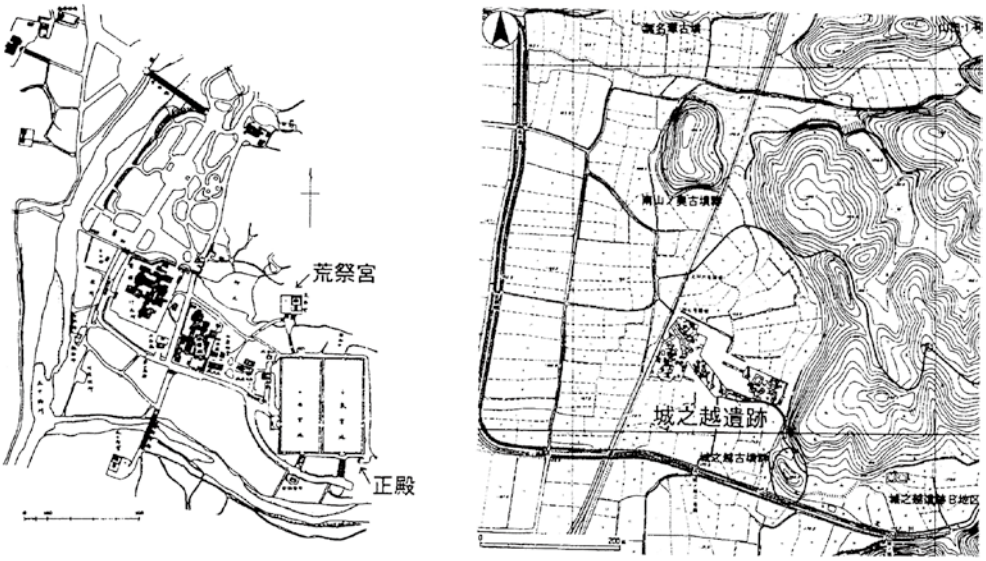


図８　伊勢神宮内宮（皇大神宮）と城之越遺跡の立地比較
（左：福山敏雄　1976『伊勢神宮の建築と歴史』日本資料刊行会、
右：上野市教育委員会　1998『城之越遺跡（２次）発掘調査報告』）

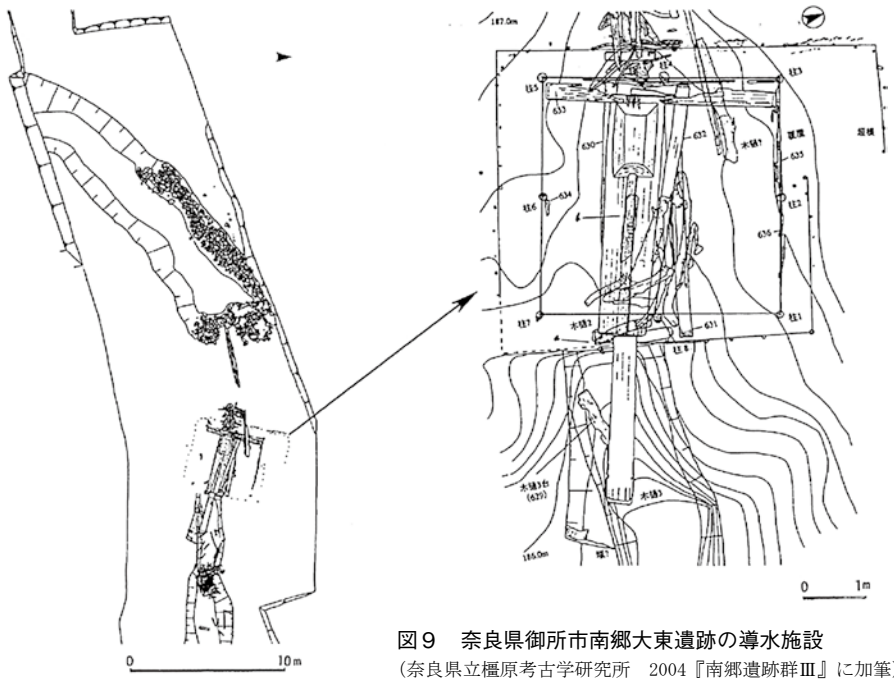


図９　奈良県御所市南郷大東遺跡の導水施設
（奈良県立橿原考古学研究所　2004『南郷遺跡群Ⅲ』に加筆）

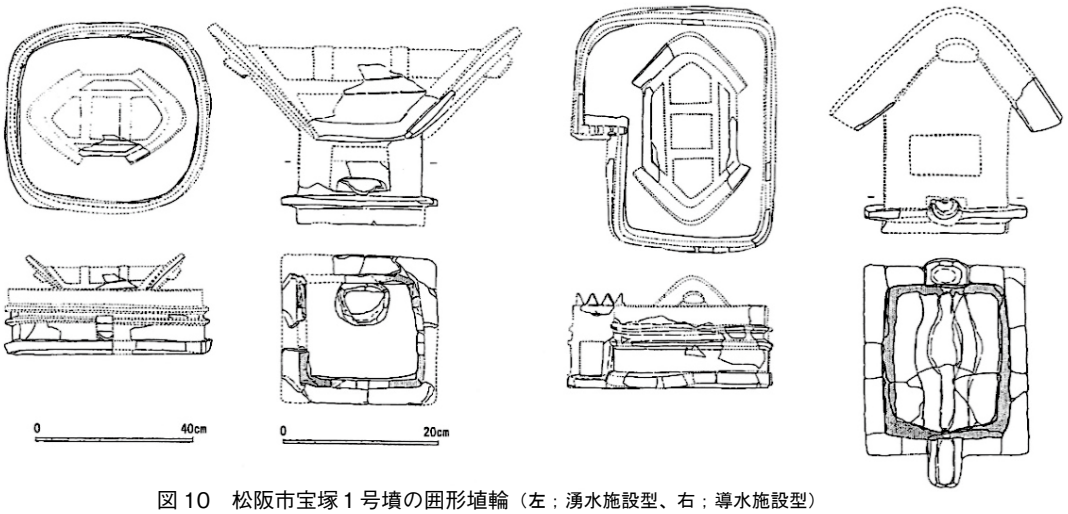


図 10　松阪市宝塚１号墳の囲形埴輪（左；湧水施設型、右；導水施設型）
（松阪市教育委員会　2005『三重県松阪市　史跡宝塚古墳』）

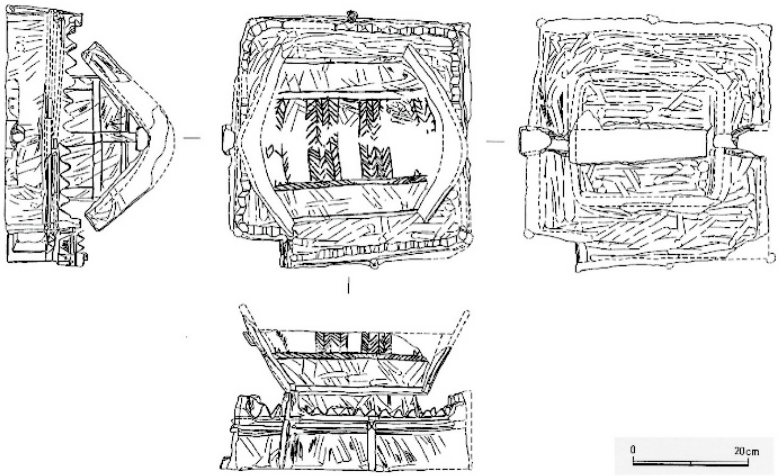


図 11　大阪府心合寺山古墳出土囲形埴輪
（八尾市教育委員会　2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書』）

まとめ

井泉を祀る祭祀とは、湧水点、源流祭祀、水源祭祀といろいろあるが、農耕に基盤を置いた社会には極めて重要な意味をもつもの。その中で、南紀寺遺跡や城之越遺跡の貼石遺構というのは、施設造作にかかる作業量や質、出土遺物の優秀さなどから首長層の介在を予感させるものであり、祭祀行為が明確に首長の諸活動の一環として把握できる。ここに古墳時代の祭祀研究が首長制論と交わり、王権研究の一翼を担う重要なテーマとして明確化される。

この祭祀の淵源は、畿内の大型弥生集落内の象徴空間に営まれた大型井戸と大型建物のセットのなかに見出すことができ、首長層による「祭祀的基盤の共通性」を背景に列島各地にもその祭祀観念が波及した。井泉と大型建物を核とした祭場形成は、聖水意識を共有して実修された「祭式」の共有、つまり、各地でみられるいわゆる四面庇付き建物と井戸・井泉のセットは、ヤマト王権による、基本構成を同じくした祭場形成や儀礼・所作の地域への導入を契機としている。

一方、導水施設とは何か。「古墳という装置」の本質は、凶癘魂の依り憑きを排して死者霊を和んだ状態のまま永続的に保つための様々な仕掛けが施された葬所であり墓所であるとみることが基本である。穂積氏は、そこに置かれる導水施設を原形として埴輪化された囲形埴輪は、水のマツリに関連する施設という一つの非常に重要な仮説があるのは承知しているとしながら、その中で死者霊を鎮める殯所の一施設（喪葬施設）と考えたうえで、導水施設、囲形埴輪を殯所の一連の施設と捉えることによって、大化前代の喪葬であるとか、古墳の本質的機能に関わる新たな統一的解釈が生まれてくる地平が拓けるのではないかとの意見を提示され、講演をまとめられた。（中屋克彦）

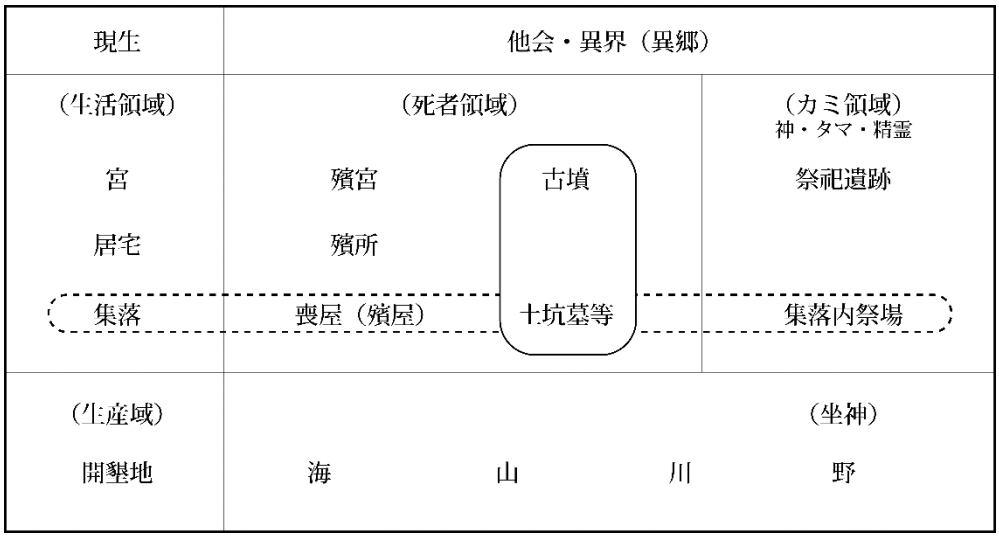


図12　古墳時代の時空間構成モデル（穂積裕昌　2021『古墳時代喪葬遺跡再考』）

※本稿は穂積氏の講演を、ご本人に確認の上、中屋がとりまとめたものである。

中能登町徳丸遺跡の縄文土器

久田正弘

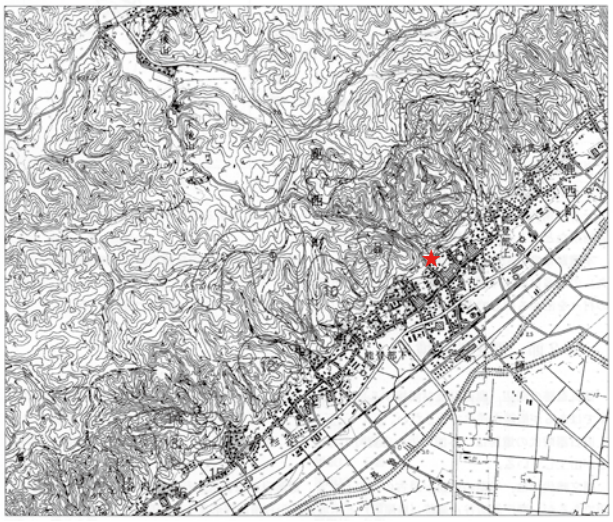
１．はじめに

当センターでは、報告書刊行済み遺跡の遺物再整理に着手しており、その成果の一部として徳丸遺跡の未報告実測図を提示した（久田2022）。ここでは、発掘調査報告書と前号（久田2022）に掲載した縄文土器を調査区・遺構別に提示し、遺跡を理解する一助としたい。

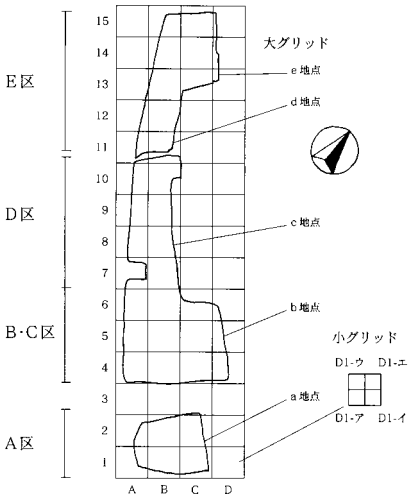
２．調査の概要

徳丸遺跡は、鹿島郡中能登町（旧鹿西町）徳丸地内に位置する遺跡（第１図）であり、北側の眉状山系から邑知地溝帯に向かう斜面地に立地する（第２図★）。調査区は南側からＡ～Ｅ区が設定（第３図）され、縄文土器はＥ区Ⅲ面（第４図）を中心に出土し、Ｄ・Ｂ区でも出土している。ここでは岡本ほか2004・久田2022を一体化して地区・遺構別に提示するが、実測図の修正と新たに拓本と実測図を追加したことを断っておく。

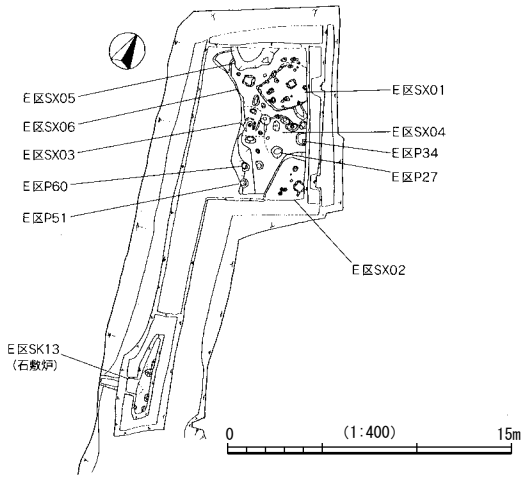
第1図　石川県全体図



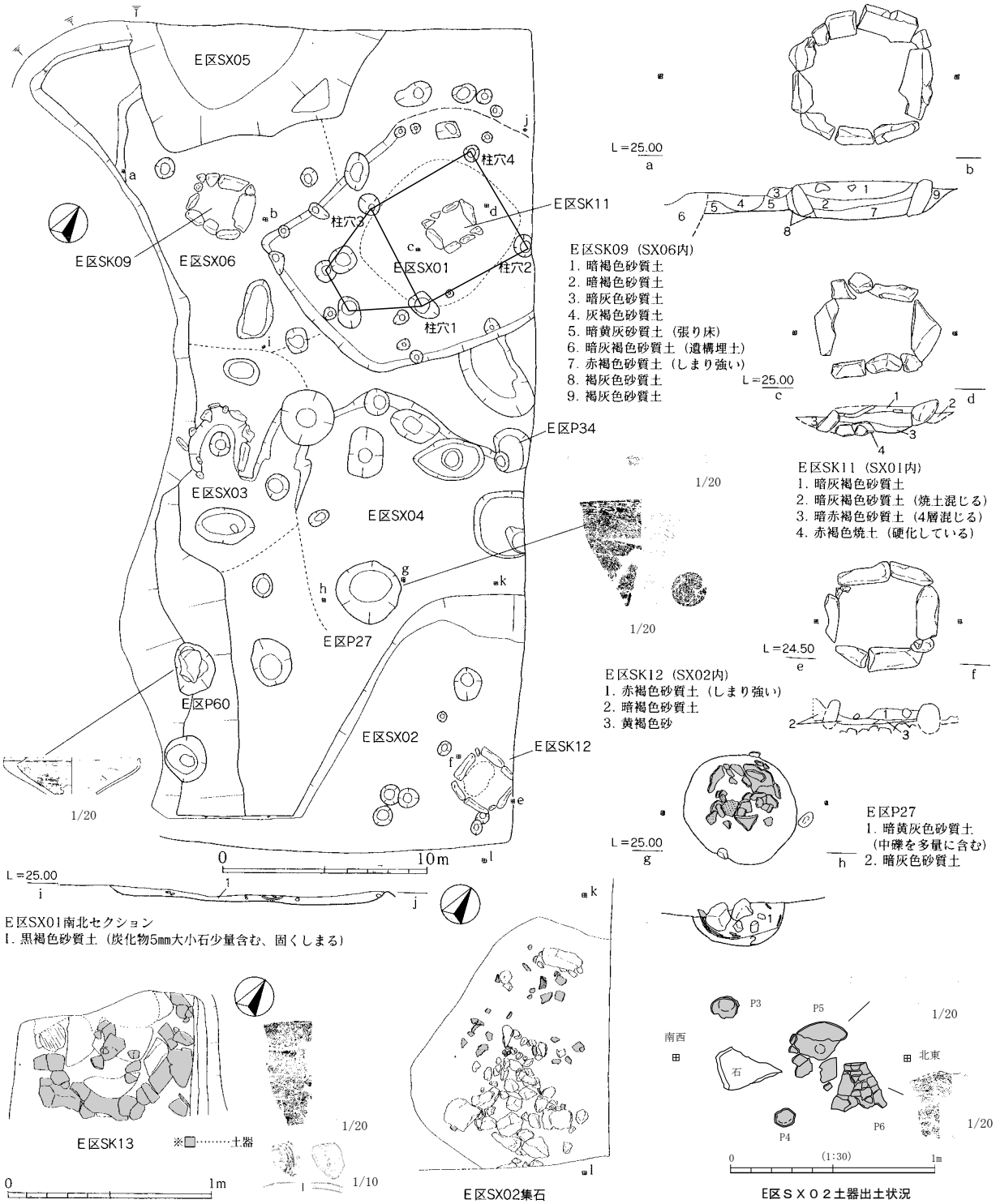
第2図　周辺の遺跡



第3図　調査区グリッド配置図



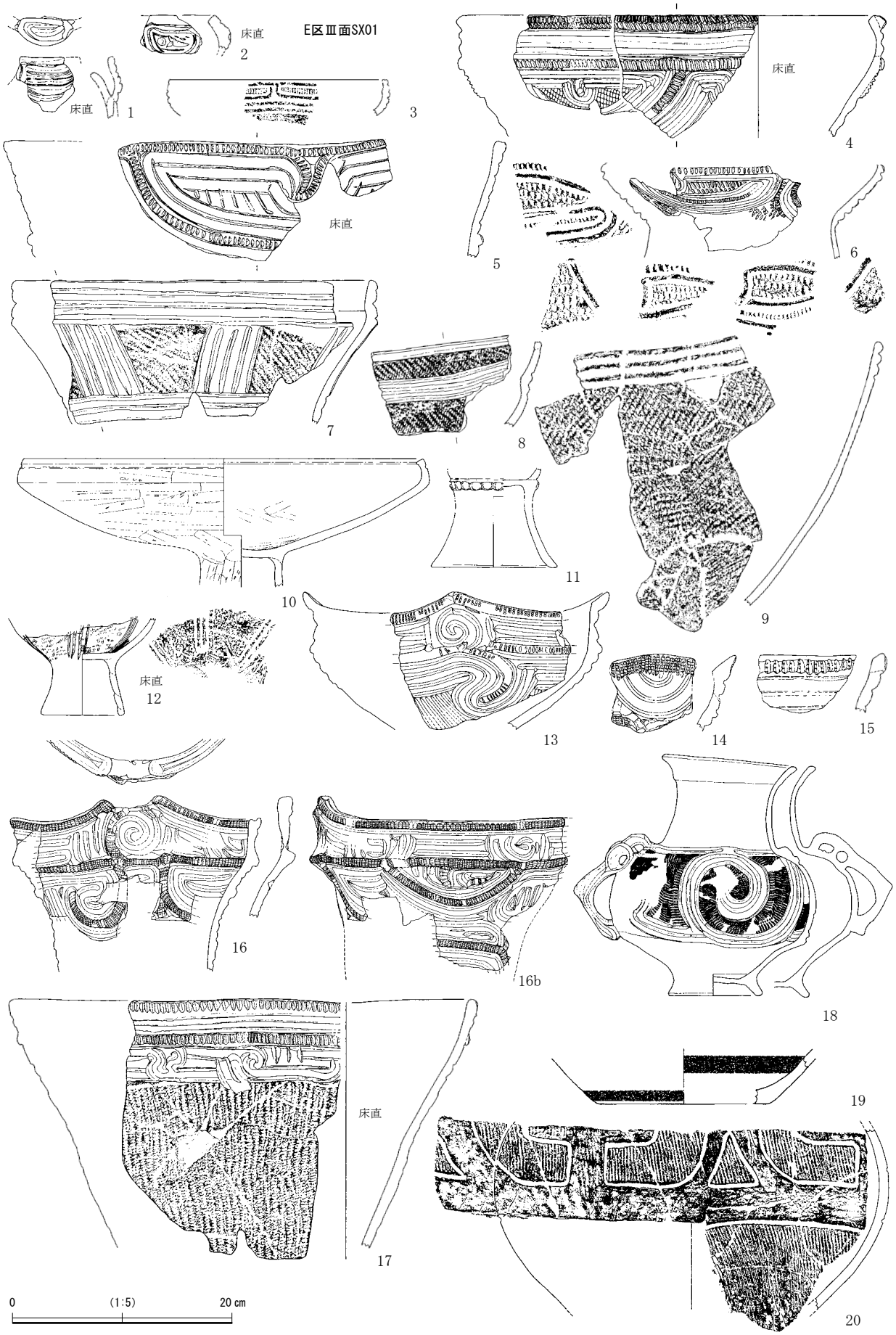
第4図　Ｅ区Ⅲ面全体図



第５図　Ｅ区Ⅲ面遺構図

３．縄文土器

Ｅ区Ⅱ面弥生時代中期後葉の基盤層の下に縄文時代後・晩期の包含層があり、その下に中期中葉～後葉の包含層（注記から深さ40cm程度か）を掘削後が第5図である。SX01～06が古府式の竪穴住居と思われ、ピットなどは古府～串田新式もあろう。SX01は深さ12cmと浅く、1・2・4・5・12・17・22・25が床直出土で、覆土には13～16・18の古串田新式が含まれる。長方形プランで石囲炉SK11を持ち、柱穴1～4が主柱穴とされるが、南側２個の柱穴で入口が想定されよう。また、第６図12

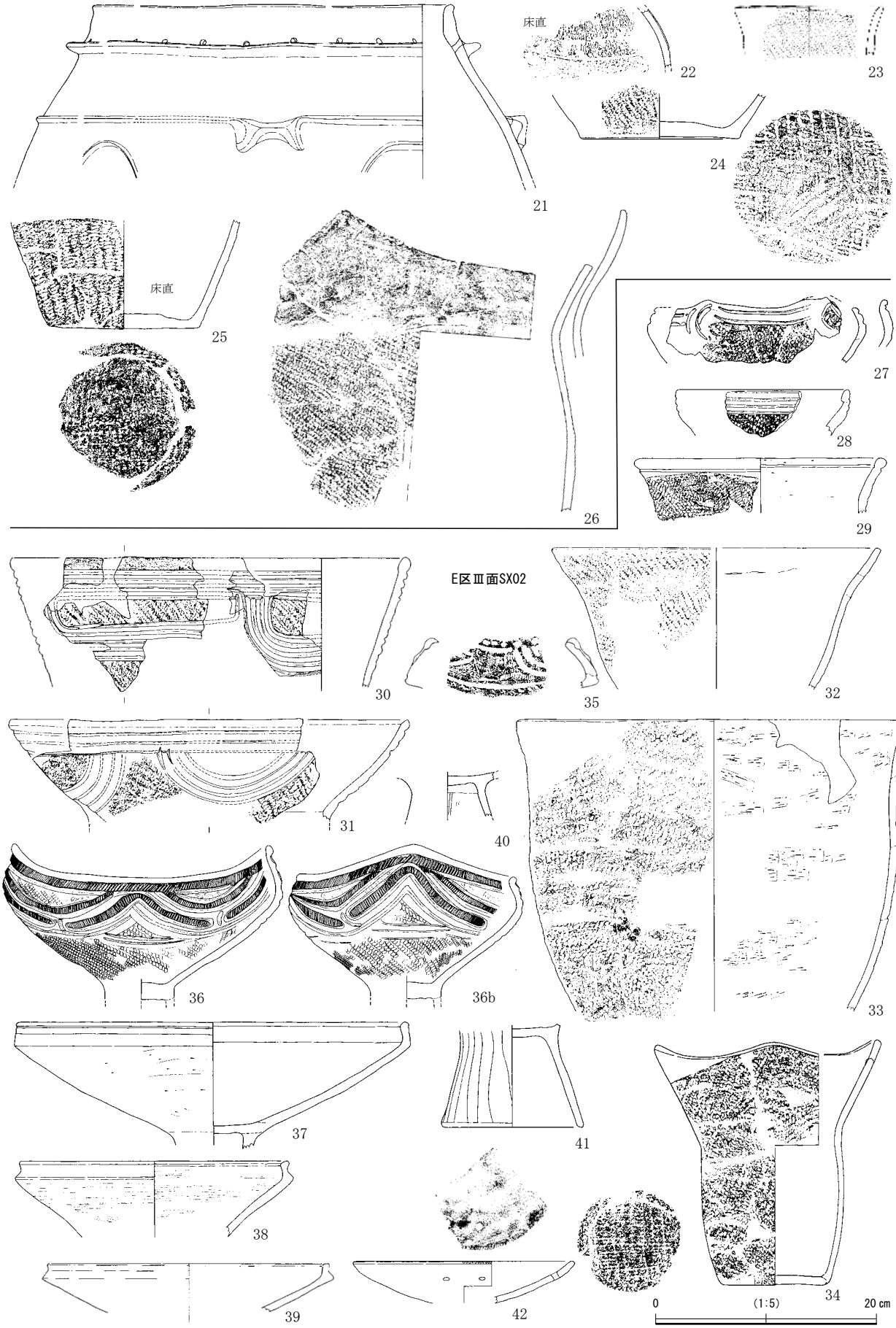


第６図　Ｅ区遺構出土縄文土器１（S=1/5）

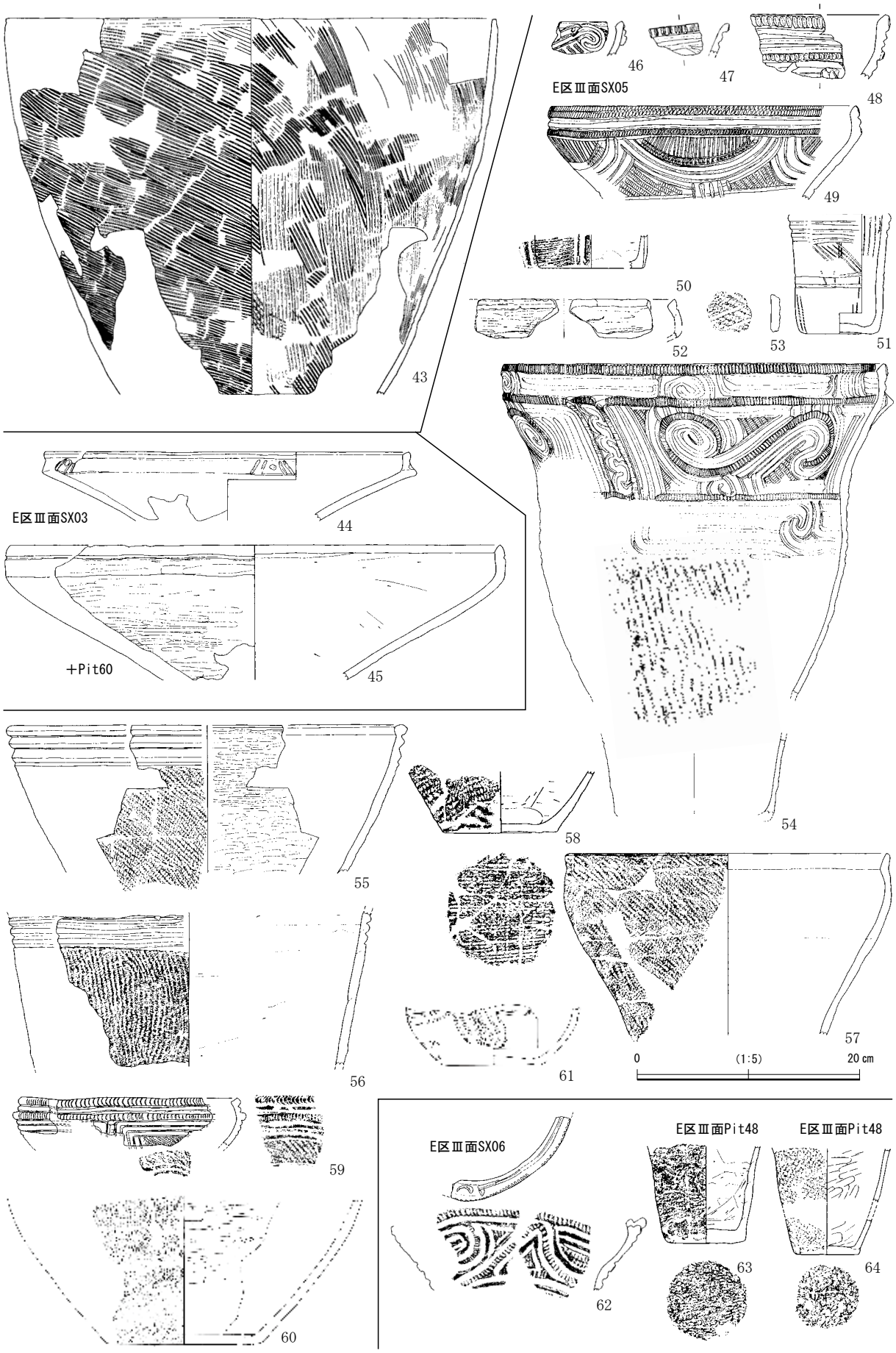
（SX01）と第8図59（SX05）は同一個体とされていたが縄文が異なり、別個体として遺構毎に提示した。SX02は石囲炉SK12を持ち、その上には堆積した集石（第５図中央下）があり、その下に 34・37が出土（第5図右下）したようである。35は屈曲が強い鉢と思われ、中央部は貼付けた突起が剥がれている。左右の沈線文の間に櫛状刺突で擬縄文を持つので古串田新式だが、他は古府式である。42は2つの紐掛け孔を持つ楕円形の皿形で晩期前半と思わ、43は晩期中葉～後葉の条痕深鉢である。42・43は上層からの紛れ込みが指摘されている。SX03は石囲炉SX11を中心に想定されるが、SX11は崩れたか石が抜き取られている。台付浅鉢44・45があるが、口縁部の屈曲部の作り方が異なる。45はP60にも破片が出土しており、P60はやや大きな石が伴うことから土坑墓の可能性もあろう。SX05では、壁沿いにやや浅い窪みがあり、石囲い炉が抜き取られた可能性があるという。口縁部文様は刻み（47～49・54）が多く、C字状文59は少ない。54の胴部下半以下は幅の広い条の撚糸Rである。口縁部・頸部・胴部文様の境には区画文様として隆起線を持つ。口縁部の逆の字状渦巻き文は6単位である。頸部文様は縦2本の隆起線の間に連続S字状文を区画文様にして3単位、文様は5単位と思われ、胴部文様は頸部文様の下に入組み渦巻き文が5単位ある。施文は幅広の半截竹管文である。SX06の62は床直出土の古府式である。Pit27出土の粗製大型深鉢68と大型浅鉢67は、やや大きな石も伴う（第5図）ので、68を土器棺として67を蓋とした土器棺墓が想定されよう。SK13は65を敷いた炉であるが、66（御経塚式）は上層からの混入とされている。

71～234は包含層などから出土だが、235～241はトレンチ・東西アゼ・断面などからの出土なので上層の後・晩期の包含層の時期と思われる。71は口縁部下にC字状刻みを持つので徳前～新崎式であろう。72・74・75は太目の粘土紐などを貼り付けている。81・82は縄文の代わりに縦の列点文を充填し、83・84も同様である。86～94・96などは刻目隆起線と半隆起線とで渦巻き状文を持つ。97・99・104はややいびつな連弧状文を持つ。115～117は同一個体である。125・126は同一個体であり、幅広の半截竹管文で連弧状文などを施文する。波頂部の内外面とも縦の沈線で頭部を2つに分けており、三叉状文的である。127は連弧状文から延びるＪ字状文が組み合わされるが、刻みなどを持たない。133～139は口縁部が楕円形になる台付鉢であり、133の連弧状文内部には上下に鋸歯状文が入る。134の連弧状文内には刺突文が入るが、134bは粗く浅い縄文である。140～153は浅鉢類であり、140以外は口縁部に刻みを持たない。149～151・153・154は短い渦巻き文を持つ。155～159は台部である。162・163は口縁が受け口状に開く壺形器形であり、164は短頸の壺であろうか。165～175は有孔鍔付土器であり、赤彩が多く、縄の撚りが異なる。176～178は土製円盤である。179はキャリパー器形の深鉢であり、2つの顔面表現を持つ。上には円形の孔を持ち、その下に眼と鼻を表現する。鼻は粘土貼り付である。顔面の横には短い渦巻き文をもち、間に縄文を充填する。180・181は外来系の土器で、内面に赤色顔料を塗布する。182も外来系である。183～187は櫛状具の刺突を持ち、188～193・196は貝殻文を刺突する。188の口縁部形態は飛騨地方の影響によるのであろう。200～209は半截竹管による半隆起線文を持つ古府式深鉢である。210・211・214は口縁部を無文にし、以下を縄文施文する。粗製深鉢の底部は、簾状圧痕が殆どである。225・226は縄文の撚りから有孔鍔付土器であろう。ナデ・ミガキ・ケズリ調整の粗製深鉢は227～231がある。232以降は、中期末以降とされた土器群で、233・234は後期中葉、235は八日市新保Ｉ式、236～238は御経塚式、241は弥生前期柴山出村式の赤塗り条痕壺である。

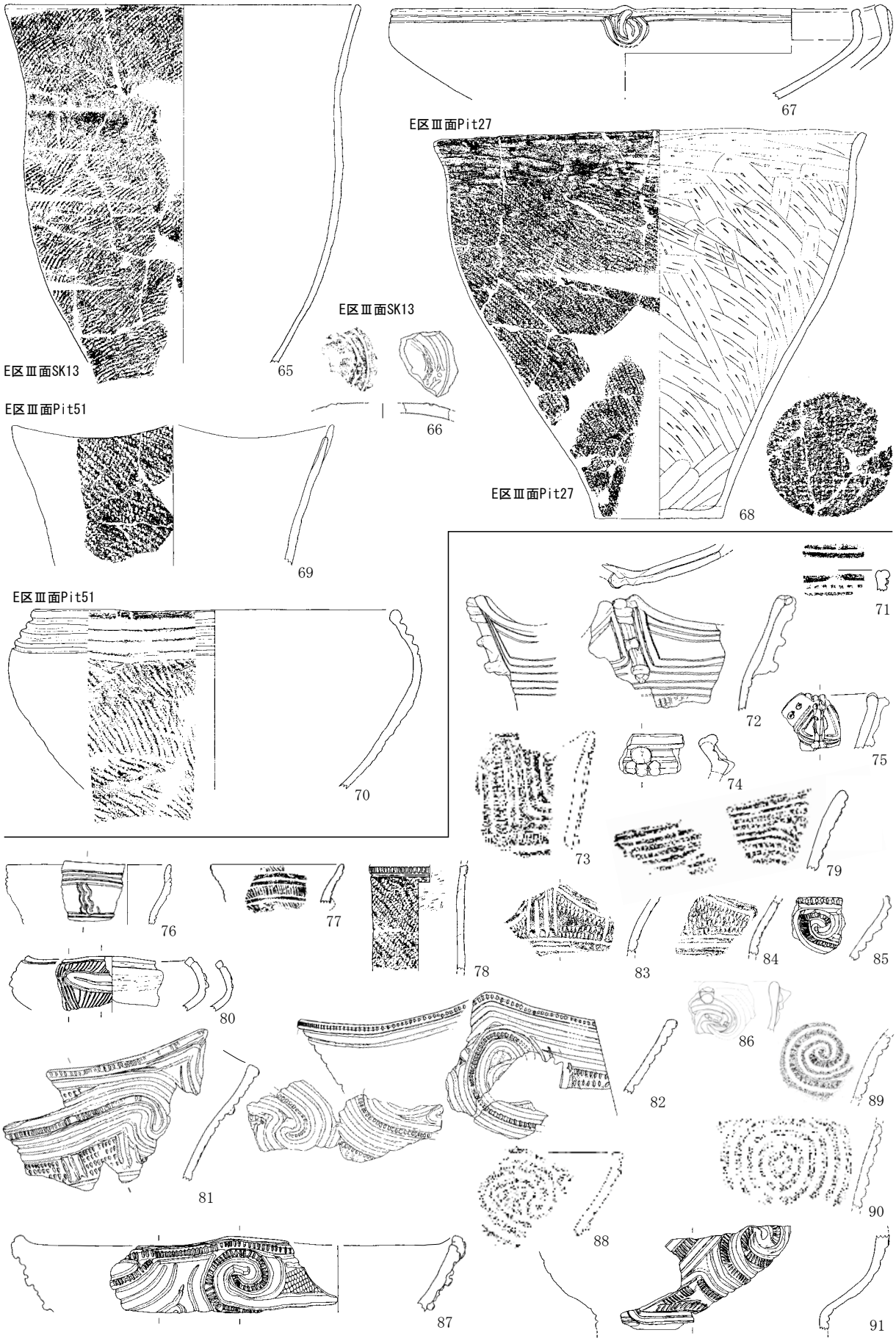
第16図242～257はD区出土の縄文土器で、古府式土器が主体である。249は串田新式、253は堀ノ内2式、254・255は御経塚式、257は中屋式、256は時期不明である。第16図258～274はＢ区出土の縄文土器である。258は頸部には長い蓮華状文を持つようであり、口縁部にはＣ字形爪型文を持つ。259は



第７図　Ｅ区遺構出土縄文土器２（S=1/5)

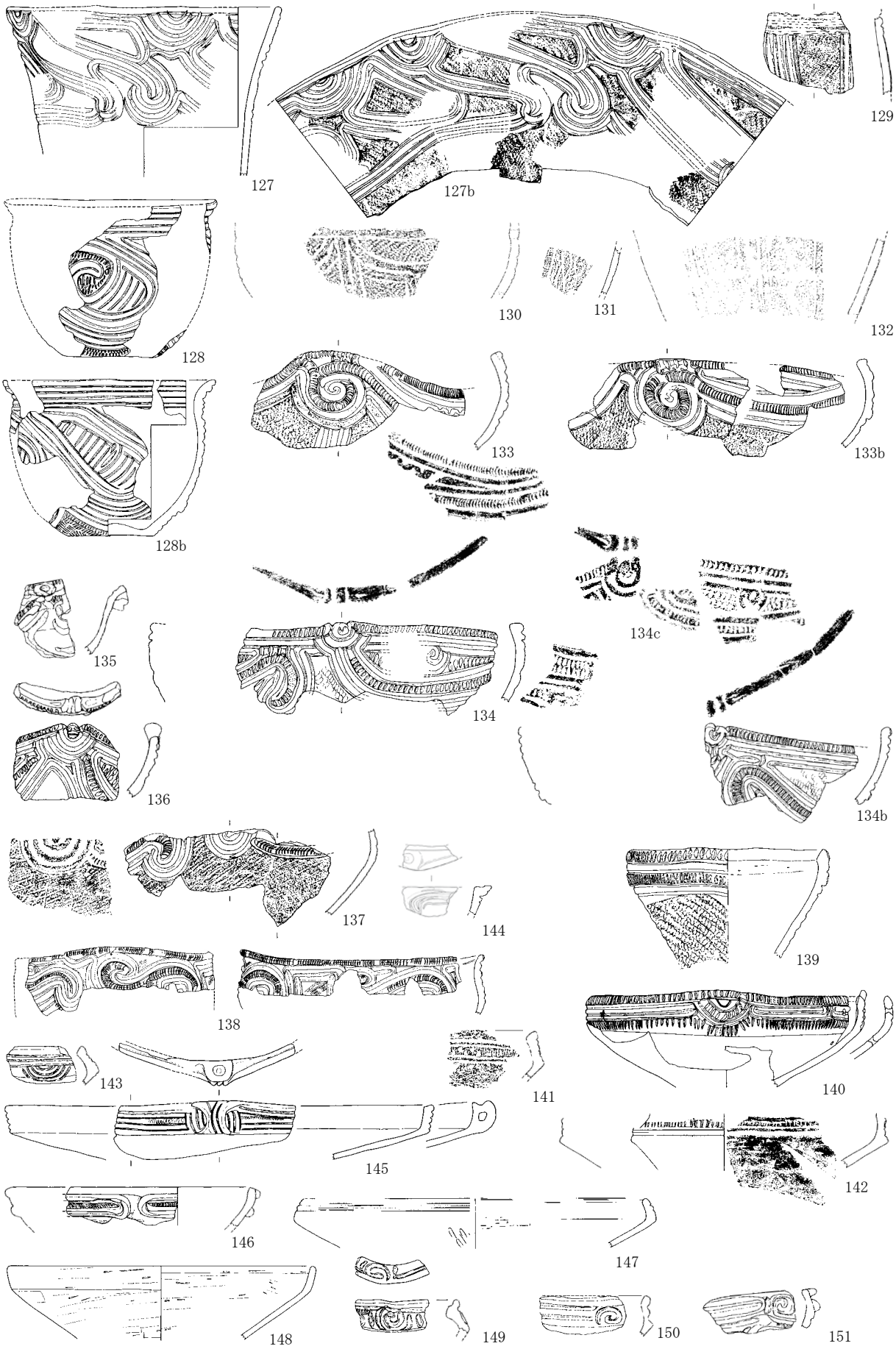


第８図　Ｅ区遺構出土縄文土器３（S=1/5）

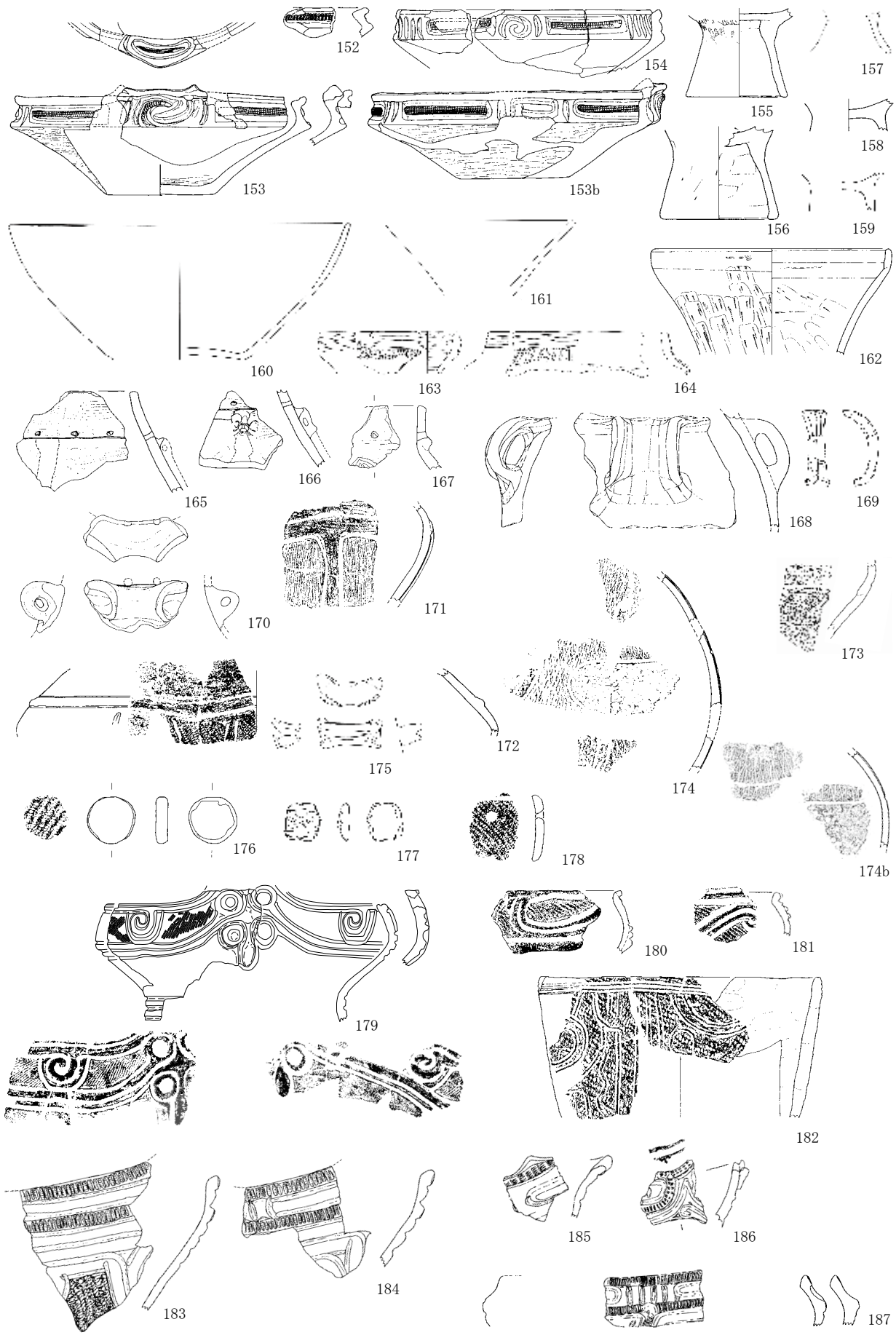


第９図　Ｅ区遺構・包含層出土縄文土器（S=1/5）

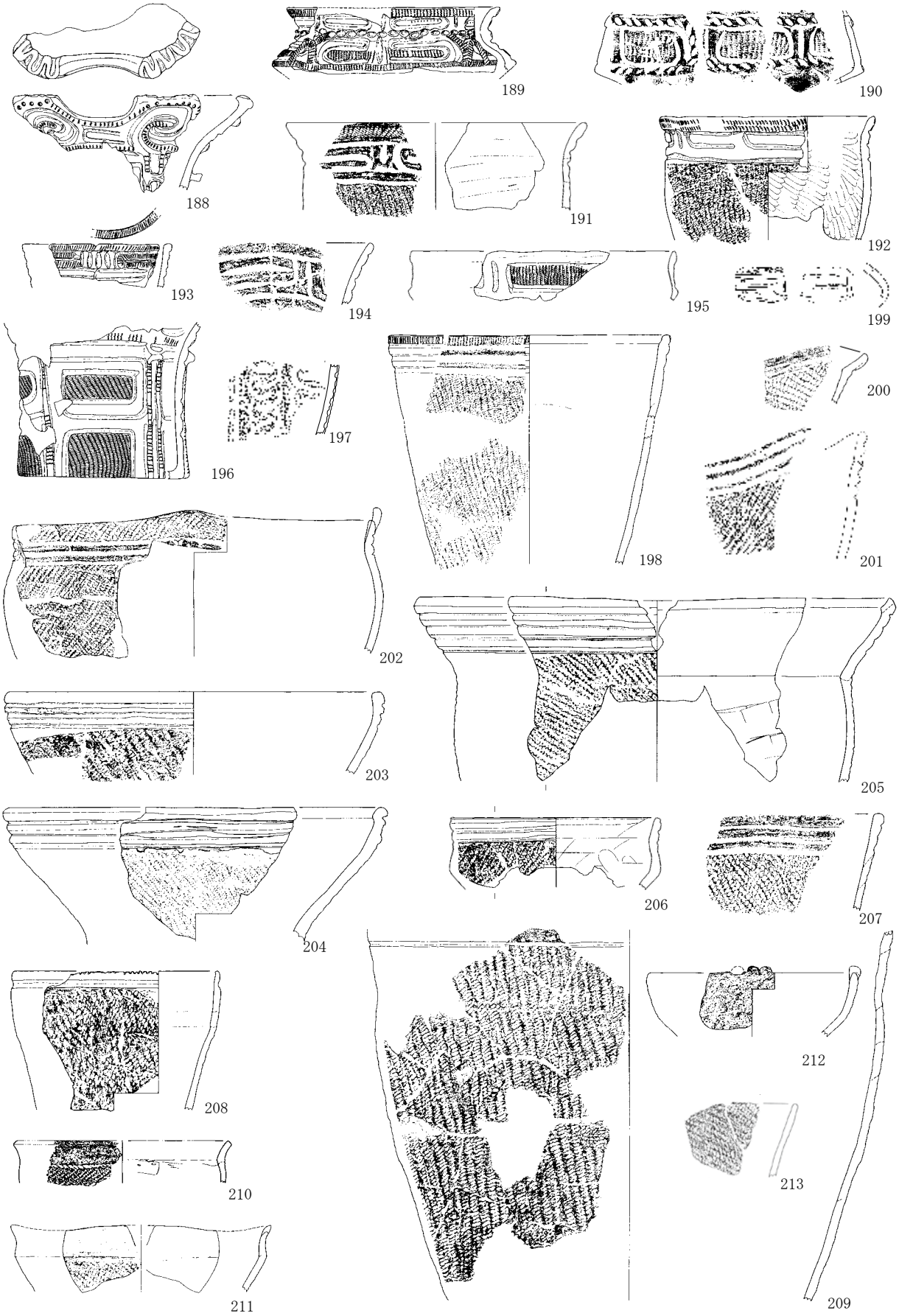
第10図　E区包含層出土縄文土器1（S=1/5）



第 11 図　E 区包含層出土縄文土器 2（S=1/5）

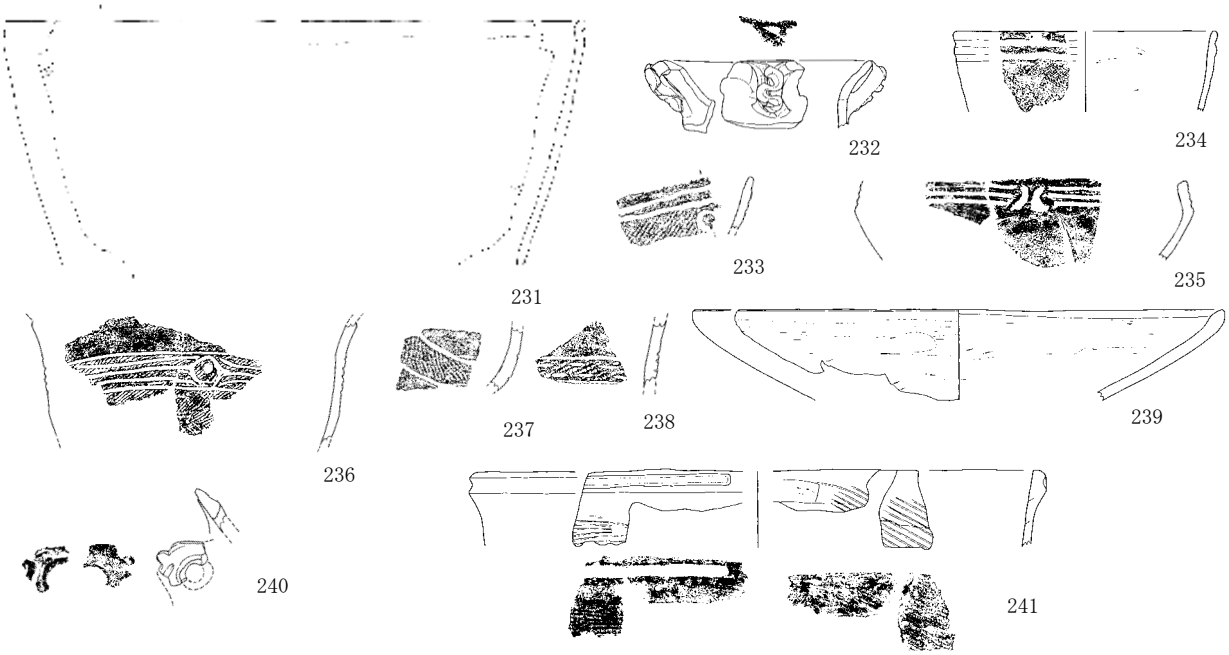


第 12 図　E 区包含層出土縄文土器 3（S=1/5）



第13図　E区包含層出土縄文土器4（S=1/5）

第 14 図　E 区包含層出土縄文土器 5（S=1/5）



第15図　E区包含層出土縄文土器５（S=1/5）

無文地に斜めの隆線を貼付け、サイコロ上の突起を貼り付けている。262・263は同一個体で、連弧状文は歪み円形の貼付け文を持つ。268～270は隆線に沿って押引き沈線文をもつ深鉢であり、胎土に金雲母を多く含むので信州産と思われる。271は御経塚式であり、272・273は御経塚～中屋式である。

４．まとめ

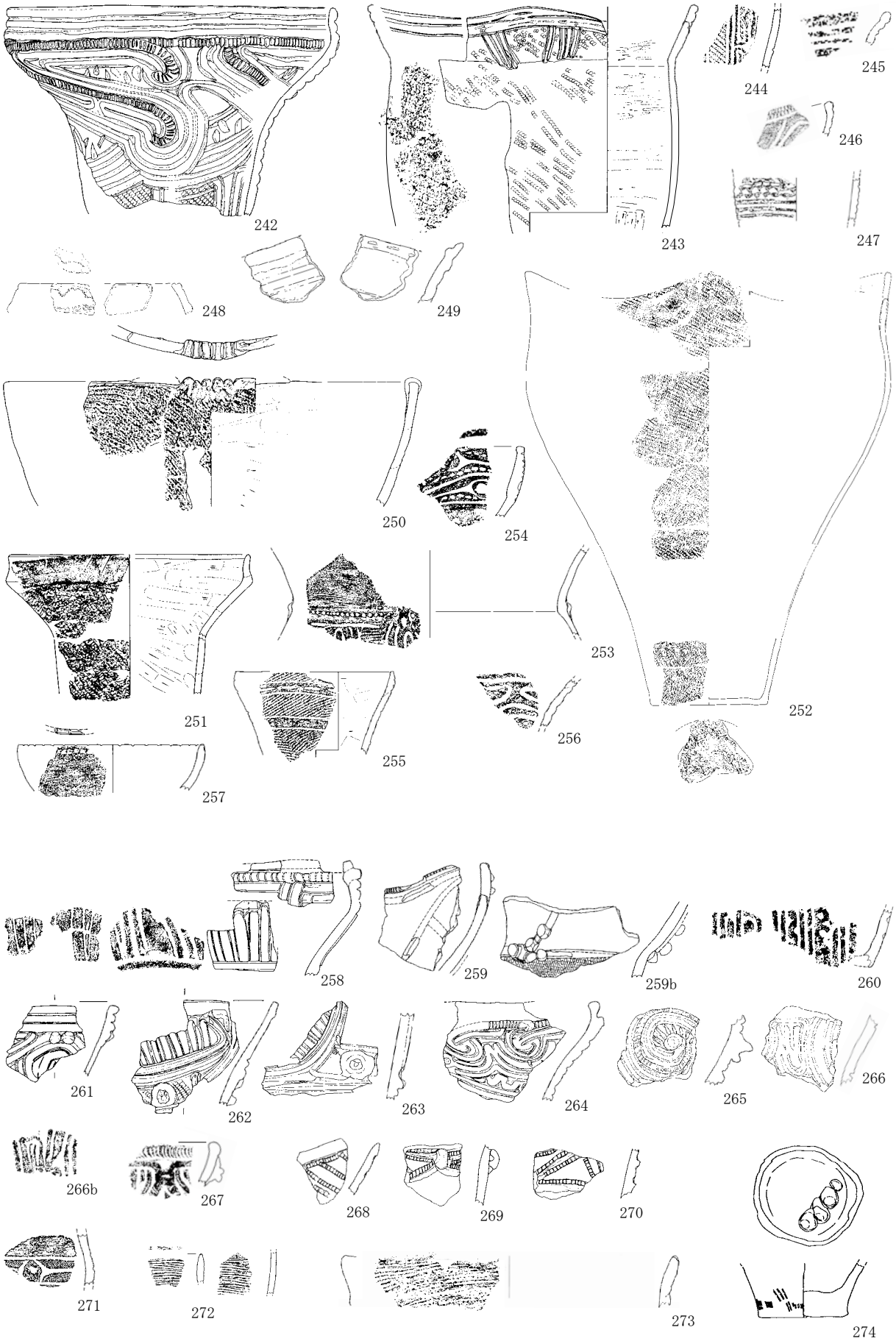
徳丸遺跡は１期（縄文時代中期中葉～後葉）と２期（弥生時代中期後葉）が主体である。１期の縄文土器は、中期中葉～後葉（上山田式～串田新式）だが、71は中期前葉後半の徳前・新崎式と思われる。上山田式は72・74・75・79・141・144・244・248・258～260・264～266、古串田新式・串田新式は13～16・18・35・149～153・183～198・249があり、その他は古府式であろう。外来系は179～182が勝坂・大木・馬高式系の影響を受けているという。180・181は同一個体であり、内面に赤色顔料が塗布されている。187は大木8期などの影響を受けたものだが、海綿骨針を含むので在地産であろう。しかし、268～270の同一個体は金雲母を多く含むので信州産と思われる。188の口縁部形態は、飛騨地方の影響を受けたのであろう。54と197の文様は同じであるが、施文工具は54半截竹管：197棒状具、刻目は54ヘラ：197櫛状具、時期は54古府：197古串田新である。口縁部の逆の字状文は沈線で単線と組み合わされており、149～151・154などと同じである。よって、54は古串田新式の直前となろう。

本稿は、報告書・情報誌46号に新たな資料（拓本・71・105）を加えて図版を作成した。観察表はページの関係で割愛したが、筆者の視点で並べたものである。石川県能登地方の縄文土器を理解する一助になれば幸いであり、各地方の視点でご教示を賜りたい。荒木智子、山崎嘉久氏の協力を得た。

参考文献

岡本恭一・横山　誠　2004　『徳丸遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター

久田正弘　2022　「中能登町徳丸遺跡出土土器の紹介」『石川県埋蔵文化財情報第46号』（公財）石川県埋蔵文化財センター



第16図　B・D区出土縄文土器（S=1/5）

小松市吉竹遺跡の絵画土器・山陰系甑形土器と石川県内のＬ字形石杵の紹介

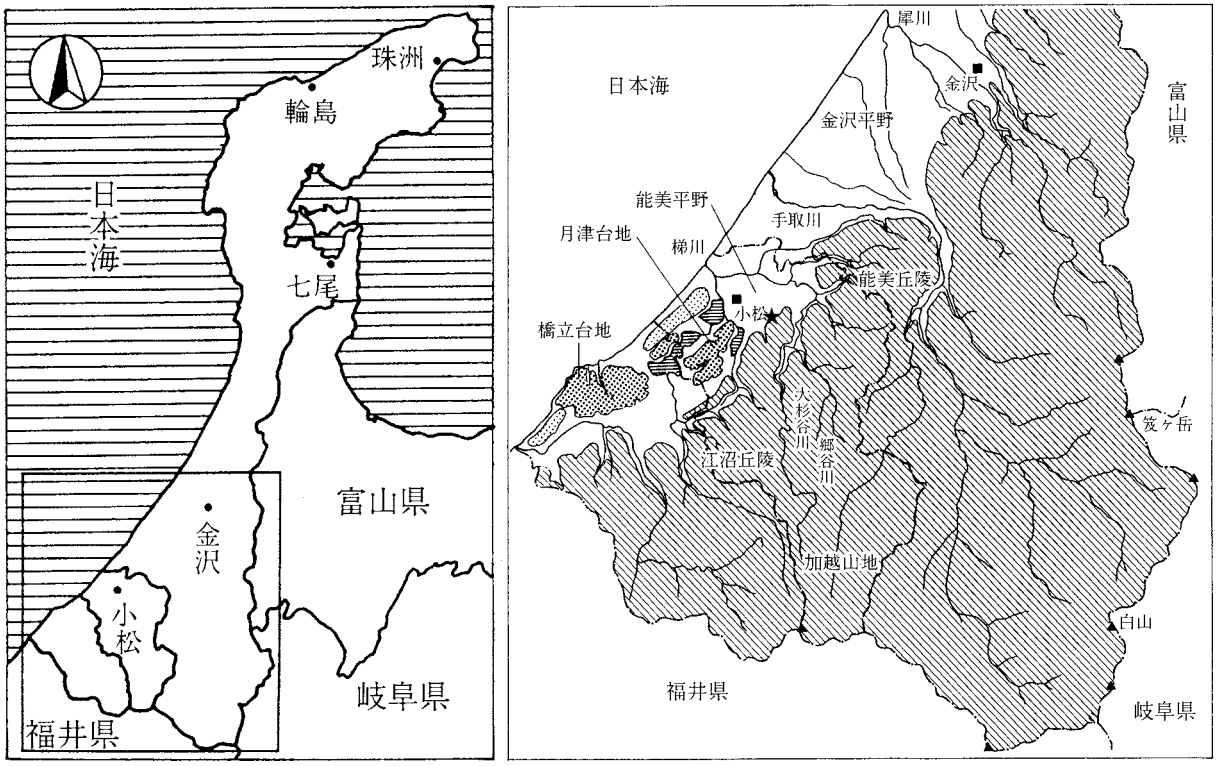
久田正弘

１．はじめに

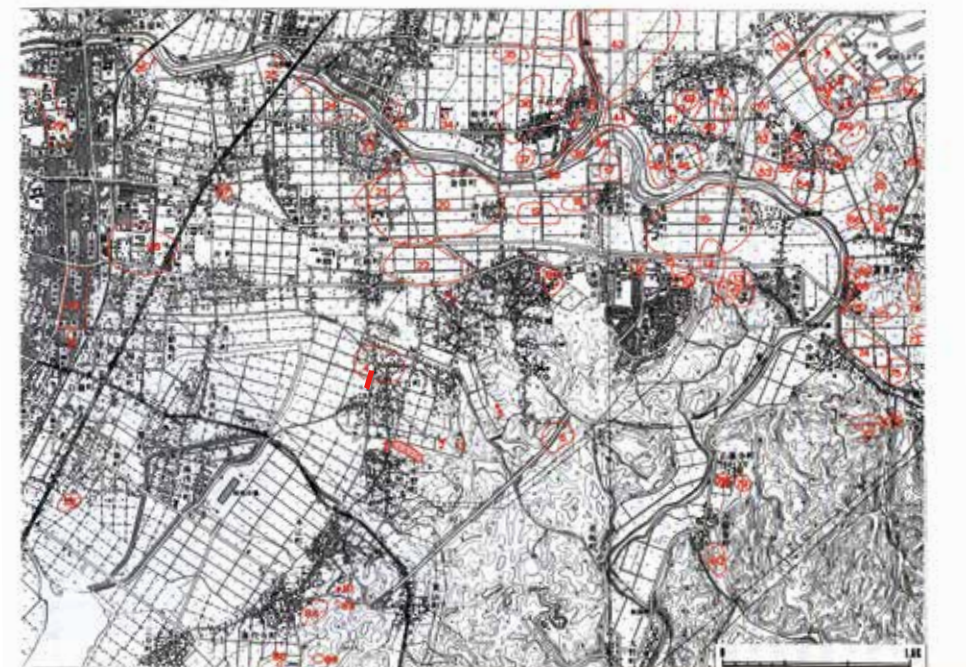
筆者は、情報誌43号にて九州型石錘と山陰系甑形土器の紹介を行った（久田2020）が、下濱貴子氏、林 大智氏から小松市吉竹遺跡の資料が抜けていると指摘を受けていた。また、下濱氏から吉竹遺跡の壺は絵画土器ではないのかとの問い合わせもあり、本稿を書くことにした。また石川県内のＬ字形石杵の類例も増えたので紹介したい。

２．絵画土器について

吉竹遺跡は、石川県南部の小松市吉竹町地内の遺跡（第１・２図）であり、昭和58・59年度に発掘調査が行われ、その成果が昭和62年に報告された（栃木ほか1987）。出土土器の多くは弥生時代後期～古墳時代前期なので、第３図１・2もその時間幅の中で位置付けられよう。1は７区土器群16からの出土であり、胴部径9.5㎝である。久田1996・2006の際には所在不明の資料の１つであったが、近年所在が判明した。胴部上半に楕円工字状文を２段配し、胴部最大径より少し下側に楕円工字状文と列点文を持つ。列点文は１段と２段があり、２段の部分は工字状文の高さがある。表面には一部に指押さえがあるが、粘土の皺・洗いハケのような削痕・ひび割れなどがあり、文様をとらえにくい。文様は基本的に連弧状の線の集合体で、舟ないし龍の絵画とみる事ができるが、龍の可能性が高いと思われる。



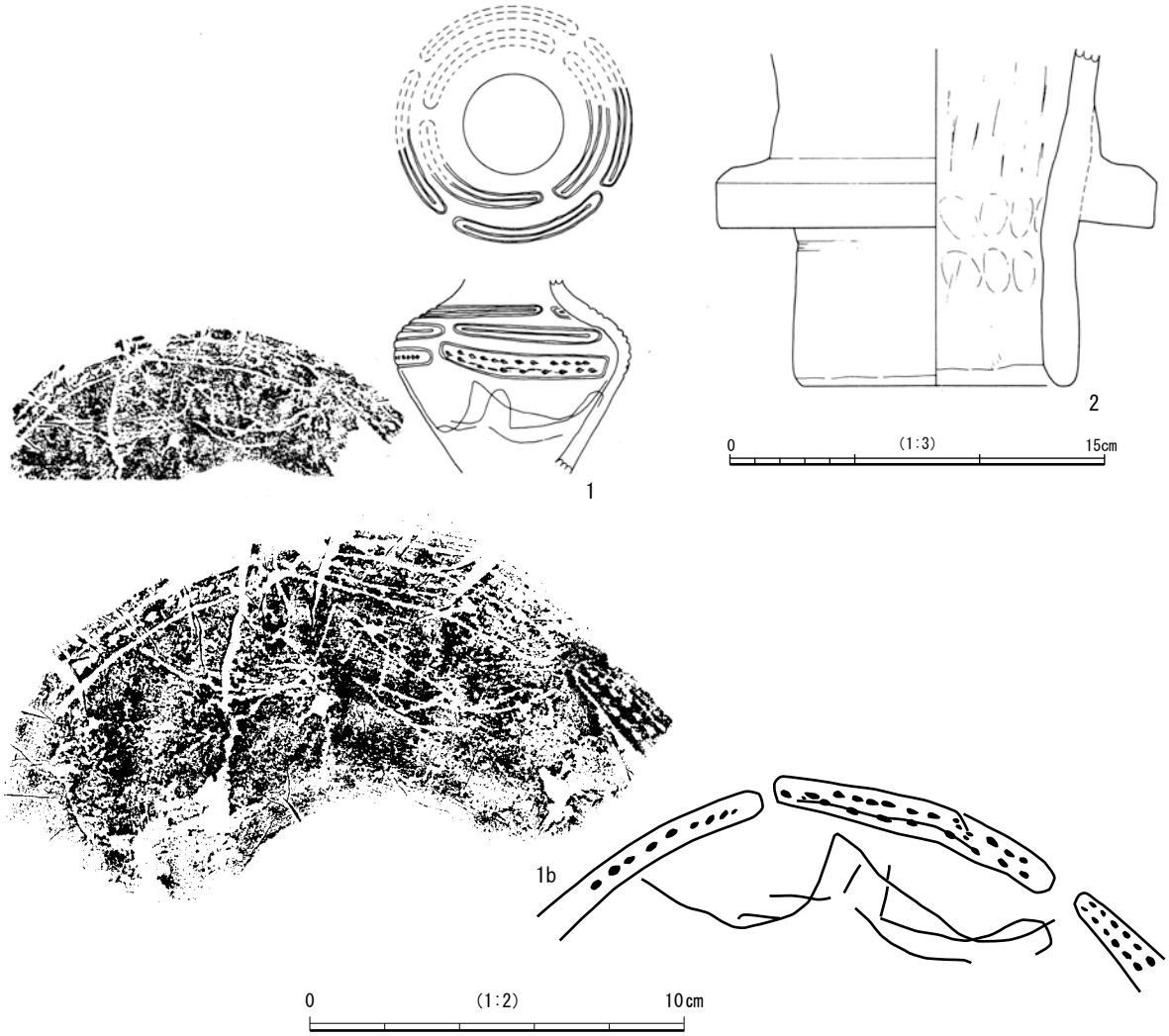
第１図　小松市の位置と地形　　樫田1996を改変



4：吉竹遺跡
■　1983・84年度調査区
28：八日市地方遺跡
20：漆町遺跡

樫田1996を改変

第2図　周辺の遺跡



第3図　吉竹遺跡の出土土器

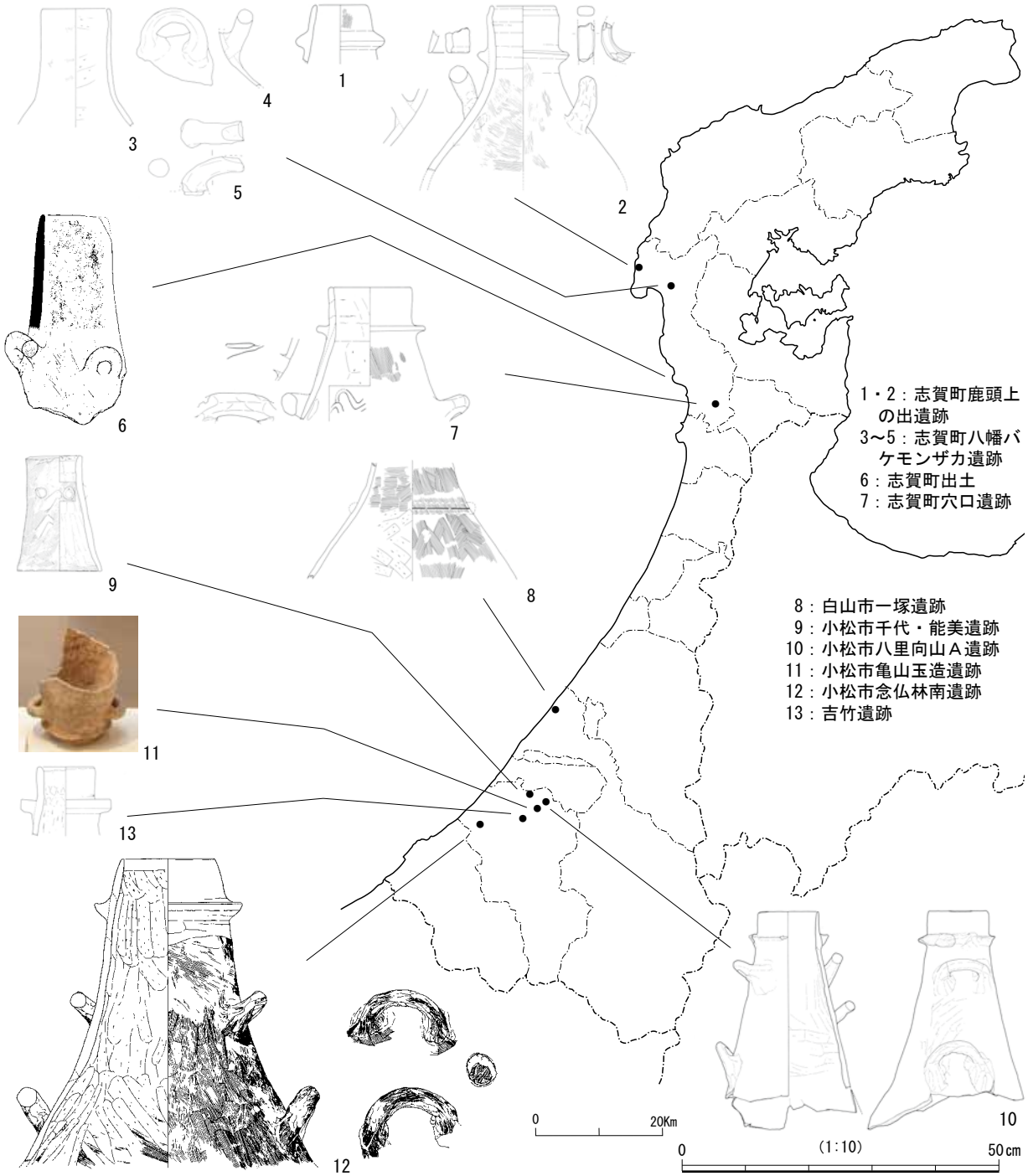
第４図　吉竹遺跡の絵画土器

３．山陰系甑形土器について

第３図２は、久田1996ｂの集成時には掲載したが、久田2020で紹介を失念した資料である。９区表採で口径10.8㎝というが、所在不明である。突帯の幅が広く、断面が四角いものである。県内の出

土状況を示す第５図が示すとおり、能登半島西岸（旧富来町を含む）志賀町と県南部の小松市で出土が多い。

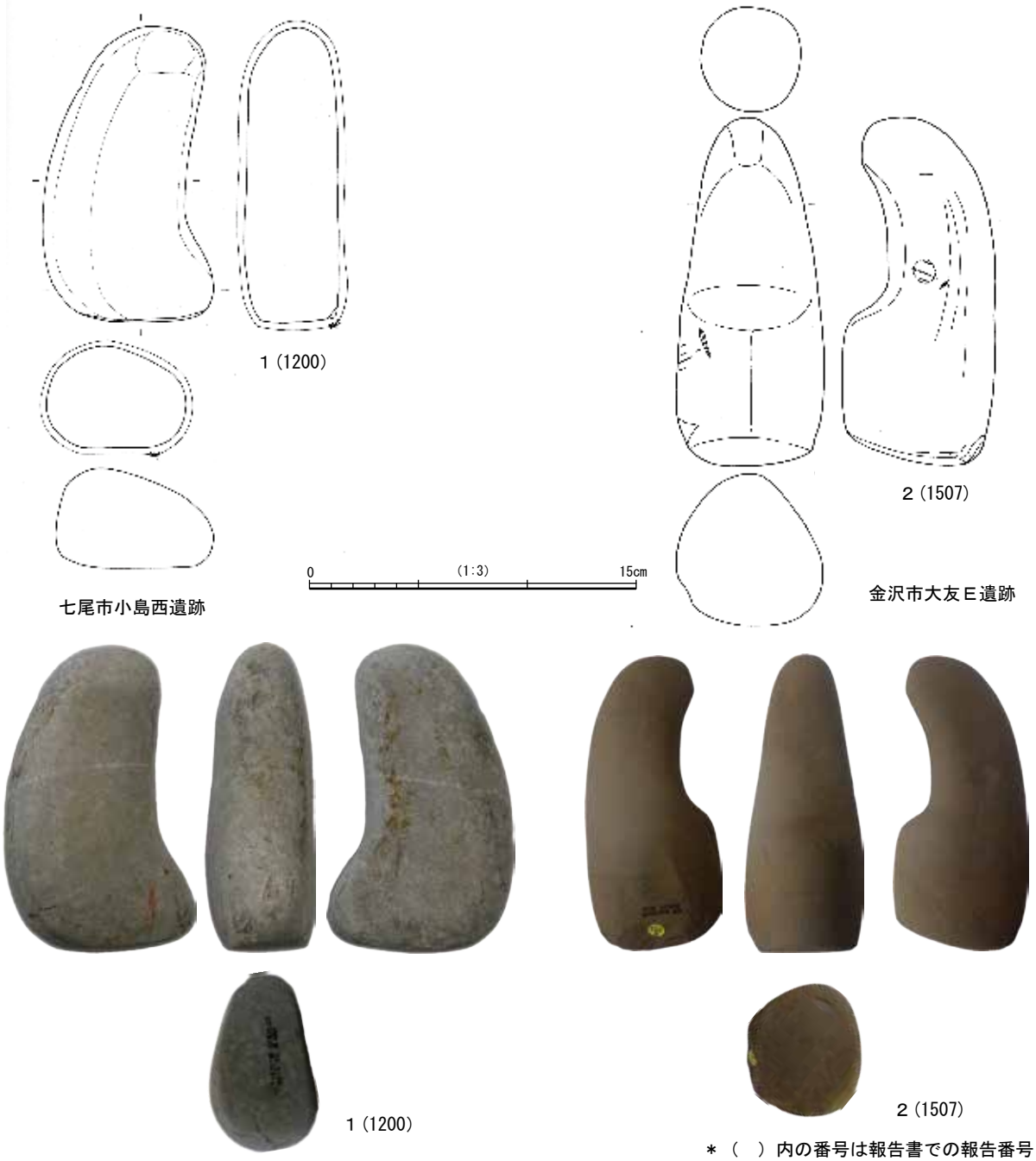
志賀町（旧富来町）鹿頭上の出遺跡１・２（久田ほか1989、弥生時代後期後半～末）、志賀町（旧富来町）八幡バケモンザカ遺跡３～５（松田ほか2000、弥生時代後期後半～末）、志賀町出土地不明６（志賀町役場1974）、志賀町穴口遺跡７（宮川ほか2004）がある。加賀地方では、白山市一塚遺跡８（前田1995、弥生時代後期末）、小松市内には千代・能美遺跡９（林ほか2012、古墳時代前期）、八里向山Ａ遺跡10（望月ほか2004、弥生時代後期末）、亀山玉造遺跡11、念仏林南遺跡12（樫田ほか1994、弥生時代後期末）、吉竹遺跡13（栃木ほか1987、弥生時代後期～古墳時代前期）である。



第5図　石川県内の山陰系甑形土器

４．県内のＬ字形石杵について

北陸地方のＬ字形石杵は石井2009を受けて、久田2013・2020で紹介したが、現在は福井県２例・石川県３例を確認した。第６図１(1200) は七尾市小島西遺跡の河道（鞍部）の古墳時代～古代の層から出土し、砥石と報告されたものである（大西ほか2008)。右側面を砥石として転用しているようだがＬ字形石杵であり、長さ136㎜、幅78㎜、厚さ47㎜、重量742ｇ、作業面には水銀朱の痕跡は確認出来ない。第６図２(1507) は金沢市大友Ｅ遺跡３区 G52ｇ SD3002（自然河川）下層出土で、独鈷石と報告された（景山ほか2016)。長さ160㎜、幅67㎜、厚さ70㎜、重量51ｇの灰黄色の砂岩製であり、作業面に赤色顔料を確認した。他に、七尾市万行遺跡Ｂ７区・Ｌ13区遺構検出面から出土したものは全長128㎜、幅71㎜、厚さ55㎜、重量656ｇで、表面は丁寧に研磨され、正面先端が欠損するがＬ



＊（　）内の番号は報告書での報告番号

第6図　石川県内のＬ字形石杵

字形石杵である。作業面の窪みには水銀朱が多く付着し、欠損部や頭部にも薄く水銀朱が確認される。
第6図1・2は、デジカメで撮影したメモ画像であり、本来の色調ではないことを断わっておく。

５．おわりに

北陸地方の絵画土器の出土例は少なく、しかもいまだ絵画と認定されていないものもあるだろう。山陰系甑形土器やＬ字形石杵は、１つでも存在した意義は大きいと思われるので、ここに再提示を行った。特にＬ字形石杵（水銀朱精製）が石川県でも出土していることを認識してもらい、石器の再評価を進めることが必要である。本稿によって、遺物の新たな知見が広まれば幸いである。本稿をまとめるにあたり、池田　拓、石井智大、伊藤雅文、伊藤好美、楠　正勝、下濱貴子、林　大智氏の協力を得た。

参考文献

石井智大　2009 「弥生時代Ｌ字状石杵の歴史的意義」『古代第122号』早稲田大学考古学会
大西　顕ほか　2008 『小島西遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
景山和也ほか　2016 『大友Ｅ遺跡―大友遺跡群―』金沢市埋蔵文化財センター
樫田　誠　1994 『念仏林南遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
志賀町役場　1974 『志賀町史　資料編第一巻』
下濱貴子ほか　2016 『八日市地方遺跡Ⅱ第５～７部』小松市教育委員会
栃木英道ほか　1987 『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
林　大智ほか　2012 『千代・能美遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
久田正弘ほか　1989 『鹿頭上の出遺跡』富来町教育委員会
久田正弘　1996 「石川県内の絵画・記号文集成」『石川県埋蔵文化財保存協会年報８－平成８年度』（社）石川県埋蔵文化財保存協会
久田正弘　1996b 「北陸地方と他地域との関係1」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会
久田正弘　2006 「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究―論考編』六一書房
久田正弘　2013 「富山県における弥生研究の一視点―資料調査の成果を踏まえてー」『大境第32号』富山考古学会
久田正弘　2020 「弥生時代における北陸西部と下越地方の交流」『令和元年度史跡古津八幡山弥生の丘展示館企画展関連講演会記録集』新潟市文化財センター
福海貴子ほか　2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
前田清彦　1995 『旭遺跡群Ⅰ　一塚遺跡』松任市教育委員会
松田睦夫ほか　2000 『富来城跡』富来町教育委員会
宮川勝次ほか　2004 『穴口遺跡・穴口貝塚』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター
望月精司ほか　2004 『八里向山遺跡群』小松市教育委員会

古墳時代モガリについての一思考

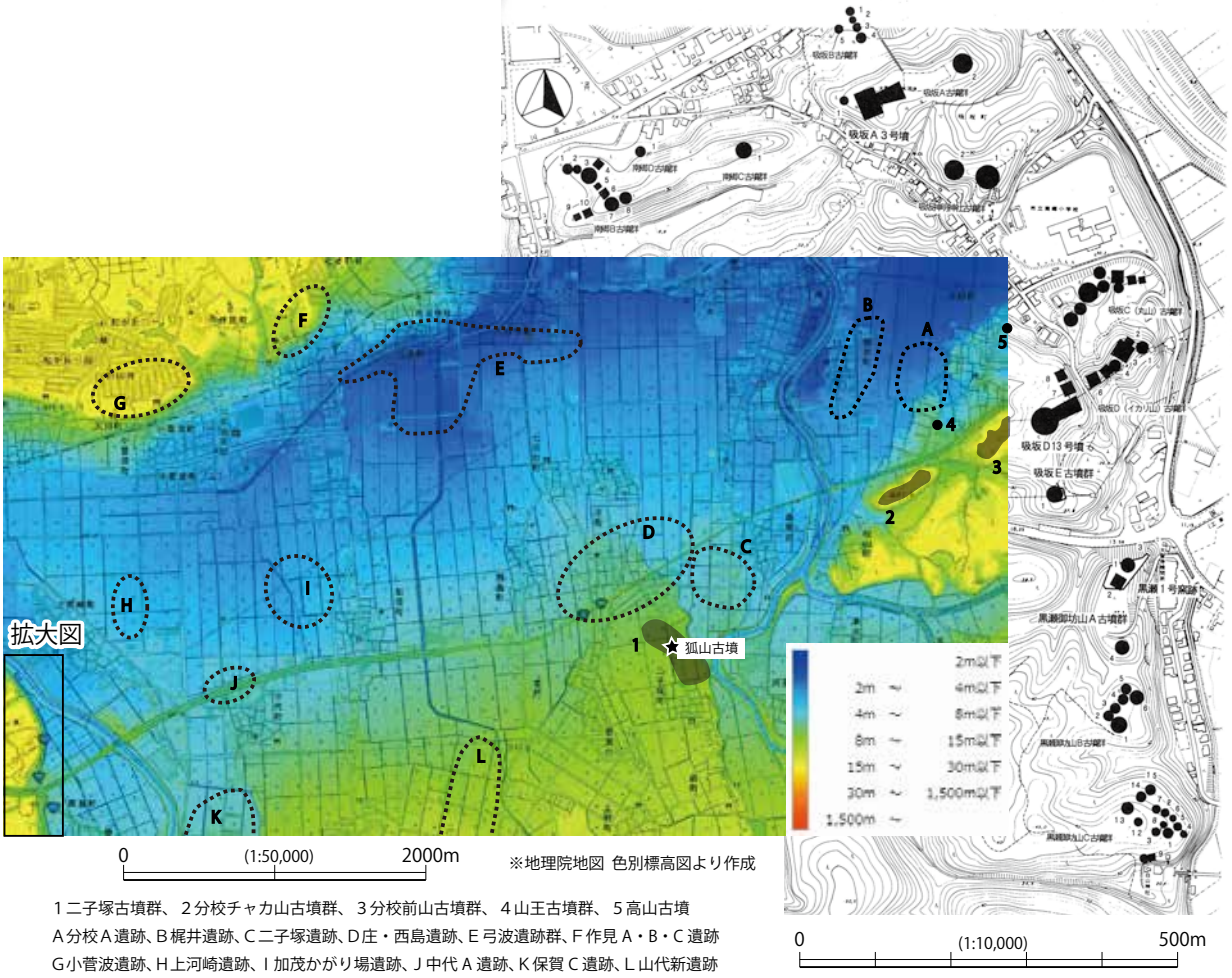
－黒瀬御坊山 A2号墳出土剣の囲蛹殻（いようかく）をめぐって－

伊藤雅文

はじめに

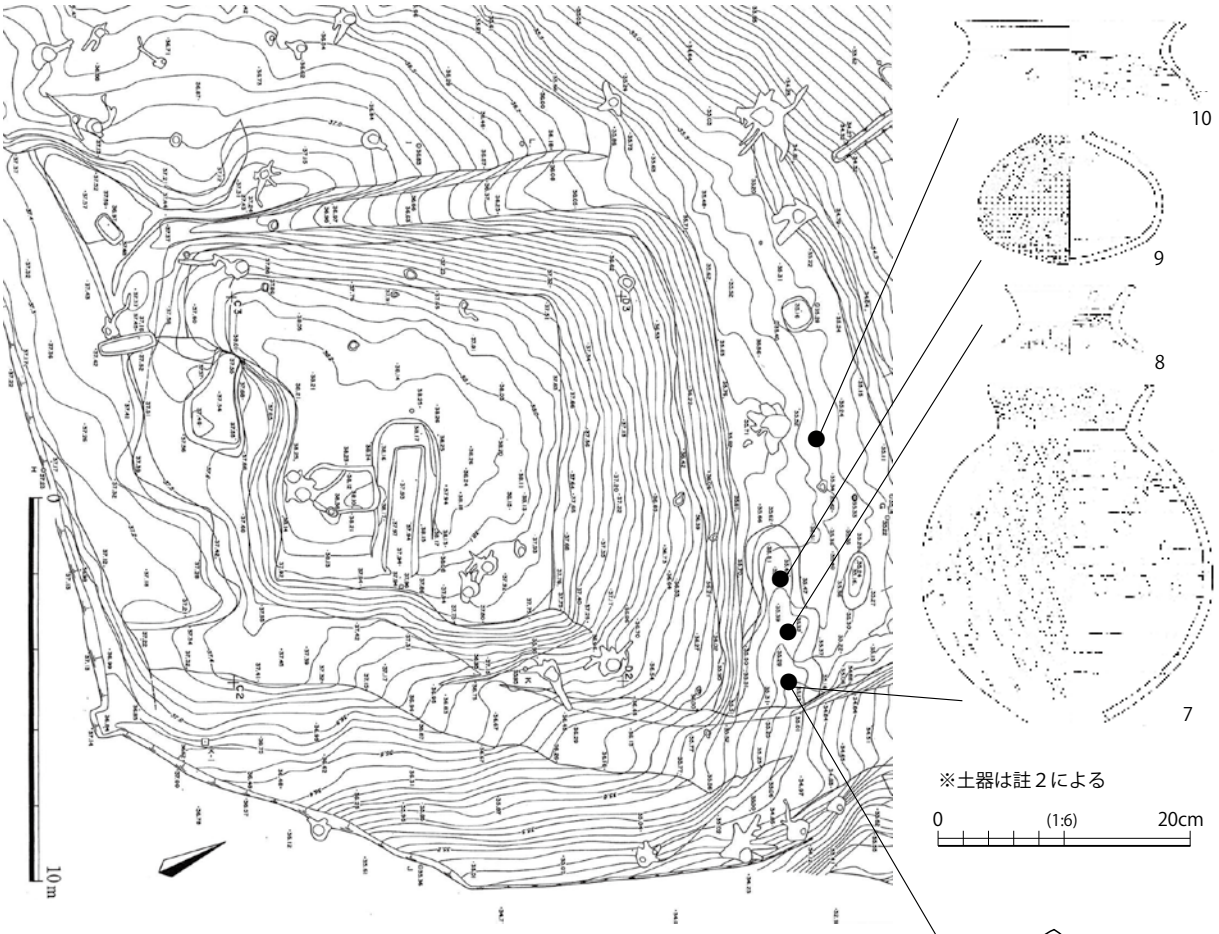
当県は14県で構成される古代歴史文化協議会[1]の共同調査研究に参加しており、当財団も調査研究に協力している。第2期共同研究として令和元年度から「古墳時代の刀剣類」をテーマに研究を進め、今年度で区切りとなる予定である。その集成作業の過程で資料の見直しなど行なっていたところ、平成9年（1997）に発掘調査された加賀市黒瀬御坊山Ａ２号墳埋葬施設から出土した剣に双翅目（ハエ目）囲蛹殻（以下ハエ囲蛹殻と略）の付着を確認し、再度実測図を取り直すなどの調査をおこなった。もちろん、発掘調査報告書[2]（以下報告書と略）でも観察されており、「布目痕（10条/cm）帯があり、帯中に米粒大の、凹みがある。凹みは何かの虫の卵或いは蛹の圧痕のようにも見えるが、布に刺繍が施されていたのかもしれない。」とその存在に注意を払いつつも断定を避けている。

ハエ囲蛹殻が広く研究者に注意されるようになったのは、おそらく出土人骨とともに多数のハエ囲蛹殻が出土した愛媛県葉佐池古墳の調査[3]によるところが大きいと考えられる。黒瀬御坊山 A2号墳を調査して遺物整理から報告書作成した当時、ハエ囲蛹殻の知識が私たちに十分でなく、報告書が刊行された後も剣についた圧痕とそれが結びつくことなく、忘却されていたのである。

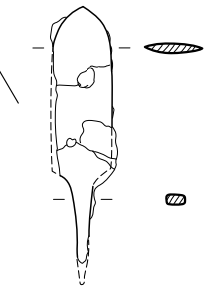


１二子塚古墳群、２分校チャカ山古墳群、３分校前山古墳群、４山王古墳群、５高山古墳
Ａ分校Ａ遺跡、Ｂ梶井遺跡、Ｃ二子塚遺跡、Ｄ庄・西島遺跡、Ｅ弓波遺跡群、Ｆ作見Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡
Ｇ小菅波遺跡、Ｈ上河崎遺跡、Ｉ加茂かがり場遺跡、Ｊ中代Ａ遺跡、Ｋ保賀Ｃ遺跡、Ｌ山代新遺跡

第１図　周辺の遺跡分布図（S=1/50,000）、古墳群分布図（註２より改変）（S=1/10,000）



墳丘と墳丘出土遺物（S=1/200）



航空写真（北西から）
左が１号墳で右が２号墳

墳丘全景（西から）

第２図　A2 号墳墳丘（註２から引用・改変）

年度当初に行った刀剣類集成表をチェックしたところ、当該資料の集成表備考欄の記載が気になったので、筆者が遺物を確認したところ、報告書で述べられた「虫の卵」や「刺繍」でなくハエ囲蛹殻であると確信した。ハエ囲蛹殻は全国的にも確認例が少ないものの、古墳時代の埋葬過程を直接的に知ることができる可能性を持つ重要な資料である。本稿では、出土した意味を考察したい。

なお、この認識に基づく資料化のために、筆者が実測と写真撮影など行った。実測にあたっては、X線透過による観察もおこない、剣の関部と茎部および布目圧痕で報告書の認識に問題があると分かったので、剣についても再検討結果を報告するほか、同時に出土した鉄鏃についても誤った認識があったので、再実測して修正を加えた（第２図）。

１．黒瀬御坊山Ａ２号墳について

黒瀬御坊山 A2号墳は、加賀地域の低地部南西端にあたる通称江沼低地に東面する丘陵上に位置する。江沼低地は、南東の山麓から流れ出す大聖寺川と動橋川が形成した沖積地で、現在の柴山潟などの潟湖や北潟河口につづく低地帯となっている。おおむね標高8m 前後の低地部には弓波遺跡や二子塚遺跡など弥生時代から続く集落遺跡が営まれているほか、低地部を望む丘陵上には小菅波墳墓群や分校カン山（前山）１号墳などの弥生墳墓と古墳が多数築かれている。

低地に面する西側の丘陵は100基程度の古墳が密集するエリアであり、そのうちの一基が本墳である。この南北1㎞強の範囲に南郷古墳群26基（Ａ～Ｄ支群）、吸坂古墳群27基（Ａ～Ｆ支群）、黒瀬御坊山古墳群23基（Ａ～Ｃ支群）などが分布する。群を構成する古墳には、加賀最大の前方後方墳である吸坂 A3号墳（全長61ｍ）や大型前方後円墳である吸坂 D13号墳（全長67m）があり、首長墳も築かれているのが特徴である。調査が一部にしか及んでいないが、断続的ながら古墳時代のほぼ全期間にわたって、時期ごとに異なる場所で古墳を造営し、墓域として機能し続けたようである。吸坂Ｃ支群（吸坂丸山古墳群）の吸坂丸山5号墳では、小札鋲留衝角付冑と肩甲のセットや細身の金製耳飾りが出土するなど、小古墳ながら特徴ある副葬品である。

黒瀬御坊山Ａ支群は、1辺20m の1号墳と15ｍの2号墳の方墳2基からなる支群である[(4)]。1号墳は、木棺直葬により棺内から面径7.2㎝の乳文鏡、碧玉勾玉、滑石臼玉のほか長頸鏃が出土しているので、2号墳よりも後出する。5世紀後葉築造である。

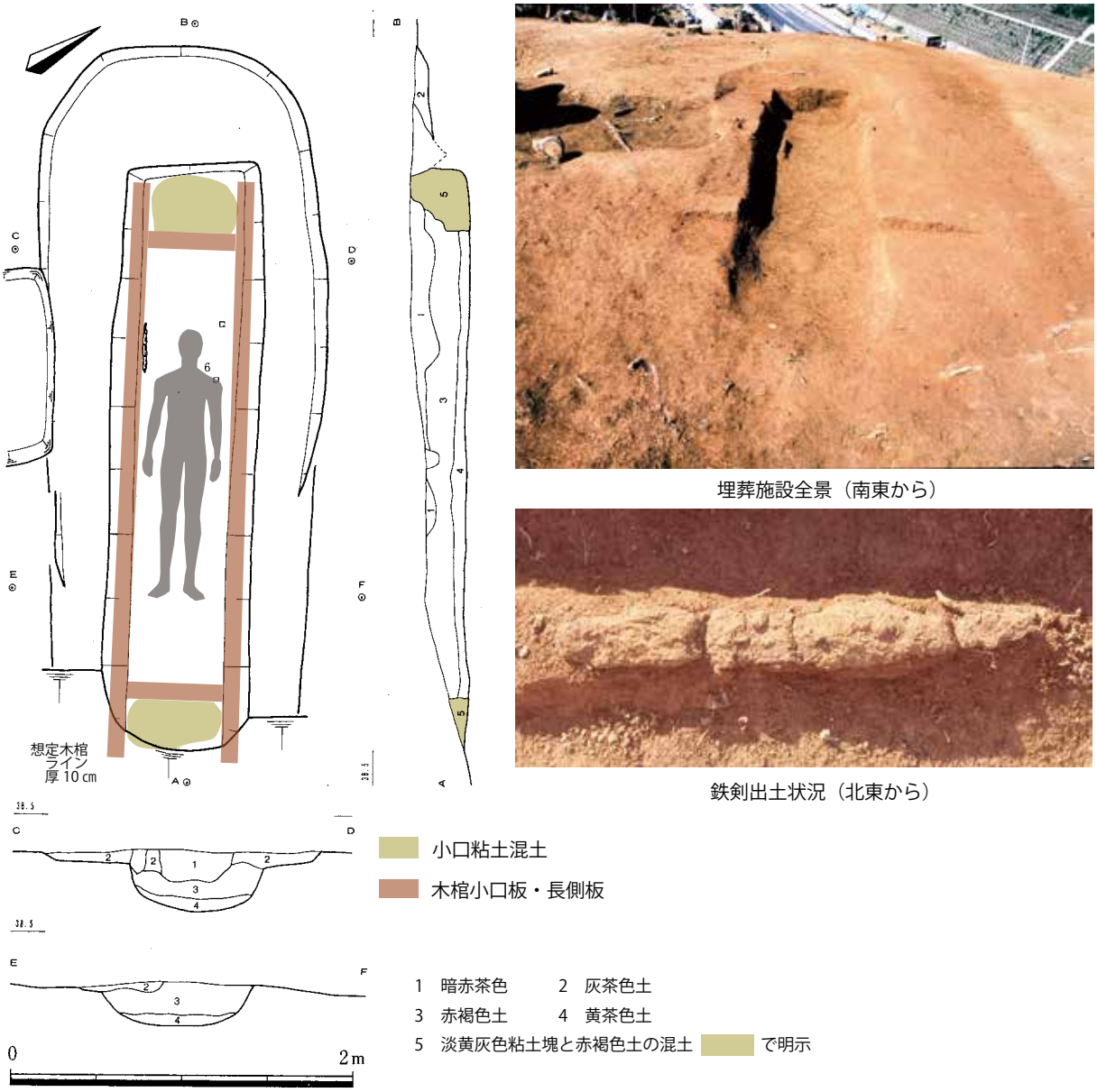
2号墳は丘陵頂部の平坦面からやや下がった位置に墳丘が作られ、「L」字状に周溝を掘削して墳丘を作り、墳頂中央あたりに埋葬施設を1基構築している。土器は主に墳丘北裾あたりに集中して出土しており、7の土師器壷の下から柳葉鉄鏃も出土しており、墳丘外で行なわれた祭祀によるものと考えられる。概ね5世紀初頭頃の築造であろう。

埋葬施設は木棺直葬だが、粘土と赤褐色土を混和した土を小口に用いており（これを小口粘土と称する）、粘土槨を意識した構造である。墓坑東端は削平により失われているものの、木棺部分はほぼ完存している。木棺底が墓坑底をさらに一段「U」字状に掘り込まれ、木棺底部外形を示すものである。埋葬施設主軸土層断面では両小口粘土が木棺内側に面を持つようにあり、これも木棺小口板の状態を示す。しかも木棺内最下部にある黄茶色土（№4）は8㎝程度の厚みで水平に認められ、木棺底板に関わるものであろう。すなわち、両小口粘土の間が木棺の底板であり、底板外に小口板を置くものでなく、底板上に小口板を置く形式である。そして刳貫式木棺の可能性はない。

以上の観察から、底板、2枚の長側板、2枚の小口板そして蓋板から構成される組合式箱形木棺と想定される。このような構造の場合、一般的には、2枚の長側板が底板よりも長く両小口粘土を挟む。本墳では判断するデータはないが、おそらく木棺掘り込み一杯に長側板が及んでいるだろう。したがっ

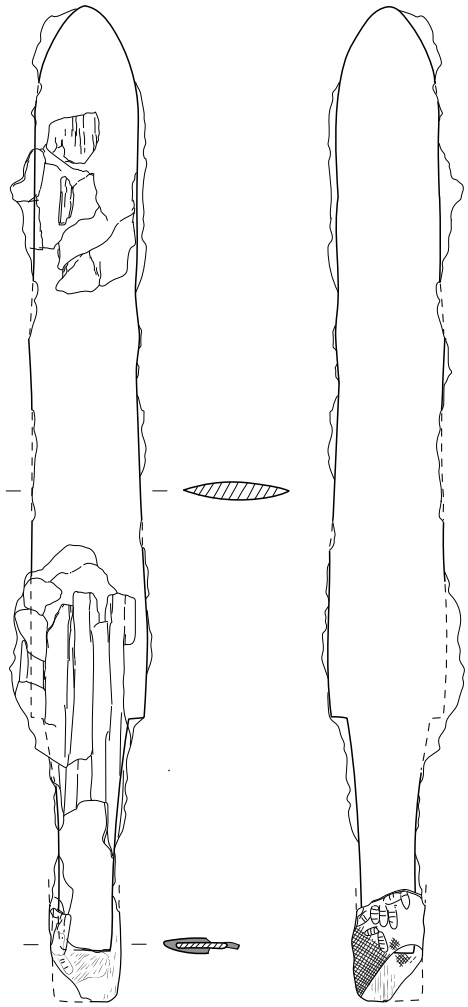
て木棺は内寸長約2.7m、同幅約0.5mで、木棺底は水平である。

一般的に被葬者の頭の方が棺底レベルを高くしたり、あるいは木棺幅が広くなるという傾向にあるものの、本墳ではそれを判断できるデータはない。想定される西小口板から約40cm離れて出土した鉄剣は、剣先を反対の東小口に向けており、これを手がかりとすれば、西に頭を向けて埋葬されていたと想定できる。そして被葬者が木棺の中央に埋置されたとすれば、頭部右側付近に剣が置かれていた状況を復原できる。50cmから55cm程度の箱形木棺の外寸幅の事例が多いので、本墳の場合はそれらよりやや幅広い木棺となろう。すなわち、遺骸は木棺の内部でゆったりと置かれていると考えられる。それゆえ、長側板に接すると想定した剣と遺骸との間には若干の空隙が存在していると考えられ、被葬者に密着した状態ではない。



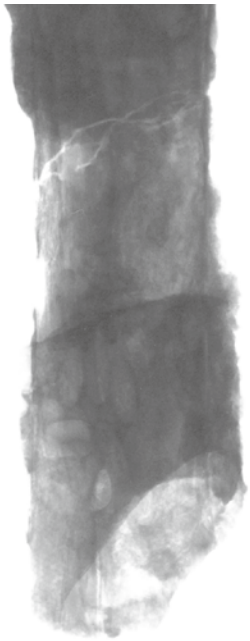
第３図　A2号墳墳丘（註２から引用・改変）

剣全体写真とX線画像（剣身が２つに割れた状態）
（概ね縮尺 1/2）



0 (1:2) 10cm

剣実測図　※伊藤実測



X線画像

表

裏

拡大写真

第４図　黒瀬御坊山 A2 号墳出土剣

２．出土鉄剣の観察

報告書における剣本体の所見については、全長26.5㎝、身部幅3.7㎝、茎部長5.7㎝とあり、関部は特に記述なく、茎部は栗尻で布帯付着、片面付着の木質は木棺材、という内容であった。これを以下のように訂正する。

剣は、全長25.0㎝、身部長18.8㎝、身部幅2.8㎝、茎部長6.2㎝をはかり、小さな直角関である。身部の幅は剣先から関部にかけてあまり変わらず、若干太くなるようである。剣身には鎬がなく、レンズ状の横断面形で5㎜程度の厚みである。関は4㎜の長さで直角に屈曲し茎部に続く。茎部は関から漸次幅を減じて茎尻となっており、目釘孔が認められない。錆から茎部の幅を知る部分は少ないが、その端部（茎尻）では厚さ2㎜と薄いので、おそらく茎先端にかけて厚みが薄くなるのであろう。

剣の一方面には木質が遺存している。木目は幅広で粗く、スギのような針葉樹と思われる。木質は身部から茎部にかけて切れ目なく連続しているので、鞘や把の部材の可能性は考えられない。木質が残された側が下面に接していることからも、この木質が出土木棺材と判断できる。以上より、この剣は、鞘や把が装着されていない状態で副葬されていたのである。

次に茎部の一部を覆っている布及びそこに付着した囲蛹殻について観察する。

便宜的に木棺に接しない方を表として記述を進める。茎部端部には布が残っている。布は両側縁が当初の形状を保っており、筒状を呈するようだが、縫い目はわからない。表面では右隅にかけて斜め方向に鋭利なもので切られたような直線的に失われている部分がある。布の内側には有機質のようなものが認められ、材質はわからないが何かに布を貼りつけていたと考えられる。木棺に接する側には布の痕跡が認められないが、表と同じように有機物のようなものが観察されるので、表面における布がはがれた状態と判断できよう。布の下端は直線的になって左側縁から布目が連続するので、布が折られた状態で、いわば袋のような構造ではないかと考えられる。布の上端は直線ではないが切り取られたように直線的な縁となっている。そこを仔細に観察すると、わずかに端部が反り返っており、切り取りによりめくり上がったものと考えられる。このように考えると、布が剣先方向にさらに伸びており、剣身に布が残っていないので、副葬時における布の範囲は茎部端のみであった。布部分を仔細に観察すると、付着したハエ囲蛹殻から右側部分において布目の確認が困難で、部分的に漆のような滑らかな面となっている。表現は適切でないかもしれないが、布目がコーテイングされているように見える。作為的かどうかわからないが、特記すべき観察として報告する。

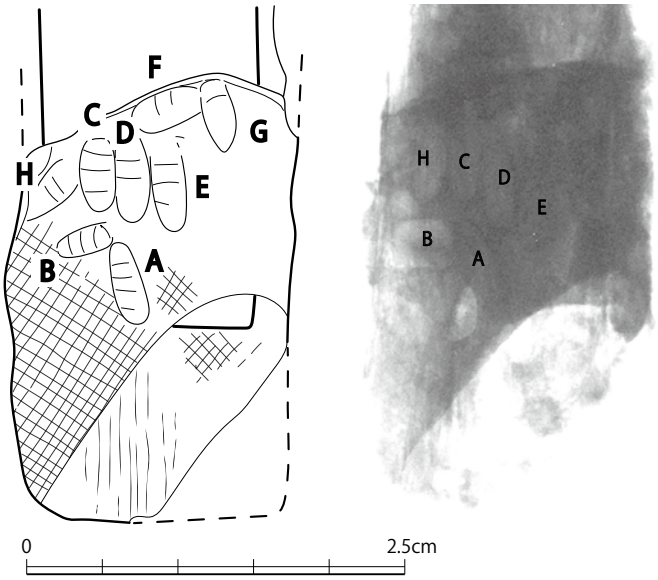
剣の茎端部は布の下端から1.3㎝離れており、布を袋としてその末端まで剣が入っておらず、軽く差し込んだような状態である。

ハエ囲蛹殻と判断した圧痕はこの布の上にあり、そこ以外では確認できない。その圧痕は9箇所あり、一見すると長楕円形を呈するが、一方端が直線的になっているところもある。凹み内部には長軸に直交する筋が認められる。このような特徴から、昆虫の蛹等の可能性が高いと考え、類例からハエ囲蛹殻と判断した。検出されたその痕跡は、その上半分が欠損した状態である。平面的にほぼ完全な輪郭を残すのはＡ・Ｃ・Ｅ・Ｄがある。その大きさは、ハエ囲蛹殻には欠損部分があるが、デジタルノギスによる計測に誤差もあるため、最大と最小値を外して求めた長さの平均は5.31㎜、最大幅2.24㎜である。この大きさは、ニクバエ科の囲蛹殻に該当しようが、条線を観察できるところからするとヒメクロバエ科の囲蛹殻の可能性もある[(5)]。

ハエ囲蛹殻は相接しており、かなり密な状態である。これらが並ぶ方向は大きく二つに分かれ、剣の軸と同じものと、それに直交するものである。囲蛹殻ＡとＣ・Ｄ・ＥおよびＧが軸の方向で相接して並び、その間に囲蛹殻ＢとＦ・Ｈが隙間を埋めるように並ぶ。わずかな時間差で蛹になるため

に隙間を埋めるように移動したものであろう。ハエの幼虫（ウジ）が蛹になるときは摂食場所から移動するため、遺体近く剣がおかれていたことが推測される。また、最も下端にあたるＡやＢの囲蛹殻は若干離れているので、より上部に蛹が密集した部分が存在したものと考えられる。布の上端が本来の形状を保っていないにもかかわらずちょうどそこでハエ囲蛹殻が収まっているのは、別部品の布等の存在を示唆するものかもしれない。

したがって､付着したこれらは被葬者の遺体から発生したウジによるものであり､その蛹化にあたって近くに置いてあった剣をくるんだ布などの外装にとりついたものである。実際の埋葬時には、剣身の大部分をおおっていたと思われるこの外装が取り外されたものと推定したい。



囲蛹殻の分布（X 線画像は 50KV から画像調整）

囲蛹殻サイズ (単位 ; ㎜)

	長さ	幅
A	5.48	2.13
B	4.15	1.96
C	5.38	2.14
D	5.79	1.91
E	5.62	2.22
F	6.09	2.34
G	3.41	1.89
H	5.44	3.10

デジタルマイクロスコープによる拡大
（中央にあるのは囲蛹殻 E）

第５図　剣表面に付着したハエ囲蛹殻

３．囲蛹殻の類例

本資料は石川県におけるハエ囲蛹殻の初めての確認例となる。坂本豊治氏によるとハエ囲蛹殻を確認できた古墳は全国で50例という[(6)]。筆者はこれらのすべての事例を把握していないが、ハエ囲蛹殻付着のプロセスを考えるために参考となる類例を確認する。

Ａ葉佐池古墳（愛媛県松山市北梅本町）[(7)]

松山平野最奥（最東）に位置する全長56m の前方後円墳で、6世紀後葉（須恵器の TK43型式期）に作られ、5基の横穴式石室が順次構築されている。発掘調査は1993年から行なわれ、同年実施された1号石室調査で未盗掘状態であることがわかり、人骨Ｂでハエ囲蛹殻が確認され、その存在が注意されるようになった。1号石室における埋葬の経過は、次のとおりである。

① TK43型式期に石室中央にある木棺Ａに人骨Ｃを納める

② TK209型式期に木棺Ａから人骨Ｃを出して側壁との間に移し、木棺Ａに人骨Ａを納める

③木棺Ｂに人骨Ｂをのせた状態で木棺Ａ右側に配置する

最終埋葬者である人骨Ｂの主に頭部から胸部にかかる範囲にハエ囲蛹殻が多量に付着していたのである。報告書の図版では、頭蓋骨・眼窩上部・下顎骨・左上腕骨・寛骨に付着したハエ囲蛹殻が掲載

されている。

木棺Ｂごと取り上げて人骨調査が行われ、その過程でハエ囲蛹殻の存在が確認されたためその付着状況の具体的な記述はないが、土中に埋まっていなかったことで生々しいハエ囲蛹殻が完全な形で保存されており、累々と重なっている状況がみられる。木棺Ｂは側面の部材がなく底板のみの形態である。木棺内には、左腰あたりに刀子が唯一副葬されており、これには囲蛹殻が付着していないようである。また、木棺小口外には4本の鉄鏃と鑿がおかれているが、これらにも囲蛹殻は残っていないようだ。これはすなわち、ハエの蛹化にあたって、これらの副葬遺物が遺体の近くになかったか、あるいはそれらをきれいにした状態で副葬したものと思われる。

Ｂ姥ケ入南遺跡（新潟県長岡市大字島崎）[8]

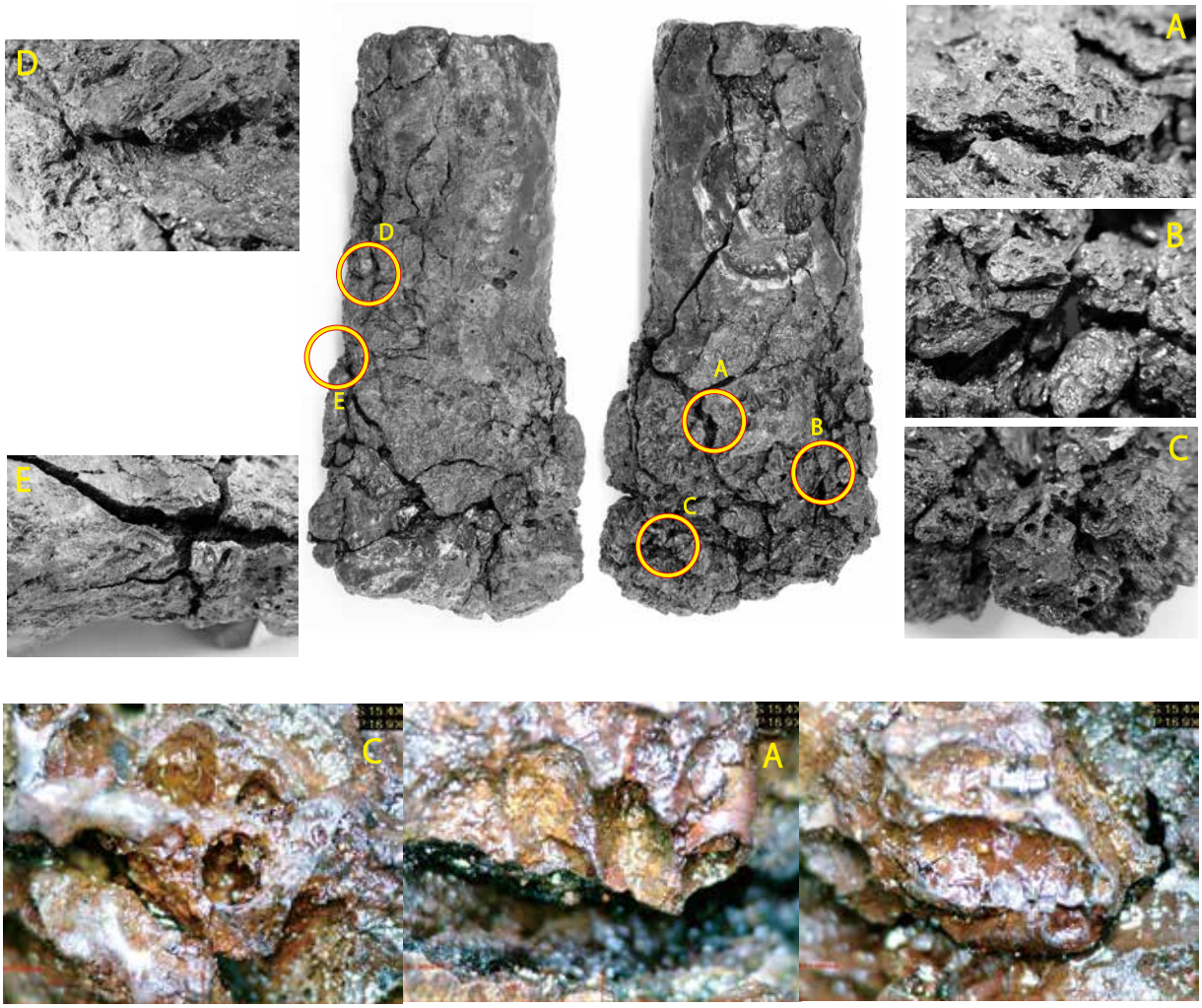
新潟県中越地方に位置し、東頸城丘陵が分岐する沖積平野に接する丘陵端部にあたる。近隣には古代城柵である沼垂城と記された木簡が出土し古代官衙と想定されている八幡林遺跡が南西1㎞弱に所在する。報告書では出土土器から弥生時代後期後半の墳墓としているが、墳丘平面形を見れば古墳時代前期に作られた方墳の可能性もある。墳丘中央で検出された土坑は埋葬施設と考えられ、棺の輪郭等は不明である。土坑内部から袋状鉄斧と剣が直交する状態で出土した。剣は被葬者の体側に置かれることが多いことから、剣の置かれた方向が木棺の長軸を示すと考えられる。そして鉄斧は木棺軸に対して直交した状態で置かれたのである。これらの遺物が墓坑端から約40㎝しか離れていないので、木棺小口に置かれたことがわかる。すなわち、斧は被葬者頭上、剣は頭右側に置かれていたものと推測したい。剣は抜き身で副葬され、斧も布等に包まれた痕跡はない。

ハエ囲蛹殻は斧にのみ確認できるが､袋部内部には付着していない。斧は保存処理が施されており、報告書の実測図によるハエ囲蛹殻付着のイメージと少し違和感がある。とくに袋部の合わせから刃部にかけて表面に描かれたハエ囲蛹殻は認められない。刃部を中心にハエ囲蛹殻が遺存している。それらは鉄の地金に直接付着している状況で、砂を取り込んだ錆には認められない。写真Ａや写真Ｅでは金属面に直接付着している状況で、写真Ａに写ったハエ囲蛹殻1個体の胴部の前か後の半分が欠けているものの輪切り状態である。写真Ｃのように丸い穴状となった部分も多く確認でき、普通の錆にはない特徴なので、ハエ囲蛹殻の胴部断面が見えているのであろう。さらに、錆とも異なるサクサクしたように見える部分が塊を構成しており、その中にハエ囲蛹殻断片や丸い穴となって見える囲蛹殻胴部が多数認められる。これは刃部を中心に広がり、報告書の実測図では錆膨れのような表現となっているが、この部分はよく見られる錆の状態とも異なる。ハエ囲蛹殻が幾重にも重なった状態が見て取れる部分があるので、この一見錆のように見える部分は、塊となったハエの蛹が鉄の錆化の中に取り込まれたものではないかと考えられる。

また、袋部の合わせ目には木棺の木質が付着している。袋部の地金と木質は密着しているが、刃部にかかる部分の木質には若干の隙間がある。その部分をよく観察すると、囲蛹殻のような輪郭の跡が認められる（写真Ｄ)。木棺内でウジが蛹化する時に木棺と斧の隙間に入り込んだのか、それとも蛹化した状態で付着した斧を木棺に置くことによって下敷きになったものなのか、2つの可能性が考えられる。

姥ケ入南遺跡のハエ囲蛹殻は、内部に節としての条線が認められ、黒瀬御坊山A2号墳と同じ特徴である。しかし、黒瀬御坊山A2号墳の囲蛹殻と比較してやや小さなサイズのイメージを受ける。黒瀬御坊山A2号墳と同じ方法によって大きさを平均すれば長さ5.12㎜、幅1.99㎜となる。やはり僅かながら小さい。国立感染症研究所昆虫医科学部 林利彦氏によりイエバエ科に同定されている。

報告書では、このハエ囲蛹殻付着理由についてモガリの可能性を提示しつつ、別な理由として、墳墓への埋葬後に墳丘封土流失により木棺が露呈し、露出した遺体に発生したハエに由来する可能性も指摘している。先の観察では、ハエ囲蛹殻とともに砂粒などの埋土に由来する錆に取り込まれた付着物が確認できないので、後者の可能性は低く、埋葬完了前にハエ囲蛹殻が付着したと考える。



デジタルマイクロスコープによる拡大

第６図　姥ケ入南遺跡出土鉄斧付着ハエ囲蛹殻（写真はすべて伊藤撮影）

D 那珂遺跡（福岡県福岡市中央区天神）[9]

福岡県福岡市中心部に位置する那珂遺跡の129次調査で検出された土坑墓（SK215）から出土した鉄器に囲蛹殻が確認された。SK215（長さ247cm、幅55cm）は深さわずか15cmであったが、小さな剣状の鉄器１点のみ出土した。また、類似する土壙墓（SK024）から須恵器が出土していることからSK215を６世紀後半と報告するが確証はない。そしてこの土坑の大きさでは、一般的な木棺幅とほぼ同じなので、木棺土坑墓の可能性もある。ハエ囲蛹殻は剣状鉄製品の一方面にのみ付着しており、もう一方面が床などに接して空間がなかったためであろう。このハエ囲蛹殻は埋葬された人から発生したものに違いない。被葬者と鉄器の土坑内での位置関係は示されないので想像するしかないが、蛹化にあたって近くに置かれた鉄器に辿りついたのであろう。報告では、SK215に遺骸を置いた状態で木蓋等するなどし、埋めずに墓を開放した状態によるモガリを想定しているものの、出土状況のデータが示されていないので、当否の判断はできないが、それを否定する材料はない。

E 結11号墳（島根県出雲市）[10]

結11号墳は出雲平野の南に位置し、近隣には荒神谷遺跡が所在する。墳丘は11×14mの方墳で、底面および側面が人頭大の礫からなる礫槨を埋葬施設としている。おそらく木蓋により埋められていたのであろう。頭部にあたる側に、蛇行剣1振、刀子3本、鉄鏃9本が副葬品として出土した[11]。ハエ囲蛹殻は剣把を中心に付着している。身部には木質が遺存しているので、装具に入った状態での副葬である。ハエ囲蛹殻は把口よりも把尻の方に密に並んでおり、検出状況に粗密がある。筆者が蛇行剣研究のために平成27年に資料調査を行ったときは、その存在に気づきながら、知識が十分でなかったためしっかり観察できなかったのは残念だ。当時の実測図および写真を見返すと、長さ5～6㎜、幅2㎜前後の長楕円形の圧痕が所せましと並んでおり、これが把口に行くにしたがってまばらとなるようである。そして、ハエ囲蛹殻が幾重にも重なったような状況ではなく、平板な印象である。頭部周辺が最もハエ幼虫であるウジが発生するようであり、遺体の近くに剣があったのであろう。

第7図　結11号墳囲蛹殻（出雲弥生の森博物館提供）

F 島内地下式横穴墓群（宮崎県えびの市島内）[12]

宮崎県内陸部に位置する。地下式横穴墓群は現在の宮崎県から鹿児島県大隅半島北部や川内川流域にかけて分布しており、特徴ある墓制として注目される。地下式横穴墓は、完全に密閉されている関係で有機物の保存が極めて良好であり、具体的な埋葬に関係する多くの情報が提供されている。本稿ではハエ囲蛹殻に限って検討したい。島内地下式横穴墓は現在200基近くが確認されているようだが、今回検討するのはそのうちの6基で、出土傾向を確認したい。なお、平成10・11年の調査ではそれに注意が払われることはなく、図化されていなかったが、資料の再検討により囲蛹殻の付着を確認できたものである[13]。

ST20では5体の人骨が確認され、4・5号人骨への副葬品にハエ囲蛹殻が付着していた。4号人骨頭部左側には鉄鏃1本とその骨鏃19本が一塊になっていたが、ハエ囲蛹殻は鉄鏃のみから検出された。5号人骨では頭部右側に長剣1本とその把あたりに刀子1本、剣鞘から少し離れて鉄鏃11本が出土しているが、ハエ囲蛹殻は剣や刀子にはなく一番離れた鉄鏃に付着していた。ST29では4体の人骨が確認され、1号人骨足元出土の刀子にハエ囲蛹殻が付着していた。追葬の3号人骨が1号人骨大腿骨に頭を載せているので、3号人骨に伴うハエ囲蛹殻の可能性もある。4号人骨は幼児で頭骨からやや離れて6本の鉄鏃にハエ囲蛹殻がある。これらの囲蛹殻が埋葬遺体由来である。ST31では7体の人骨が出土した。2号人骨頭部右に鉄鏃8本と小刀1本が出土し、そのうち鉄鏃2本にのみハエ囲蛹殻が付着していた。鉄鏃は一塊となっており、錆落とし等により脱落した可能性は否定できないが、錆に取り込まれたハエ囲蛹殻は容易に判別できるのでその可能性は低い。ST34では2体の人骨が出土し、1・2号人骨の中間にある鉄鏃5本にハエ囲蛹殻が付着していた。1号人骨近くの刀子にはハエ囲蛹殻はなく、より遠い5本の鉄鏃に付着している。2号人骨と鉄鏃5本は60㎝程度の間があり、少し離れた刀

子にはハエ囲蛹殻が付着していない。ST46では3体の人骨が出土し、1号人骨左腰付近に小刀1、鉄鏃4本が出土し、ハエ囲蛹殻が付着しているのは鉄鏃のみである。ST60では2体の人骨が出土した。2体は成人女性と幼児なので親子であろうか、相接している。人骨から70㎝ほど離れて出土した刀子にハエ囲蛹殻が付着していた。

地下式横穴墓は土中に密閉されるため有機物の遺存状況が極めて良好で、ハエ囲蛹殻の確認例も多い。今回の例はその一部だが、次のような傾向がうかがえる。それは、玄室へ遺骸を埋葬した後に遺体に生息していたウジから蛹化したハエ囲蛹殻の確実な例がないことである。ST29でその可能性を認めるが、ST20の5号人骨から最も遠い位置にある鉄鏃群に囲蛹殻が残されており、より手前にある刀などには見られないのは、玄室におかれた遺体からウジがはい出て蛹化したと説明しがたい。蛹化にあたってはより近場が真っ先に占有されるはずであり、そこになくてより遠い位置に残ることはありえないだろう。つまり、埋葬後に作られた囲蛹殻はないと判断できる。ST31もそうである。ST29やST34では人骨と囲蛹殻が離れており、埋葬状態にある遺骸からのウジであるのか証明できない。

4．埋葬過程とハエ囲蛹殻

棺内から出土した遺物にハエ囲蛹殻が付着するのは、ハエが大量に発生する源である人の遺体の存在があり、遺体とハエの間に存在する時間的あるいは空間的な位置関係が重要である。人が亡くなって土中に埋葬されるまでの間はどこかに亡骸を安置しなければならず、気候条件によって腐敗する過程が促進されたりあるいは遅延したりするだろう。現代社会でも人が亡くなった日の仮通夜、翌日の通夜、翌々日の葬儀を経て遺体の火化完了まで少なくとも3日程度を要するので、古墳時代の社会にあっては、首長のみならず一般庶民にあっても、それなりの日数を要したであろう。有名な『魏志倭人伝』においては、「其死有棺無槨　封土作冢　始死停喪十餘日　當時不食肉　喪主哭泣　他人就歌舞飲食　已葬　挙家詣水中澡浴　以如練沐」と、人の死から埋葬までの風俗記述がある。服喪としての「始死停喪十余日」を一般的には「モガリ」といい、「殯」という文字をあてる。

和田　萃氏による「殯」の研究は非常に重要である[14]。私たちが用いる「殯」という字義には、魏志倭人伝に記された弥生時代以来の「モガリ」と中国から王権に取り入れて倭独自の様式に変えていった殯宮儀礼の二つが含まれる。古墳研究において「モガリ」を考察する場合、両者を同じ視点あるいは混同しているのが現状であろう。モガリを文献から情報を得るときに、紀記記載の事項を全て網羅する研究も少なくないが[15]、これは方法論的に意味のあることであろうか。つまり後者は和田氏が明らかにしたように、後嗣継承の意味合いとしての喪がある。地域の首長や有力な共同体構成員に後嗣を選ぶような殯宮儀礼的要素が全くないとは言えないが、両者を同じ土俵に乗せて論述することは妥当ではないと考える。

ハエの活動は一般的に4月頃から11月頃とされている。遺体へのハエの集合は、ニクバエ、クロバエ、ギンバエ、イエバエが時間差をもって集まってくるが、その状況は死体の腐敗進行により異なる。暑い夏季においては早く腐敗が進みハエの集まりも早くおびただしいだろうが、初春・晩秋のような冷涼な気候では大量のハエが夏ほどたかることは少なく、寒い冬季ではハエの活動は見られない。死者の社会的階層や経済的な格差により水銀朱を手に入れるなど腐敗を抑える効果が期待された物質を用いることがある。最もハエの集りやすい頭部や上半身を中心に水銀朱を塗布する事例が多く認められ、これによりウジの発生を遅らせることができたのであろう。ともかく、人の死によりハエの発生はほぼ不可避であり、埋葬時にハエ・ウジへの対策が必要となる。考古学的に確認されたハエ囲蛹殻

は、地域の大首長というよりも地域の中の有力者あるいは有力家族といった人々の墓の検出例が多く、古墳時代に一般的行われていた「モガリ」の姿を教えてくれる。

さて、古墳への埋葬過程をきわめて単純化すれば以下のようになる。ただし、粘土槨のような竪穴系埋葬施設と横穴式石室の様な横穴系埋葬施設とは、埋葬への思想が異なり、埋葬手順も大きく異なるが、ハエ囲蛹殻がどのような状況で付着する可能性があるのかを考えるために、あえて単純化した。

フェイズ1：人の死・・・a モガリの準備、b 埋葬場所の準備（寿墓や追葬もある）
フェイズ2：安　置・・・a 仮設の場所と常設の場所、b 埋葬場所、c 棺の有無
d 物品のお供え（最終的に副葬品）、e 頭部・上半身への水銀朱塗布、
f 埋葬準備
フェイズ3：埋　葬・・・a 入棺の機会、b 先行棺への対処、c 副葬品の配置、d 各種儀礼、
e 埋戻し・閉塞

埋葬にかかる各種儀礼は、このような局面を集団の階層的な立場や社会的な位置によってされながら進めて行なわれた。さらに埋葬される施設の状況（たとえば石棺であるとか、木棺が現地組み立てなのかそうでないかなど）により、様々に手順や方法が変わっていくと思われる。古墳から出土する器物にハエ囲蛹殻が残されるためには、ハエが活動する時期に一致していることが大前提であり、モガリが開放的な場であることなどが田中良之氏によって整理されている[16]。そして金属錆化によってこれら有機物が保存されるのであり、それ以外であれば分解されて残らない。ハエ囲蛹殻が付着する条件を人との位置関係において確認する。

フェイズ1では、死亡当日にあっては死者を適当な場所に安置したことであろう。それがフェイズ2と同じ場所かもしれないし、あるいは居住地の住居内かもしれない。

フェイズ2は、特定場所に埋めるという埋葬までの期間でありいわゆるモガリの局面である。a とb は安置する施設である。モガリのため建物が常に集落の中にあるのか、それとも適宜その場で設営されるのか。あるいはまた、急ぎ土坑を掘って墓穴を用意している場合があるかもしれない。c では遺体が棺に入った状態なのかそうでないのか、葉佐池古墳1号石室 B 棺のように底板のみの棺も少なくいないだろう。d は遺体とお供えとして物品（副葬品となる）との位置関係である。遺体が棺に入っていたならばお供えの物品は棺の中かどうか。さらに e の遺体の腐敗を抑えるための水銀朱の塗布はこの段階だろう。

死後数日内にニクバエやクロバエ、イエバエが餌を求め卵などを産み付けに集まるので、ウジが湧いているのをモガリ参加者は目の当たりにすることになる。ハエは卵や幼虫から囲蛹殻を経て成虫となるのに10日前後かかるといわれており、フェイズ2が魏志倭人伝にあるように10日程度を要するのであれば、その後半にハエの幼虫は蛹になるために餌の場である遺体から離れ近場にある乾燥した場所で囲蛹殻となる。もちろんハエの産卵はずっと継続しているので、遺体にはウジが湧き立ち、その周囲に多くの囲蛹殻が付着している状況が推測される。このように、近くにある物品にウジが付着して囲蛹殻となるのであろう。

この場が仮設の場所であれば、いわゆる喪屋とした簡便な建物になるだろう。そしてこの建物が埋葬場所にあれば、竪穴系埋葬施設の墓坑あるいは棺の周囲に柱穴痕跡として確認できるはずである。この場合、モガリから埋葬の儀式は連続して行われ、遺体を移動することなく棺の蓋をして埋め戻す。喪屋が横穴系埋葬施設に立つことは想定しがたく、石室入り口などの墳丘に接するような場が論理上

可能である。古墳における建物遺構の確認はまれであり、したがって、フェイズ2の場は古墳とは異なる場所が多かったと考えられる。

フェイズ3に移行するfの準備もおそらくこの場で行われたと思われる。持ち運べる棺であればこの段階に遺体を棺に入れることができ、現場で組み立てる棺であれば、入棺直前の姿にまで整えたことであろう。そこでは器物や遺体などに付着しているウジやハエ囲蛹殻など汚く穢れたものを清浄にする作業があったのではないかと想像する。黒瀬御坊山 A2号墳に付着していたハエ囲蛹殻の大部分は、おそらくこの作業により排除されたのではないかと考える。

フェイズ3は埋葬であり、主に儀式である。aは被葬者が棺に入ったまま古墳に来て納められるのか、それとも現場で棺が組み立てられそれに納められるのかである。bの横穴系埋葬施設であれば先行して葬られた棺が副葬品とともに整理されて埋葬場所が確保される。c・dでは棺安置後に副葬品が献じられ儀式が執行されていく。フェイズ2で遺体や副葬の物品についた囲蛹殻を整理するが、すべて除去することは不可能だろう。ウジがわいた状態となった被葬者の遺体がどのような姿になっていたのであろうか。想像するしかないが、膨張して崩れる肉を抑え人としての形を保つ方策がとられたことだろう。このような状況では遺体にウジがいる状態で埋葬されることになる。そして棺は土中で密閉されるため、ウジから蛹、成虫になったとしても生きながらえることは難しく、真っ暗闇の中で幼虫段階から蛹化することは無理だろう。つまり、埋葬された後でのウジの蛹化は想定しがたく、前項における島内地下式横穴墓で埋葬後のウジの蛹化はないという推定と整合する。

以上の考察より、鉄製品を中心に付着しているハエ囲蛹殻は、埋葬前に付着したものであり、モガリから埋葬に至る局面で、埋葬のための清浄化過程を経て施設におさめられたのである。

まとめ

加賀市黒瀬御坊山 A2号墳出土剣にハエ囲蛹殻が付着していることを確認し、その意味を考察した。この事例は、北陸で2例目、本県では初例となる。新潟県姥ケ入南遺跡出土鉄斧に付着したハエ囲蛹殻が国内最古の事例となろう。魏志倭人伝にはモガリが行われている様子が記述されているので、姥ケ入南遺跡例はそれを具体的に証明するものである。ハエ囲蛹殻の確認例は、古墳時代中期以降のものが多く、特に後期にいたって多いようだが、古墳時代を通して確認できる意義は大きい。

ハエ囲蛹殻が鉄器を中心に付着して残っているのは、鉄の錆化によるものであるが、埋葬の時期がハエの活動時期と一致することと、ハエが活動できるような明るく開放的な場所にあったことの二つの要因が重なっていることが重要である。さらに本考察においてその条件を付け加えたい。それは、ハエ囲蛹殻が付着するのは、モガリの段階であり、埋葬後の段階ではない、ということである。

そしてハエ囲蛹殻を子細に観察しそれが付着する状況を復元すれば、①埋葬される時には、遺体とともにモガリで献じられた器物が清められることが基本であり、②ハエ囲蛹殻が付着した器物としないものの両者が副葬品で混在する場合、器物の置かれた位置や、器物を献じた主体者が異なる可能性も考えねばならない。

筆者はハエ囲蛹殻についてこれまで考えたことはなく、むしろ知識の乏しいままこれまで古墳研究に取り組んでいた。今回の確認作業を通して、この痕跡を見過ごした事例が多いのではないかと感じたのである。モガリから埋葬に際し清浄にするのは当然だと思うが、モガリ最中においても衣服の取り換えや火をたくなどの行為により発生する煙に防虫・防腐が予想される[(17)]。しかも一連の儀礼は100m 超の大型前方後円墳を築く首長層から10m 前後の古墳を築いた共同体構成員や有力構成員までの階層的な格差があり、同じモガリ儀礼を想定出来ようか。さらに地域的な特質も考えられ、古墳と

しての埋葬儀礼を一つの定式化したものとしてとらえることに不安を感じるのは、私だけだろうか。

最後に、姥ケ入南遺跡出土剣と鉄斧の資料調査では長岡市立科学博物館の丸山一昭氏にご配慮いただいた。また出雲弥生の森博物館の坂本豊治氏にもご教示ただいた。感謝いたします。

註

1　古代歴史文化協議会とは、埼玉県、石川県、福井県、三重県、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、福岡県、佐賀県、宮崎県の14県で構成され、古墳時代を中心としたテーマにより調査研究を進めている。協議会のホームページでは、「個々の地域的な研究だけでは見えにくかった日本の大きな古代史の流れを解明するため、古代歴史文化にゆかりの深い14県で連携し、平成26年度から共同調査研究を進めています。第1期（平成26年度～平成30年度）は『古墳時代の玉類』をテーマとし、その研究成果を展覧会や成果図書で公開しました。第2期（令和元年度～令和4年度）は『古墳時代の刀剣類』をテーマとし、共同調査研究をおこなっています。」と事業の目的と活動内容を掲載している。（https://kodairekibunkyo.jp/）

2　浜崎悟司ほか2002「加賀市吸坂・黒瀬古墳群」石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター

3　栗田茂敏ほか2003「葉佐池古墳」松山市教育委員会

4　報告書では、1・2号墳とも墳丘規模が明示されず、筆者の理解により墳丘規模を出した。また、1号墳は円墳と報告しているが、尾根筋の周溝を直線的に切って墳丘裾も直線であることから方墳と判断した。

5　田中良之2003「人骨及び付着ハエ囲蛹殻から見た殯について」『葉佐池古墳』松山市教育委員会。「肉眼的にも5㎜に満たない小型のものと5～7㎜程度の大きなものの大小2種類あり、（中略）囲蛹殻によるハエの同定を、九州大学大学院比較社会文化研究院生物多様性講座蔦洪教授に依頼した。その結果、大小2種類あると思われたうち、大きめのものはニクバエ属であり、小さ目で長軸に直交して条線を有するのがヒメクロバエ属である（後略）」により、ハエ囲蛹殻のサイズにかかる記述を参考にした。

6　坂本豊治2020「開館10周年記念特別展『出雲・上塩治築山古墳とその時代』」『出雲弥生の森博物館だより』第39号　出雲弥生の森博物館

7　註3と同じ

8　渡邊裕之ほか2010「立野大谷製鉄遺跡、姥ケ入製鉄遺跡、姥ケ入南遺跡」新潟県教育委員会、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

9　藏冨士寛2012「那珂62」福岡市教育委員会

10　註6に同じ

11　宍道年弘1985「結11号墳出土の蛇行状鉄剣」『八雲立つ風土記の丘』№73　島根県立八雲立つ風土記の丘

12　中野和浩ほか2001「島内地下式横穴墓群」えびの市教育委員会ほか

13　中野和浩ほか2017「島内地下式横穴墓群Ⅴ、灰塚地下式横穴墓群」えびの市教育委員会ほか

14　和田　萃1973「殯の基礎的考察」『論集　終末期古墳』塙書房（初出：1969「殯の基礎的考察」『史林』第52巻第5号　京都大学史学研究会）

15　田中良之2017「殯再考」『骨から見た古代日本の親族・儀礼・社会』すいれん舎（初出：2004「殯再考」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会

16　註5に同じ

17　註15に同じ

七尾市矢田遺跡「稲の種子名列記木簡」について

山内　花緒（石川県教育委員会事務局文化財課）
和田　龍介（石川県埋蔵文化財センター調査部）

令和３年度に実施した七尾市矢田遺跡の発掘調査で、平安時代前期（９世紀）の木簡（「稲の種子名列記木簡」）が出土した。稲の品種名を二種類一組として計八種類を列記した、全国初の出土事例である。平安時代前期における稲の品種管理の実態や、七尾南湾（加嶋津）南東岸域における在地有力者の活動を知るうえで、非常に重要な発見といえる。

１．はじめに

七尾市万行町～矢田町に所在する矢田遺跡の発掘調査において、古代の木簡が出土した。遺跡や調査の概要については、発掘調査略報（10～12頁）を参照されたい。

木簡は出土文字資料、すなわち考古学における出土遺物であると同時に、文献史学における一次史料である。両学問の手法は異なっており、本資料を扱う際に慎重なプロセスが不可欠であることは言うまでもない。まずは基本的な情報を広く共有し、多視点からの批判的検討を通じて初めて、地域史への位置づけが可能になる。

本稿の目的は、調査担当者として出土時の情報を共有すること、釈文について現在の試案を整理しておくことにあり、今後の様々な検討や発掘調査報告書の刊行に向けてのマイルストーンとして設定している。構成としては、調査時の背景状況を報告したのち、記載に関する考察内容をまとめ、結びに矢田遺跡周辺の歴史環境及び古代における稲の管理について若干の私見を述べる（山内）。

２．木簡の出土状況

木簡は調査地北東側のＡ区最北端（A-1区）で出土した。Ａ区は調査区全体が河川跡で、明確な遺構は検出していない。青灰色の粗砂～砂層が厚く堆積しており、Ｂ区のような粘性の強いベース土は確認されなかった。上部に黄褐色の礫層や粗砂～砂層、黒～暗灰褐色のシルト層が堆積しており、これらの層に古墳時代～古代の遺物が含まれていた。洪水により礫や粗砂が一気に流入した時期と、有機物を含む泥が沈殿した時期を、当該期間中に幾度か繰り返したものと思われる。

木簡が出土したのは、黒褐色を呈するシルト層が不整形に溜まった地点である。SX01と仮称したが、遺構ではなく自然堆積によるものと考えている。調査着手後に遺構検出作業を行っていた際、裏側を上面として出土し、周囲に他の遺物は確認されなかった。前述の通りＡ区は河川跡であり、特に北東側については、土層の堆積状況からみて北東～南西方向への流路だったと推測する。

時期については、９世紀後葉（田嶋編年Ⅵ$_1$期）にあたると考えており、調査状況に基づく根拠は以下の二点である。第一に、Ａ区から出土した古代の遺物の時期は、８世紀中頃（Ⅳ$_1$期）と９世紀後葉（Ⅵ$_1$期）に集中する。木簡が出土した黒～暗灰褐色のシルト層については、後者の出土が多く、同じような時期の流れ込みだと考えられる。第二に、Ａ区からはⅥ$_1$期以降の遺物が出土しておらず、当該地点における下限を示す。以上により、９世紀後葉（Ⅵ$_1$期）、すなわち平安時代前期の遺物と判断しており、この時期は後述する木簡の性格・記載内容と矛盾しない。

注目できる点として、Ａ区内から小型木製祭祀具が出土している（11頁）。共伴遺物により９世紀後葉（Ⅵ$_1$期）にあたることが明確な遺物であり、木簡と同時期に使用・出土地の付近で廃棄され、

流れ着いたものと考えられる。

昨年度の調査において当該期の集落は検出されていないが、本木簡や木製小型祭祀具を製作・使用した集団が付近にて活動していたことは明白である。今年度以降の発掘調査、及び出土遺物等既往の調査成果の精査により本遺跡、ひいては矢田・万行地域の研究の深化が期待される。（山内）

３．木簡の形状・釈文

出土した木簡は１点である。長辺16.3cm、短辺4.2cm、厚さ0.8cm、針葉樹（スギか）柾目材。成形は上端キリオリ、左端キリオリ→ケズリ、右端キリオリ、下端キリオリ→ケズリで完形品である。表面は平坦・平滑だが、裏面上半左側が厚く板材としては不定型なため、何らかの材を転用したものと考える。

墨書は表裏面に確認できる。表面は２行取り、小ぶりで手慣れた行書体で、筆の流れからは比較的速い筆遣いが想起できる。名称＋数字＋名称の組み合わせを計４つ配置する。裏面は１行で大ぶりな文字を８文字記し、表面とは別筆と考える。木簡の釈文については、鈴木景二氏（富山大学教授）、平川南氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）の指導を受け和田が作成した。現時点での木簡赤外線画像と釈文を第１図に記す。

表面に見える名称は、１行目下段に見える「長比古」から稲の品種名ではないかと推測し、平川南氏が種子札木簡解読の際に用いたように[※1]、近世の農書等に記される品種名[※2]を当たったところ下記のような知見が得られたため、稲の品種名を列記したものと判断した。

加呂古：木簡初見。「かるこ」「加留子」「苅子」として、東北地方～関東地方、北陸の農書に見える。晩稲。下の「二」は何らかの数量を示すと思われるが意味不明（以下同じ）。

矢波須：木簡初見。加賀国石川郡で記された農書『耕嫁春秋』に「矢筈彌六」（やはずやろく）と見えるのをはじめ、「矢筈」「矢はず」として見える。中稲。

長比古：木簡では福島県矢玉遺跡種子札「長非子一石」[※3]、鳥取県青谷横木遺跡種子札「長比子」[※4]、平安時代の和歌に「ながひこのいね」として見える。後世の農書には見えず[※5]、断絶した品種の可能性がある。

三古□（郎ヵ）：木簡初見。近世農書では「三九郎」が見え、コ＝クで音通して同一のものと推定した。晩稲。『耕嫁春秋』に「三九郎」、『加賀国産物志』に「三九郎イネ」として見える品種。

赤母知：秋田県小谷内遺跡種子札「赤餅壱斗六升入」[※6]に見えるものと同一か。糯米の品種「赤餅」で、現代にも残る品種。『加賀国産物志』に「赤モチ」「アカモチ」として見える。

支□□：3文字。2文字目は「那」ないし「郎」が推定できるが、墨痕が薄く未確定[※7]。木簡・近世農書ともに同定できない品種で、初見になるか。

加真女：「かまめ」と読むか。木簡・近世農書ともに同定できない品種名。

支□：2文字。3文字目は詰まるもののスペースはあるが墨痕を確認できない。上記「支□□」と同品種と推定すれば二文字目は残画から「那」ないし「郎」とも補えるが、墨痕が薄く未確定であり、また三文字目は墨痕がない。これまでの［品種＋数字＋品種］書式を踏襲しないのであれば、「三支□」なる品種名も想定できるが、木簡及び近世農書で確認できない。不詳。

裏面は比較的墨痕が明瞭なものの、書き手の癖が強く文字を当てはめるのが困難であったが明らかに表面の字体と異なることから別筆と判断した。3文字目・4文字目は墨痕が薄く判読不能。8文字目は「帳」ないし「振」を上げ得たが、補うにはなお検討が必要であり今回は□のままとした。「長王」「六ヵ大道」のような特徴的な語句から、何らかの典籍・経典を見本とした習書の可能性があり、表面の内

・「加呂古二矢波須　長比古一三古□〔郎カ〕
赤母知二支□□〔那カ郎カ〕　加真女三支□〔那カ郎カ〕」
・「長王□□□大道□〔六カ〕」

一六三×四二×八　〇一一型式

赤外線画像（ほぼ原寸）

第１図　矢田遺跡第１号木簡赤外線画像と釈文

容とは無関係である。

本木簡は、これまで平川南氏等の研究によって明らかにされた種子札木簡とは以下の点で相違がある。

(1) 種子札木簡は原則1枚1品種であるが、本木簡は複数の品種が列記される。

(2) 本木簡に記される数字は、種子札木簡に見られる稲量や日付とは異なり、性格を示すような単位等が付されていない。

(3) 種子札木簡は種籾俵に添付・挿入するため多く付札状の形状をとるが、本木簡は物品に添付するような形状をとっていない。

これらの点から種子札木簡とは異なる性格のものと考える。８名称中５種が比定可能なことから、本木簡に登場する名称は稲（粳・糯）品種名と考え、稲の複数の品種名を列記した木簡として評価したい。「品種名＋数字＋品種名」をワンセットとして４セットが記されているものと理解できる。品種には、近世の農書にも見え比定が可能なもの、初見品種、古代には品種名としてあったが近世農書中に見えない品種、の３種類があり、また糯品種が混じっていることも特徴である。その性格としては、①田毎に作付けする品種を記したもの。これは傍証として天平宝字五年賀茂馬養啓[※8]に「合二町之中〈南牧田一町殖稲依子北牧田六段殖越特子〉四段荒」とあり、南の牧田1町に「稲依子」、南の牧田６段に「越特子」を植えたことがわかる。また続けて「今明日間尓越特子可苅」とあり、両品種で収穫時期が異なる可能性を示唆しており[※9]、８世紀の段階で（収穫時期の異なる）複数品種を田毎に植え分けている状況をうかがえる。本木簡には糯品種が見えることから、粳・糯品種の作付け管理がなされていた可能性も指摘できる。②保管・出荷等管理の書き付け（伝票）、③品種改良の組み合わせ、などが考えられる。いずれにせよ、複数品種を管理しながら稲作を行っていた実態がうかがえ、古代の農業経営の一端を明らかにする資料として重要である。（和田）

４．遺跡周辺の動向と古代における稲の管理

ここで矢田遺跡の地理的・歴史的環境を概観しておきたい。古代における本遺跡は、海岸線から500ｍ以内に立地しており、鹿嶋（加嶋･香島）津を臨む要衝に位置していた。既往の調査に基づけば、主に弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代前期といった３時期に遺物のピークがみられ、各時期から特徴的な木製品が出土している。弥生時代中期には異形木製品が用いられており、祭祀に関連した特殊な製品であった可能性がある。古墳時代初頭になると、本遺跡から東へ１km ほどの場所で、万行遺跡が活況を呈する。直径40cm の柱を使用した破格の規模をもつ大型倉庫群であり、建築に要する高度な測量・建築技術や多くの労働力に鑑みるに、ヤマト政権が成立に関与したものと考えられている。一方、矢田遺跡は主に古墳時代中期に活動しており、木製刀把・鞘や建築部材などが出土している。刀把や鞘、手づくね土器と滑石製双孔円板のセットなどは、水辺の祭祀にまつわる遺物群[※10]だと考えられる。溝として利用したと思われる自然流路から多数の木製品・完形に近い土器が出土しており、付近に豪族居館が立地していた可能性がある。続く古墳時代後期には、矢田遺跡の北側で、市内最大の前方後円墳である矢田高木森古墳が築造される。古代にかけては遺物の出土がまばらになるが、平安時代前期になると再び数を増す。稲の品種管理を示す本木簡や、木製小型祭祀具といった特殊な遺物が出土しており、付近での在地有力者の活動を反映している。

以上のように、弥生時代から古代にかけ、中心地の移動はあるものの地域全体としてはおそらく連続的な勢力の営みがみられ、祭祀や稲作の管理を行う在地有力者の存在を色濃く感じさせる。

さて、改めて鹿嶋津について考えてみたい。『七尾市史』によれば、七尾西湾・南湾はかつて能等

国造が支配した海であり、沿岸域は能等国造のクニの本拠地であったと記述されている[※11]。この論によれば、中央から派遣された越中国司大伴家持の鹿嶋津航行は、在地の有力豪族であった能等国造が支配する「能登の海」の視察が目的であったとする。これらの説に依拠すれば、矢田遺跡は七尾南湾の南西岸に位置しているため、能等国造にあたる能登臣一族が拠点としていたエリアであった可能性は高い。

興味深いことに、古墳時代以降本遺跡周辺で能登臣が活動していたとする仮説は、稲の品種管理に関する平川氏の指摘と符合する。氏は古代における地方での稲の品種管理について、「郡司層などの地方豪族による強力な支配により、十分に統制・管理しなければならなかった」[※12]と推論している。特に９世紀の気候変動に対応し、多数の品種を管理・経営できたのは、中央から派遣された官人ではなく、その土地の風土に通じた従来の在地勢力にほかならないという。９世紀後葉の鹿嶋津沿岸域において、複数の稲が体系的に管理されていた実態を描く本木簡が出土した意味は大きい。

いうまでもなく、稲は国家財政の基盤及び流通経済の物品貨幣として特別な意味をもった生産物であり、古代国家そのものを支える食糧[※13]であった。稲作とは古来「糧を支えるなりわい」[※14]であって、けして安易に行われたものではない。本木簡や多くの種子札が用いられた平安時代前期には、早・中・晩稲の三区分、優性品種の選別・管理、といった体系的な管理方法が、既にかなりの程度完成していたと考えられる。それらは、弥生時代以来蓄積された技術や慣習に基づき、有力豪族などの在地有力者による管理体制下で行われ、気候変動等に順応していったのであろう。

いずれにせよ、稲の種子名列記木簡が矢田遺跡で出土したことは、平安時代前期（９世紀後葉）の鹿嶋津南西岸において、稲の管理主体が活動していたことを明示する。その主体は、古墳時代以来の能登地域の在地首長ないし能等国造であり、古代には郡領氏族として活動していた能登臣であった可能性がある。本木簡の出土は、９世紀段階で稲の管理システムが既に成立しており、地方において複数の稲品種が体系的に管理されていた様子を鮮やかに描き出す。（山内・和田）

５．終わりに

以上、七尾市矢田遺跡から出土した稲の種子名列記木簡について、現時点での検討内容を雑駁に記した。本遺跡における発掘調査は今年度も継続しており、新たな成果が期待される。令和３年度調査成果についても、遺物の洗浄に着手したばかりであり、報告書刊行に向け整理を進めている。

地域史への位置づけについても、課題は累積している。今回は鹿嶋津に注目したが、稲作という視点でいえば、能登半島の穀倉地帯である邑知地溝帯の北東端に位置することや、七尾市吉田Ｃ遺跡から出土した種子札「三国子」[※15]との関係にも注目すべきである。七尾市による調査で出土した瓦質土器をはじめ、朝鮮半島とのつながりがあった可能性も無視できない[※16]。七尾市域全体や、さらに広範囲での多角的な比較研究が行われることを期待し、筆をおくこととする。（山内）

本木簡の釈読にあたっては鈴木景二氏、平川南氏及び吉永匡史氏（金沢大学准教授）にご指導を賜り、調査に際しては北林雅康氏（七尾市教育委員会）にご指導・ご協力を賜った。謹んで御礼申し上げます。

〔註〕

1　平川南「種子札と古代の稲作」(『古代地方木簡の研究』2003)、「古代の種子札に記載された品種名の多様性と変遷」(佐藤洋一郎編『日本のイネ品種考　木簡からDNAまで』2020)

2　日本農業発達史調査会『日本農業発達史　明治期以降における　第2巻』1978、盛永俊太郎他『享保元文諸国産物帳集成　第1巻』(加賀・能登・越中・越前)1985、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構がweb上で公開するデータベース「農業生物資源ジーンバンク」植物遺伝資源の検索(特性)(https://www.gene.affrc.go.jp/databases-plant_search_char.php)を参照した。

3　石田明夫「福島・矢玉遺跡(第17号)」(木簡学会『木簡研究22』釈文の訂正と追加　2000)

4　鳥取県埋蔵文化財センター『青谷横木遺跡　Ⅱ遺物編』2018

5　小川正巳「史料に見る近江の稲・米」(『農業及び園芸』95-6、2020、養賢堂)では、「なお『成形図説』に栽培品種としての「長日子」があることを追記しておきたい」とあるが、筆者が確認した(国立国会図書館デジタルコレクションの刊本『成形図説』および国本社復刻本第3巻)限り確認できなかった。

6　高橋学・五十嵐祐介、山本崇「男鹿市小谷地遺跡出土の木簡」(秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要　第23号』2009)。報告では糯の品種名ではなく「赤色の餅」の意と推定しているが、本木簡を種子札とすれば糯品種として理解するのが妥当であろう。

7　註2ジーンバンクでは糯品種である「支那糯(しなもち)」がヒットするが、「支那」という語句自体が江戸時代中期以降に用いられること(『日本国語大辞典』「支那」参照)や、近世農書に「支那」を冠する品種名が見られないことから「支那□」の可能性は低いと考える。

8　『大日本古文書』巻15(続々修１８ノ３断簡６(６)裏)

9　平川2003前掲書も「「稲依子」は「越特子」と収穫時期の異なる品種かもしれない」と指摘する。

10　池淵俊一「水利開発と地域権力」(『考古学研究』第68号第３号　2021)

11　森田喜久男「第一節　能登国の立国」(『新修 七尾市史14 通史編Ⅰ原始・古代・中世』第三章　2011)

12　平川南「稲の品種と農業技術　管理された稲作」(『交通・情報となりわい　甲斐がつないだ道と馬』2020)

13　平川2003前掲書

14　佐藤洋一郎『米の日本史　稲作伝来、軍事物資から和食文化まで』2020

15　岩瀬由美『吉田Ｃ遺跡』2004　石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

16　七尾市教育委員会『矢田遺跡』1986

〔参考文献〕

川畑誠「加嶋津と古代能登　邑知地溝帯の動向を中心に」(『北陸と世界の考古学　日本考古学協会2021年度金沢大会資料集』2021)

戸澗幹夫・北林雅康「第二章　古墳築造と地域社会」(『新修 七尾市史14 通史編Ⅰ原始・古代・中世』2011)

石川県埋蔵文化財情報
第 47 号

発行日　2022（令和４）年９月30日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731
URL　http://www.ishikawa-maibun.jp
E-mail address　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　㈱ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター